

五郎兵衛谷古墳

1978

松山市教育委員会

序 文

ふと通りかかった山道や田圃等で、偶然見つけた石器や土器片から私達は果てしなく続く想像の世界が開ける心地がして、当時の人と物のかかわりあいにそこはかとなく、そこにロマンを感じる人は多いこと思います。これらの埋蔵物は、長い歴史の過程において、人間が作り出した貴重な文化財であり大切な遺産であります。

昭和47年に古照遺跡の壇材発見から7年を経た今日、最近の太野安萬侶の墓誌発見、あるいは福井山古墳出土の金象嵌の鉄釦銘文等により埋蔵文化財に対する世間の関心が一段と高まってきたことは、誠に喜ばしいかぎりであります。

松山市においても昨年の久米来住町の長隆寺遺跡発掘調査の結果、国の史跡『来住庵寺跡』として指定を受けるのも間近であり、これを機にますます文化財保護行政が充実するものと確信するものであります。しかし、埋蔵文化財の発掘調査は、ただ単に遺跡を掘りおこしたりすることのみがその目的ではありません。まず第一には、明確な目的を持ち次には常に正しい方法と正しい技術に基づいた発掘でなければならないものであります。文化財は歴史上の事実あるいは祖先の人々の生活や社会の仕組み等を正しく知り、理解するため欠くことのできないものであり、わが国の将来の文化向上に資するために行うべきものであります。

本報告書は、昭和52年4月23日～6月27日の間に発掘調査したものでありますが、この報告書が少しでも皆様方のご参考になればこれにすぎたるものはありません。

最後に、本調査に当たり終始協力いただきました松山市公営企業局、ならびに協力くださいました多くの方々に対しお礼を申しあげます。

昭和54年3月20日

松山市教育長 関 谷 勝 良



例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会が、松山市公営企業局の鷹ノ子第二浄水タンク建設にともない、鷹ノ子古墳群の内、五郎兵衛谷古墳支群の、1～6号墳について発掘調査記録である。

2. 発掘調査体制

調査主体　松山市教育委員会

教育長	関谷　勝良
〃次長	竹田　恵（前任）
〃次長	森田富士弥
文化教育課長	藤原　涉
〃課長補佐	岸　郁男
第二係長	西　伸二
主任	西尾　幸則
調査担当者	森　光晴（指導主事）
調査員	池田　学（非常勤嘱託）
〃〃	松村　淳（　〃　）
調査補助員	越智　武志
〃〃	沖野　新一

3. 調査協力者

末光祐之・栗林光男・田中勝美・黒川政宏・高市盛雄・藤久　誠・中須賀国義・三村正博・仙波扶容子・海稻邦子・仙波みどり・仙波一二三・重松孝子・中須賀孝之・峯木典子・児島つづ子・舛岡アユミ・仙波千春

4. 本書の作成にあたっては、遺構測量は池田・松村・越智・沖野が担当し、遺構写真撮影は池田・越智・沖野が、遺構製図は池田・松村・森が担当、遺物整理及実測・写真撮影、本書の執筆は森　光晴がおこなった。

5. 発掘調査にあたっては、松山市公営企業局をはじめ、工事請負者二神建設株式会社の積極的な協力を得た。

6. 出土遺物は、古照資料館に収蔵陳列して一般に公開している。

本文目次

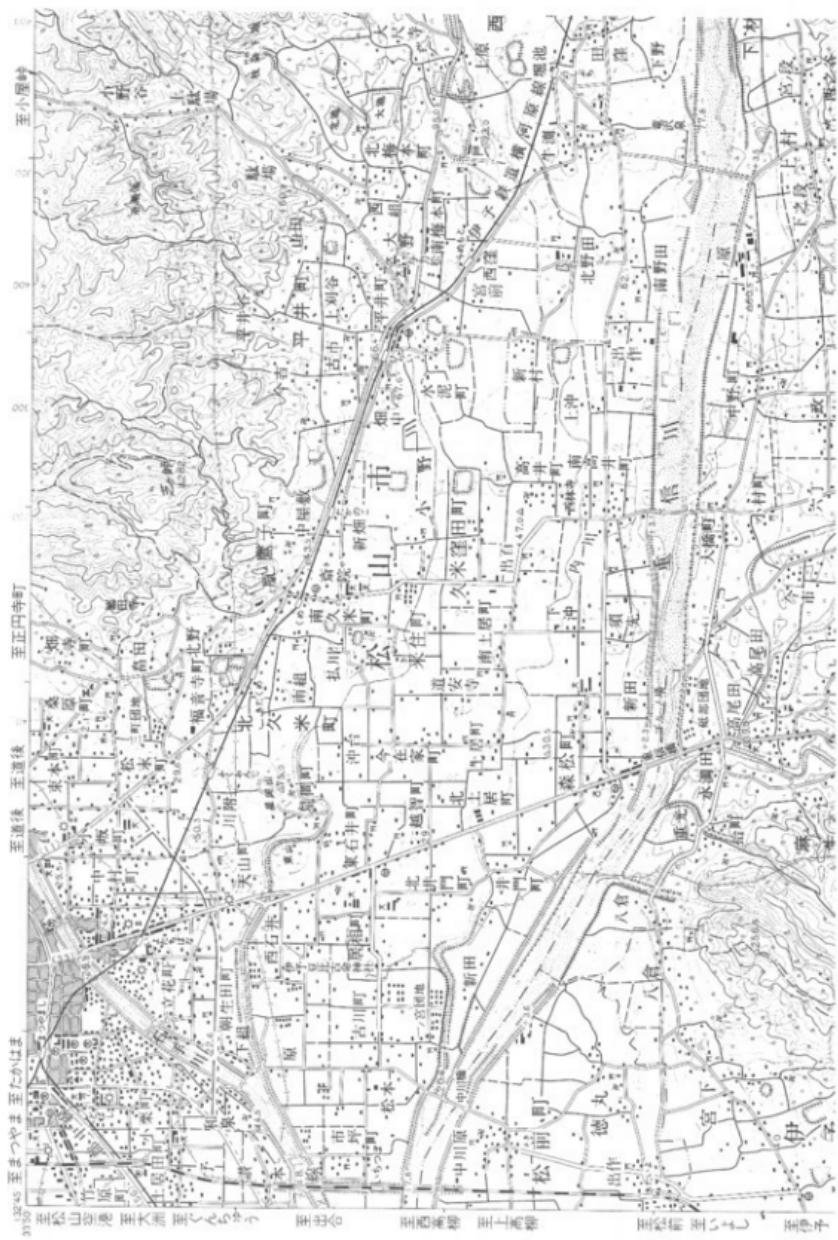
序 文		
例 言		
I 環 境	9	
1) 遺跡の位置	9	
2) 自然的環境	9	
3) 歴史的環境	9	
II 発掘の経過	10	
1) 発掘の経過	10	
2) 発掘日誌	12	
III 遺構と遺物	31	
1) 1号墳	33	
(1) 主体部及び墳丘の構造	33	
(2) 古墳の設計	33	
(3) 出土遺物	33	
2) 2, 3号墳の状況	39	
(1) 主体部及び遺構	39	
(2) 遺 物	39	
3) 4号墳	40	
(1) 主体部構造	40	
(2) 遺物の出土状況	40	
4) 5号墳	44	
(1) 主体部	44	
(2) 出土遺物	44	
5) 6号墳	45	
(1) 主体部	45	
(2) 出土遺物	45	
IV その他の遺構と遺物	49	
(1) 積穴式住居址	49	
(2) 出土遺物	51	
(3) 挖立柱建物址	54	
(4) 上括状遺構	56	
V ま と め	57	

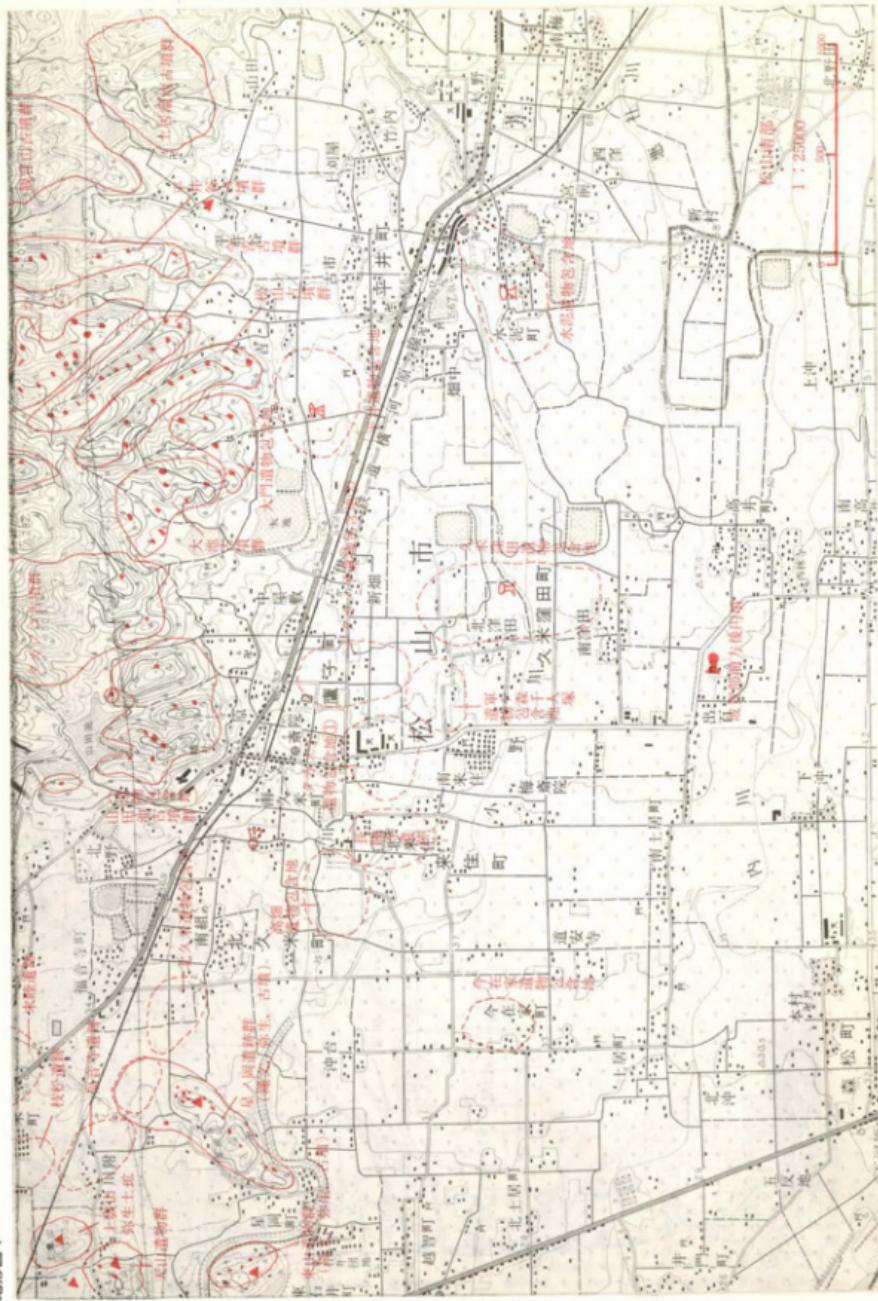
挿 図 目 次

Map 1	松山南部	—— 5万分の1	7
Map 2	周辺部の遺跡地図	8
第1図	近接地の地形図	—— 1,200分の1	11
	発掘前の土量測量図	—— 400分の1	17
第2図	地層断面図 折り込み① 〃 ②	—— 400分の1	19
第3図	地層断面図 〃 ③	27
第4図	発掘後の地形測量図	—— 400分の1	32
第5図	主体部（1号墳）遺存状況図	34
第6図	鉄鎌と矛	—— 2分の1	35
第7図	刀子	—— 2分の1	36
第8図	直刀	—— 4分の1	37
第9図	環頭と耳環	—— 2分の1	37
第10図	主体部の状況図	—— 40分の1	38
第11図	遺物出土状況図	—— 40分の1	39
第12図	4号墳残石出土状況図	—— 40分の1	41
第13図	4号墳の床面配石状況図	—— 40分の1	42
第14図	4号墳の根石抜取り状況図	—— 40分の1	43
第15図	5号墳の現状図	—— 40分の1	44
第16図	5号墳の展開図	—— 40分の1	44
第17図	主体部の残石出土状況図	—— 40分の1	45
第18図	床面（玉砂利）の状況図	—— 40分の1	46
第19図	須恵器実測図1	—— 4分の1	47
第20図	墳丘裾部と主体部	—— 80分の1	47
第21図	須恵器実測図2	—— 4分の1	49
第22図	竪穴式住居址実測図	—— 40分の1	50
第23図	弥生式土器実測図	—— 4分の1	51
第24図	石器実測図4	—— 2分の1	53
第25図	石包丁実測図	—— 2分の1	54
第26図	掘立柱建物址実測図	—— 40分の1の1	55

図版目次

図版 1 発掘区全景	59
図版 2 発掘区内のトレンチ調査	61
図版 3 トレンチ調査	63
図版 4 3号墳トレンチ	65
図版 5 1号墳遺物出土状況	67
図版 6 1号墳遺物出土状況	69
図版 7 出土遺物弥生式土器片	71
図版 8 出土遺物弥生式土器と石器（砥石）	73
図版 9 出土遺物石器	75
図版10 出土遺物石器	77
図版11 出土遺物石鉋	79
図版12 出土遺物石器	81
図版13 出土遺物石器（剝片）	83
図版14 出土遺物剝片	85
図版15 出土遺物須恵器	87
図版16 出土遺物鉄器	89
図版17 出土遺物刀子	91
図版18 出土遺物鉄器	93
図版19 出土遺物鉄器	95
図版20 出土遺物鉄器	97
図版21 出土遺物耳環	99
図版22 出土遺物ガラス丸玉	101
図版23 出土遺物齒牙	103
図版24 出土遺物齒牙	105
図版25 遺構 1	107
図版26 遺構 2	109
図版27 遺構 3	111
図版28 遺構 4	113
図版29 遺構 5	115
図版30 遺構 6	117
図版31 遺構 7	119
図版32 遺構 8	121
図版33 遺構 9	123





地形图 1

I 環 境

1) 遺跡の位置

五郎兵衛谷古墳は東経 $132^{\circ} 48' 33''$ 、北緯 $33^{\circ} 48' 53''$ の交差する周辺の地域であり、行政的位置は、愛媛県松山市鷹ノ子町2402番地である。海拔は92,158mである。

2) 自然的環境

四国山地石鎚山系に水源を発する重信川は、松山平野の中央部をやや北西方向に貫流し、洪積台地の微高地をすぎる地点で、洪積台地を開析して流れる小野川、内川、堀越川、川付川と合流し、更に下流の出合で石手川と合流して瀬戸内海の伊予灘に流入している。重信川の岸（北側）の山系は、桧皮峠（323m）から分岐し福見山（1053m）、経座森（785m）、観音山（483.4m）、杉立山（669m）から芝ヶ峰（282m）に連なる分岐山塊が続き、分岐山塊端に久米地区鷹ノ子八幡山（106m）で低丘陵山地地形は消滅し、同山系が形成した鷹ノ子、北久米、南久米、来住の洪積台地へと南面する緩斜面を形成する。この洪積台地は、分岐山塊より発する諸河川の開析作用により一目りよう全な河岸段丘を形成する。この洪積台地をすぎると分離独立丘陵の星ノ岡、土糞山、天山、東山の丘陵が指呼の間にある。地質学的には、石手川を境に北側は花崗岩層に属し、石手川以南は和泉砂岩層による形成層序となっている。この和泉砂岩層は、南約10kmの地帯を東西に走行する。中央構造線まで続いている。中央構造線以南は、三波川層に属し、縫泥片岩類が露頭している。

3) 歴史的環境

松山平野を西流する二大河川（重信川、石手川）は数多くの支流を合流するがなかでも、小野川、川付川、堀越川の流れは時として、洪積台地をくしけずり、下流域においては、沖積平野を、上流の谷間近くでは扇状地を形成し、扇状地末端部には清水の湧き出る泉が点在する。これら開析谷の周辺部には、数多くの遺跡があり、これらの遺跡は縄文時代後期から弥生、古墳時代の埋蔵文化財の宝庫となっている。五郎兵衛谷古墳を取りまく遺跡は大きく分かたれ、平野部に点在する遺跡（星ノ岡、北久米、高畠、米住、南久米、鷹ノ子、高中、今吉）と住居址及び、遺物包含地があり、一方丘陵地帯には弥生時代の土括墓をはじめ、小規模の円墳を中心に（北久米、山田池、大池、大門、桧山、今吉、平井谷、観音寺、土居溜池）等の群集古墳群が支群をなしている。これらの古墳はいづれも横穴式石室を主体部とする。後期の家族墳と考へられるものである。丘陵地帯に作られた古墳は、10m内外の小規模な円墳に対して、数基の平野部及び洪積台地端に点在する。愛媛県指定史跡の絆石山前方後円墳、戦中に消滅した双子山古墳がある。これら平野部における古墳が、50m内外の古墳に対して、丘陵部の古墳は小規模であり、いづれの古墳も被葬者を重葬する形態が多く、支配者社会の発展過程をよく示したものである。

II 発掘の経過

1) 発掘の経過

五郎兵衛谷遺跡は、鷹ノ子古墳群に属する支群である。鷹ノ子古墳群は、素鷦神社の神殿域を有する円墳を中心とした古墳群であり、五郎兵衛谷を中心とする谷間に及び陵線上に造営された1群と、大文寺谷を中心として営なまれた大文谷古墳群、更に久米・山田池周辺部に造られた山田池古墳群、更に山田池に斜傾丘陵上に広がる芝ヶ崎古墳群、及び山田池の下手の残丘タンチ山に造られたタンチ山古墳群など、それぞれ五支群をもって鷹ノ子古墳群と総称している。またこれらの古墳群と共に特に当地域は、弥生及び繩文時代の遺跡も知られている。山田池周辺地域は古くより、石鎚、石斧などを出土しており、山田池縄文文化遺物包藏地帯となっている。また鷹ノ子遺跡の南面する緩斜面は弥生時代の遺物を、古くから出土する地域として周知された遺物包藏地帯でもある。

現在は、南面する緩斜面一帯はもとより、山田池周辺地域においても、宅地化の急激な造成地の伸長により、当遺跡群も遠からず壊滅する憂き目にさらされるものと推測される地域である。このような宅地化の伸展は、とりもなおさず旧市内のドーナツ現象を作り出す一方、必然的な因果関係として、上水道の拡張と拡充が必要となる。旧市内における上水道の充足のために建設された石手川ダムの水量の不足と、新市街地の発展にともなう、新市街地の水源を得るために重信川（伊予川）の伏流水の活用を余儀無くされた。このために市公営企業局は、松山市高井町に高井神田浄水場を建設し、その鷹ノ子第二配水池建設地として、当遺跡が破壊される運びとなり、この開発行為の事前調査として実施されることになった。

当対象地域の遺跡は、すでに古くより果樹園（柿）として利用され、戦後さらにみかん園の切り替えによる、園地内の深耕がなされており、ほとんどの古墳が墳丘の形をなさないままで平地化されて、予想以上の遺跡が破壊された状況であった。しかし、それぞれの主体部付近には、小祠を祀っており、現在地を知る手掛りとなつた。

近接地の地形図



2) 発掘日誌（調査開始52年4月23日～調査 完了52年6月27日。調査実施日数42日間）

52年4月23日 土曜日 晴 男4人

発掘現地にて神事を実施した。松山市教育委員会、松山市公営企業局、請負業者二神組、地元の旧地主及び部落役員により厳粛に行われた。神事の後、調査区の決定と下刈りを行った。

4月26日 火曜日 曇天後晴れ間あり 男3人 女1人

終日、発掘区内の下刈りとグリットを設定した。グリット設定は、企業局側の測量柱に基準を取り、細分割をするという方法をとり、企業局側の連絡及び経過状況の把握に便宜を図った。

4月27日 水曜日 曇天時々小雨 男3人 女1人

昨日に続き下刈りを実施し、午後は雨天のため現場作業を中止し作業用具類の充足・点検を行なった。

4月29日 金曜日 晴天 男2人 女1人

4号墳丘上にS-N方向に、R-1ラインとしてトレンチを設定した。4号墳の石室の1部を検出した。4号墳の墳丘実測開始した。コンターは25cmにとった。

4月30日 土曜日 晴天 男2.5人 女3人

R-1のトレンチセクション取りと4号墳の石室部の検出作業にはいった。

5月2日 月曜日 小雨後晴 男3人 女2人

4号墳発堀を墳丘測量と並行して実施した。4号よりの出土遺物は須恵器1。周辺部より弥生式土器底部及び石器が出土した。

5月3日 火曜日 晴 男2人 女1人

R-1のトレンチをN方向の1号墳に向けて延長した。

5月6日 金曜日 曇時々晴 男3人 女2人

1号墳及び4号墳の墳丘測量完了、4号墳の中央部にEWのトレンチを設定し、E方向にある3号墳丘に延長した。

5月7日 土曜日 晴 男3人 女3人 見学者7人

4号墳の西斜面（S-Nトレンチより西）のEWと3号墳のトレンチ掘りを開始した。

5月9日 月曜日 曇り後晴 男5人 女5人 見学者 水道局12名 地主4名

4号墳の主体部掘り込みを確認し、午後岩掘開始し4号墳西斜面（墳裾部）を掘り下げ、斜面よりの遺物、鉄片2、須恵器片數点を検出した。

5月10日 火曜日 快晴 男4人 女3人 見学者4人

4号墳の南・西部の表土剥ぎと3号墳のトレンチ完了した。4号墳の主体部における残石状況の写真撮影及び、測量を実施した。

5月11日 水曜日 晴後曇天 男4人 女8人 見学者4人

4号墳(S面W面)の斜面で検出された遺物の測量と4号主体部の発掘および3号墳にNSトレーナー設定した。測量・写真撮影ともに完了した。

5月12日 木曜日 晴後曇 男8人 女9人 見学者4人

4号墳の石室内にある落石を測量後床面の精査作業をし須恵器1点が出土した。NSトレーナーより正面の表土剥ぎにかかった。4号墳と1号墳との中间点G・Fグリットに弥生土器片とビットを検出した。

5月13日 金曜日 快晴 男9人 女13人 見学者1人

4号墳石室の床面調査と1号墳の南面と西面の表土剥ぎを行った。R-1ラインよりE面の表土剥ぎ完了間近くなる。

5月14日 土曜日 晴後雨 男9.5人 女11人

1号墳の裾部で弥生土器片を検出し、1号墳のN面において埴輪片を検出した。

5月16日 月曜日 快晴 男13人 女10人 見学者2人

4号墳の床土の水洗い、石鏡片1点。1号墳の検出作業、1号墳南面に溝状遺構検出、溝状遺構中に、2カ所の配石遺構及び遺物として石鏡を検出することができた。

5月17日 火曜日 曇後晴 男14人 女9.5人 見学者5人

4号の遺構の遠方測量実施し、1号墳の南西部の溝状遺構の配石部及び全面発掘を実施し須恵器中の検出をした。

5月18日 水曜日 快晴 男13.5人 女10.5人 見学者2人

4号墳の玉石を除去し玉石下部より割石による敷石を検出した。(石包丁1)これら敷石上には人骨片及び、金環1箇を発見した。3号墳においても封土中の遺物を発見した以外には、3号墳の石室(主体部)すら発見出来ず、GHラインの断面図の作成にかかった。



5月19日 快晴

男13人 女9.5人 見学者6人

4号墳の玉砂利排除作業を行い遺物としては歯牙1とガラス小玉片が出土した。また敷石床面の測量を行った。1号墳の北面の溝状遺構の掘り下げを行ったが、溝状遺構はS面及びN面共に並行に歩行し周溝とはならなかった。

5月20日 金曜日 晴

男10人 女6.5人 見学者3人

1号墳及び4号墳の床面の精査を行い、1号墳より耳環1の外刀子と鉄鏃片をそれぞれ検出した。

5月21日 土曜日 曇り後小雨

男10人 女10人 部落役員の立ち合い10人

1号墳の検出作業を続行し直刀及び刀子・鉄鏃片・青銅器を発見した。4号墳の根石の抜き取りを行なった。

5月23日 月曜日 晴後曇

男9.5人 女6人 教育委員会より視察4人

東斜面の表土剥ぎ完了した。6号墳の東南部の裾部において復元可能な須恵器片を発見した。



5月24日 火曜日 晴

男10.5人 女7人

4号と3号の中間地点の発掘をし弥生式土器片及び、石器の細片を多量に検出した。

5月25日 水曜日 晴後曇天

男6人 女3人 見学者14人

4号墳の南東部の肩部の位置において集中的な出土を見たことにより、特に入念に発掘を

実施した。その結果竪穴式住居址の色が濃いなくなった。

5月26日 木曜日 雨天 男6人 女2人

4号墳における出土遺物の実測と作業具の手入れ、日誌・写真等の整理をした。

5月27日 金曜日 晴天 男9.5人 女6人 見学者6人（ショベル故障）

3号墳の墳丘全面の剥ぎ取ったが主体部の発見は本日のところできなかった。4号墳の前部に出土した弥生土器及び石器の出土遺物の測量と取り上げ、黒曜石・サヌカイトの剥片が数点あった。

5月28日 土曜日 晴天 男10人 女3人 見学者なし

3号墳の調査を昨日に続き続行し墳丘部（E D R - 2）より有蓋壺を出土した。発掘完了区の1号墳丘部（ポイントF地点）より西北部を微コンター実測を実施した。6号墳の封土中に発見された弥生式土器（高杯）を復元した。

6月31日 火曜日 晴天 男10人 女5.5人 見学者1人

6号墳の構造と推定された遺構は、西に流れる溝状遺構であることを確認できた。遺構内の出土遺物に、弥生土器片及び須恵器片を検出した。3号墳丘の封土排除し地山層を掘り込み主体部を検出できた。さらに3号墳主体部掘り込みの東斜面に、新に長方形の掘り込みを認め第7号とする。

6月1日 水曜日 晴天 男11人 女9人 見学者7人

3号墳の主体部を掘り下げたが壁面の石積は、すでに抜き取られており、僅かに床面の玉砂利を発見した。東斜面の遺構（7号）の発掘（長方形な遺構であるため3区画し発掘）登窓とも推定され慎重に発掘調査した結果は現代の土取場であった。

6月3日 金曜日 曇天 男13人 女8人

遺物の整理と床面の土砂の水洗い、その他発掘区周辺部の土砂の手入れと道路整備。

6月4日 土曜日 晴天 男13.5人 女7人

3号墳の床面の発掘及び測量を行った。1号墳の墳裾部の土括状遺構の調査と1号墳石室内の発掘をし遺物丸玉、土師式土器の1部を検出した。

6月6日 月曜日 晴後雨 男10人 女8人

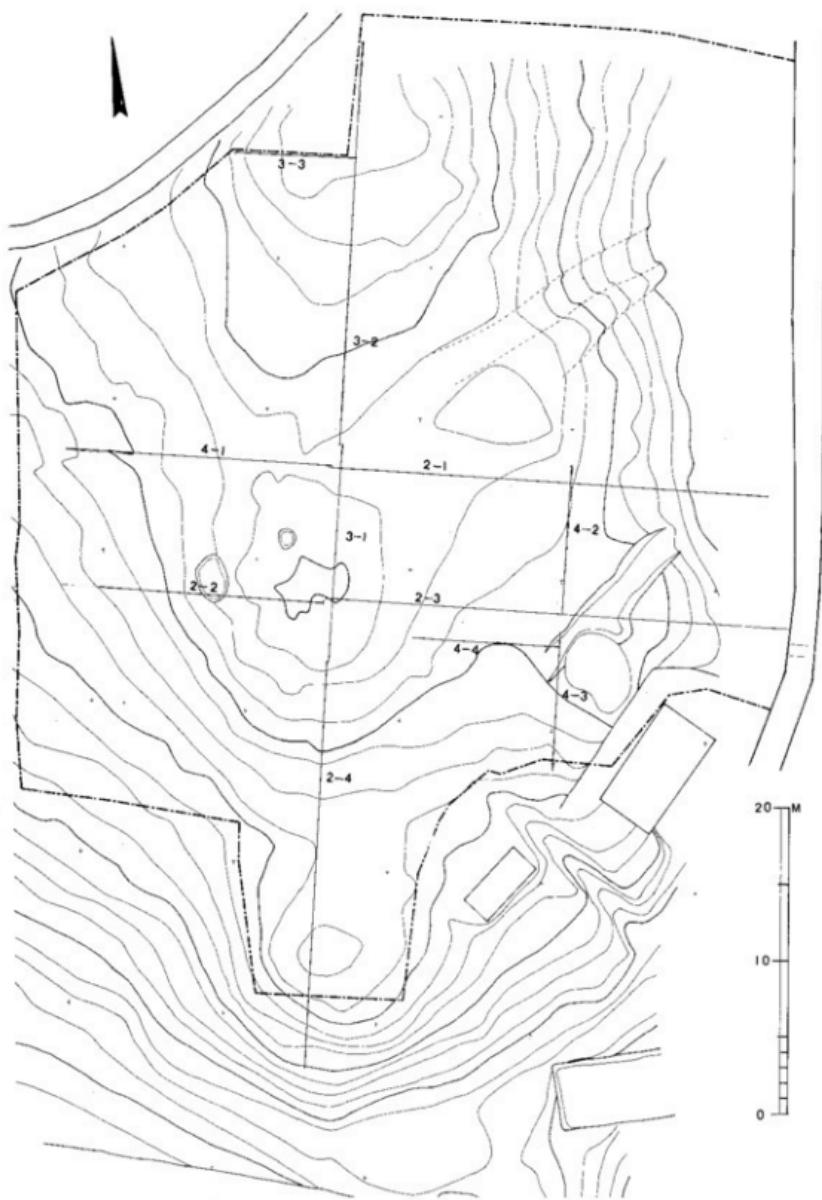
1号墳の石室内部の調査を行い、人骨片、鉄片、青銅器片と特記すべきものとして素環頭の完形品が出上した。1号墳の北面の溝は東に傾斜して溝状遺構となり、溝内の遺物、土師式土器片と須恵器片であった。4時より雨のため作業中止した。

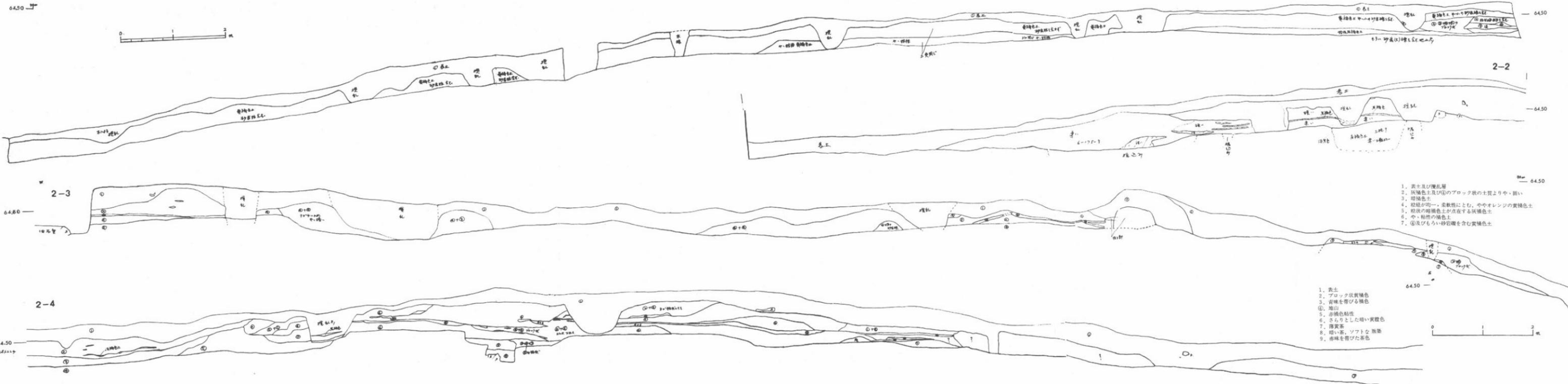
6月8日 水曜日 晴天 男11.5人 女8人 見学者4名

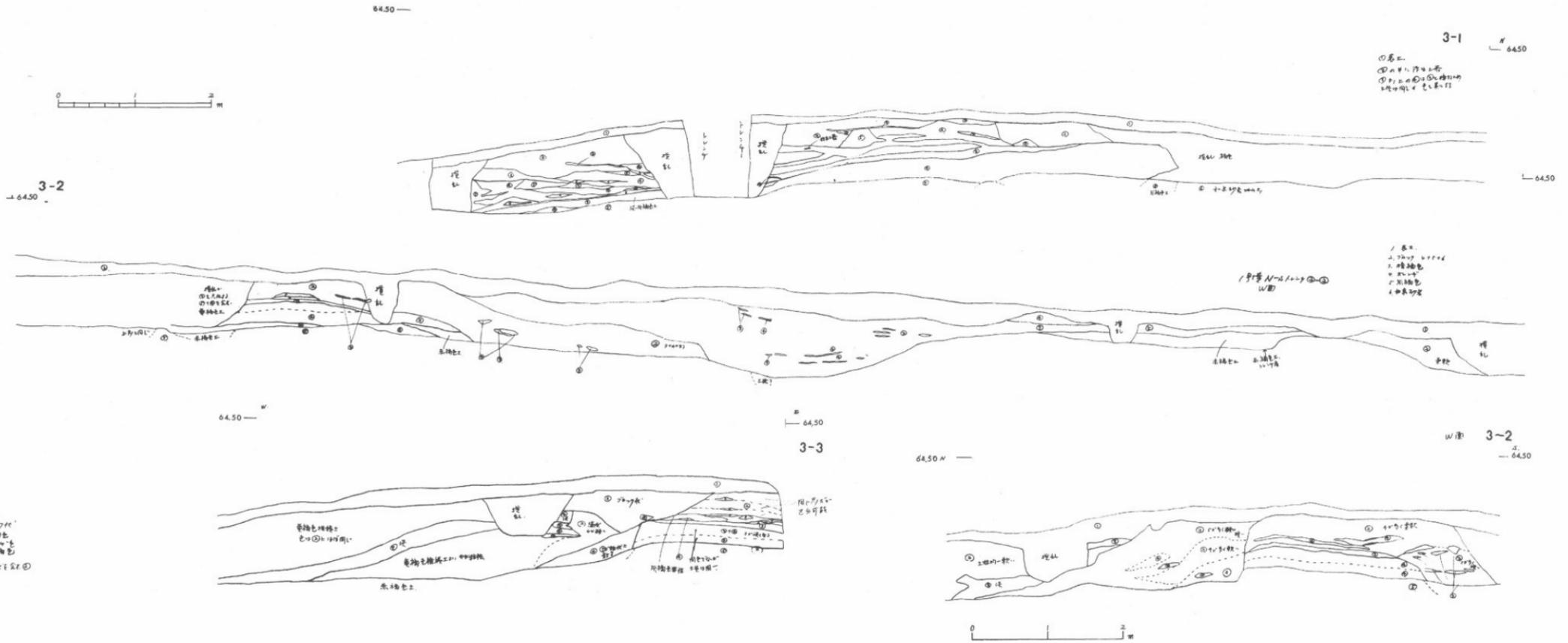
前日の雨による道路の整備を行う一方1号墳の床面の調査を続行し発掘区全域の測量を開始した。

- 6月9日** 木曜日 晴天 男10人 女8人 見学者3人
1号墳及び3号墳の床面土砂の水洗いと測量を行った。出土遺物の写真撮影と鉄器の銷び落しを行った。
- 6月13日** 月曜日 晴天 男7.5人 女4人 見学者1人
6月10・11日の豪雨の後始末に午前中かかった。測量班は4号墳及び竪穴住居址の遺構・断面測量、1号墳の床面調査を行った。
- 6月14日** 火曜日 晴天 男8人 女2人 見学者6人
3号墳の測量はP D—1の遺構図及び断面図を中心に集めた。一方1号墳の床面調査を行った。
- 6月15日** 水曜日 曇天 男7人 女3人 企業局6人見学
1号墳の西斜面の溝状遺構の精査、北面の埴輪片の出土状況図作成後採集、1号墳の根石の取り上げと配石址の測量を行った。3号墳の玉砂利の取り上げ中にガラス玉1個を出土した。4号墳の床面の敷石遺方測量を行った。（6月16日～6月19日まで作業中止）
- 6月20日** 月曜日 晴後曇 男10人 女1人 見学者4人
3号・4号・1号各墳の遺方測量と土砂の水洗いを行った。
- 6月21日** 火曜日 晴 男10人 女3人 見学者3人
各遺構の断面図の作成をし、5号墳（溜池の端に露出された遺構）の調査を開始した。
6月22日～6月24日の3日間雨天のため中止した。
- 6月25日** 土曜日 晴後曇 男8人 女2人
5号墳より金環1個を出土した。4号墳の敷石の全面露出作業と土の水洗いを行った結果、玉9個を発見した。
- 6月27日** 月曜日 曙天 男9人 女3人
発掘用具の運搬及び調査区内の保安作業を終日続けた。

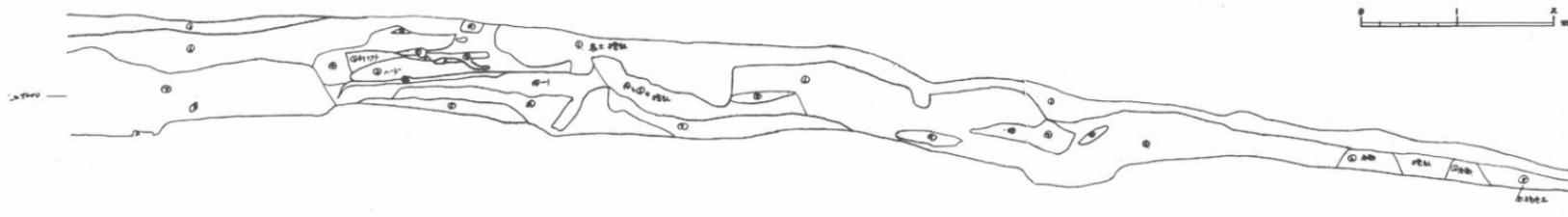
第1図 発掘前の土量測量図



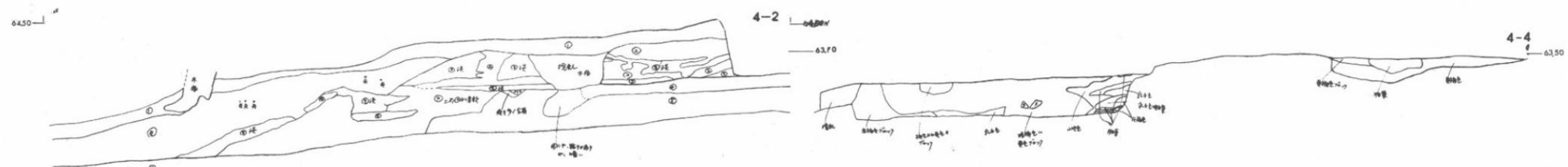




4-1

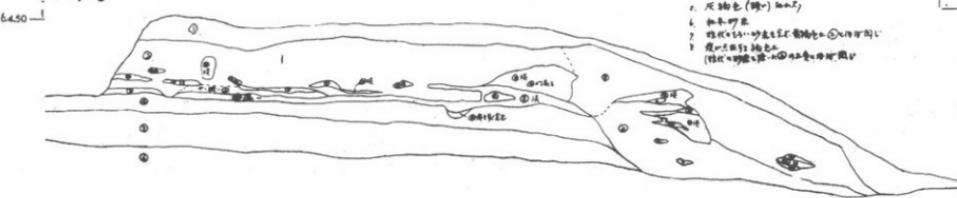


1. 64.5-63.5-6 (H)
2. 64.5-63.5-2
3. 小岩
4. 64.5-63.5-1
5. 砂岩
6. 64.5-63.5-7
7. 64.5-63.5-8
8. 64.5-63.5-9



1. 基岩
2. 钙质灰岩
3. 硫化带
4. 灰岩
5. 砂岩
6. 泥岩
7. 泥灰岩
8. 泥灰岩
9. 泥灰岩
10. 泥灰岩

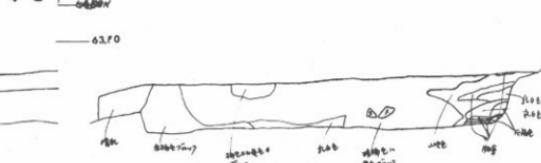
x 4-3



1. 基岩
2. 钙质灰岩
3. 硫化带
4. 灰岩
5. 砂岩
6. 泥岩
7. 泥灰岩
8. 泥灰岩
9. 泥灰岩
10. 泥灰岩

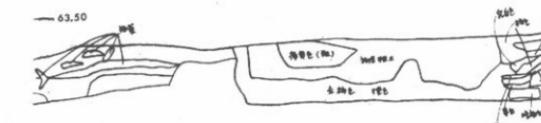
64.50

4-2



1. 基岩
2. 硫化带
3. 灰岩
4. 砂岩
5. 泥岩
6. 泥灰岩
7. 泥灰岩
8. 泥灰岩
9. 泥灰岩
10. 泥灰岩

4-4



4-5

III 遺構と遺物

調査対象面積3000m²を全面発掘を行った。対象地はもとより周辺地域は南面する緩斜面であり、しかも、この斜面一帯からは、古くより石鎚、石包丁等を出土する。他に10m内外の小円墳がかつては群立していた地域であったが、戦前・戦後の食糧不足と果樹園芸の開発により、多くの古墳は破壊されたことは発掘経過で述べた通りである。以上の立地条件のもとに、小祠に関係なく、斜面における古墳造営の立地を把握するためにもあえて全面発掘を実施した。その結果4基の古墳をはじめ、1棟の掘立柱建物址と、弥生中期後半に比定される堅穴式住居址1基を検出した。

4基の古墳はいずれも、緩斜面の隆起台状部を利用して造営されているとともに、いずれの古墳も明確な周溝等の外部遺構は作られず、わずかに陵の両面ないし、片面をカットして主体部位置のプラン設定を行っている点は共通していた。

地山面の削平も5号墳等ではまったくなく、陵線をたくみに利用した古墳といえる。1・4・6号墳は主体部をわずかに地山掘り込みを行い、平坦な床面設定をした後に、石室部の石積みを施している。この古墳造営に対する地山削平は、かつてのかいなご古墳、松ヶ谷古墳等における古墳造営技法とは明らかに異なっている。かいなご及び松ヶ谷古墳においては、地山面を1m以上にわたって掘り込みを行っており、石室部への梯道部は急傾斜をなすほどの地山面の掘り下げが実施されていた。本遺構では共通して、地山面の掘り下げは1・4号墳で40~30cm、6号墳では20cm、5号墳では前述の如くわずかに、基壇の根石の上層調整のために実施された、根石の調整にしばられた掘り込みであった。掘り込みでは共通するものの主体部の主軸方位については、厳密には一基一様である。しかし、被葬者は歯牙の出土地点等により考察すれば、被葬者はいずれも奥壁部に向して、直角位置に配置された点では、1・6・4・5の各号墳もこれまた共通していた。石積みの形態については5号墳においてのみ推定されるが、他についてはこれまた不明である。

掘立柱建物は小祠を祀る2号墳と推定された地点より検出された遺構である。柱穴は遺存度もよく、掘り込みも明確であった。

堅穴式住居址は、4号墳に接近して検出された遺構で、堅穴式とはいって、前述の古墳造営にともなう、地山面の調整により、周囲の壁面は1隅をわずかに残す程度であった。住居址の主柱穴は遺存度もよく、堅穴式住居プラン設定を知る一助となった。住居址内の遺物もことごとく削平されており、図に示す程度の残欠遺物である。

以上の遺構の他に、土括状遺構がある。土括は計8基であるがいずれの土括も出土遺物をともなっておらず、また礎石等においても同様で皆無であった。

1号墳周辺部から少量の埴輪細片を一括した状態で出土を見たが、1号墳の北側における出土物については、一括されておらず、相当のばらつきがあった。

第4図 発報後の地形測量図



1) 1号墳

(1) 主体部及び墳丘の構造

主軸方向を磁北に取つた、全長4m、幅1.6mの内面をもつ長方形の石室構造である。石室の石積状況は第5図に示す状態で、石材はすでに抜き取られていた。わずかに第1段石の根石底座を検出したのみで詳細は不明である。根石の配石状況から推察する限りでは、横穴式石室と見るべきであろうが、玄門石の配置は4号墳と同様に貧弱な作りとなっている。玄門石の配石のみでつくり出された片袖式横穴石室である。石材は残石遺物から和泉砂岩を割り石した比較的小規模の石材を使った石積が考えられる。羨道部の配石はなく、ただ地山の掘り込み程度でとどめられている。横穴式石室の機能面から見ればむしろ堅穴式石室の機能性をもつ石室構造といえる。

墳丘は南北で10m、東西では8mと石室に合せた梢円形の墳丘である。墳丘の周囲には周溝をめぐらし墳丘には円筒埴輪を配置していた小円墳と考えられる。

(2) 古墳の設計

石室は大人の手による長径は3尋と2尋の掘り方となっている。石積による石室の内径は長軸で2.5尋、短軸で1尋の割り出しが考えられる。また墳丘に見られる梢円形は、主体部の各壁面より、各々1尋半(2.5m)を取ったために生じた歪みである。周溝は1尋(1.6m)を古墳の周囲に取って本墳の堀城としている。

周溝は古墳の西側面より北側面において造営当時の遺構を検出したが、南面と北面の東面はその後の雨水の侵食により、発掘後の地形図(第4図)に示すU字状の小谷を形成している。周溝の遺存度の高い西面及び北面より埴輪片を集中して出土しており、本墳に埴輪が置かれていたことが判明した。埴輪片は開墾のために細片化されているが、断面台状のタガをもつ円筒形埴輪で、底部直径15cm内外の小形の埴輪で、焼成は土師質である。器面は斜向の備目調整と窓切り調整の施されたものである。上縁部は検出されず不明である。

● その他の遺構

1号墳の周溝内及び、周溝外に接近して検出された土括状の遺構がある(第5図)これら遺構は單一埋土層の黒褐色土層で充填され、遺物は検出されなかった。3・4の土括に見られる杭穴を穿つものと無杭穴との差異を認めたのみである。詳細は土括の項でふれたい。

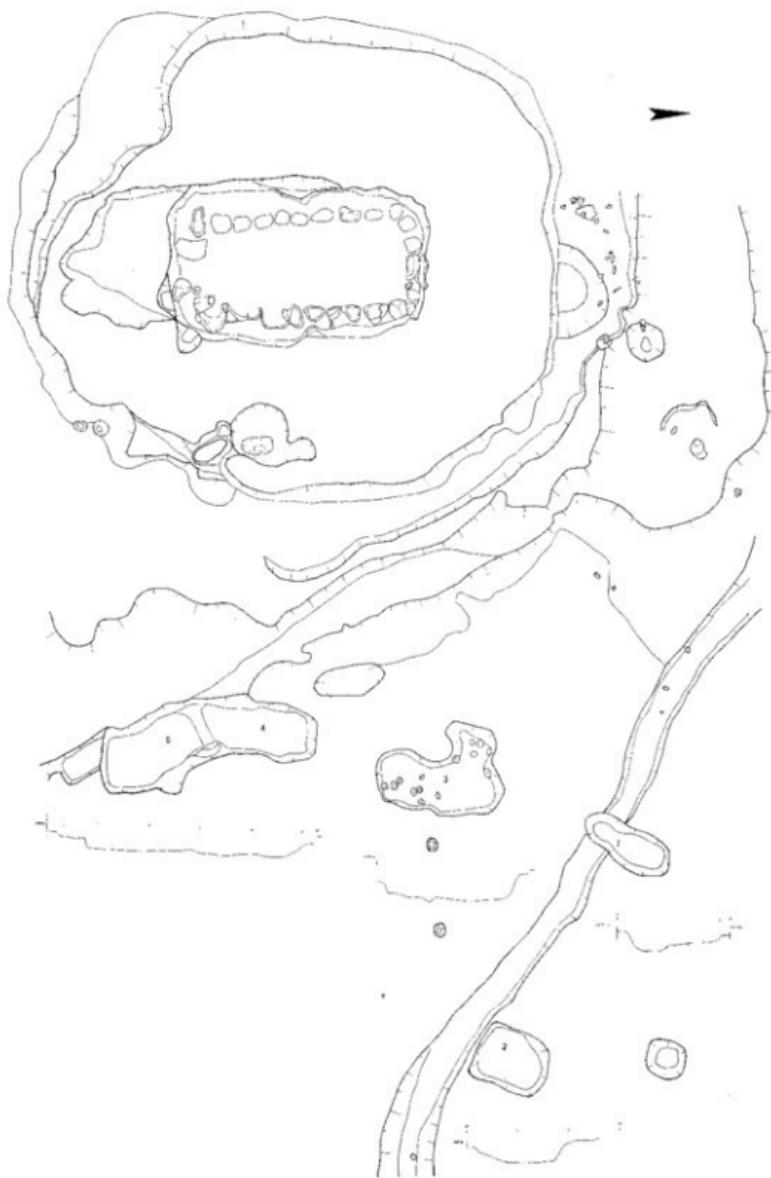
(3) 出土遺物

① 鉄器

○鉄鎌

鎌はいずれも破損遺物である。第6図に示す1・7は鎌の茎部分の欠損遺物であろう。2は片丸造りであるが刃部を欠失しており不明である。5は繩根式であり、片脇抉式の両刃の平根造りとなっている。6も同様の遺物と推定される。3・4は共に両脇抉式の平根造り

第5図 主体部（1号墳）遺存状況図



となっており、これと同様の鉄鎌は天山2号墳から多数出土している。10は椿葉形の平根造りの片丸造りとなっている。8・9はともに石突部を欠失しており不明である。この他にも数点出土しているが銹化して不明である。

○止め金具

第6図の11に示す遺物である。1個のみの出土遺物であるため、全体的な把握は困難である。鉄芯の断面は円形で棒状である。両端面を共に丸く納めているほかに両端部付近に2条の溝が穿たれており、連鎖状に金具を構成させて使用したか、ベルトの止め金具とも推定される。

○矛

第6図の13は矛である。刀部は呑口式につくりだされて8cmを有し、断面は菱形である。

袋部長も8cmを有して円錐形である。全長18.7cm、袋部の最大径3.15cm（内径2.8cm）である。

○刀子

第7図に示すもので2～5の遺物が1号墳出土の刀子である。2は刀部を欠失しているが茎は鹿角に挿入された鹿角刀子である。3は小形でよく使用された刀子であろう。茎は平打ちとなっている。5は刀先を1部欠失しているほかは完成に近い遺物である。刃部10cm、茎部7.3cmの全長17.3cm、幅2.6cmが計測される。

2の鹿角は刀部の1.5cmに対して、把部の径2.5cmと大きく、刀子としてかなり力量を必要とする工作過程での使用利器と推定される。2の刀子に対して、4の刀子は把り部分も細く、背と茎にそりが見られることから剝離り専用の利器とも推定される。刃部に木質物が付着していることより、木製の鞘に納められていたものと断定される。5の刀子は、刀子としては大きい。刃部が刀闘部から腹部にかけて、使用により磨滅している。茎は平打ちで0.3cmと厚く茎の先端部も他

第6図 鉄鎌と矛



の刀子とは異なっている。関部分に残っている角質物から鹿角刀子と推定されるが、刃部には木質物の付着はみられなかった。3の刀子は1号墳出土遺物中で最も小形でしかも薄手のつくりとなっている。刃部の磨滅は関部分から刃先にかけての磨滅が平均しており、他の3点の刀子の磨滅状態と異なっている。茎には角質物が付着しているが、刃部には有機物の付着が見られない。

○直刀・三鱗環頭太刀

直刀の全長（復元長）47.5cm、刀幅3cm、背闊0.5cm、茎11cm（推定）、茎幅1.8cmの直刀で鍔はない。直刀の茎・関・刃先付近に木質物が付着しており、この木質の付着からして鞘に納められていたものであろう。関部分に付着している鉄製の金具がある。鉄製の金具は関部分における喰出鉢である。喰出鉢は太刀の三鱗環頭とを茎と把木で固定したものと考えられる。

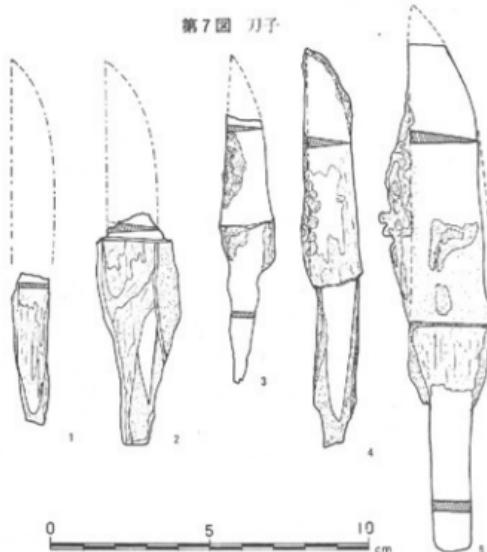
三鱗環頭式の環頭は、三鱗環を台座長3.3cm、幅0.7cmによってささえられている。三鱗環はいずれも直径2.5cm、短径2.1cm、断面0.4cmと統一されている。台座には茎があり、かつては茎の先端部に目釘孔が穿たれていたものと推定されるが、遺物では欠失して不明である。刀身部の茎においても、木質物の付着と鉢のために目釘孔は不明であるが、前述の喰出鉢は背闊（木質物の付着から推定して刀闊も考えられる）で支えられ、環頭の台座と把木をそれぞれ目釘孔で固定したものであろう。

2個の青銅（ろくしょう）装飾金具が出土している。第8図の復元位置と推定している。装飾金具は背部を4面に、腹部を3面に面取りしており、2個とも背部にしづりが見られる。環頭部と喰出鉢との把木の端部に固定された金具と考えられ、把木の背面にそりがあったと見る。

○耳環・装身具

耳環は4個出土したが、内1個は鋳化がはげしく計測不可能な状態である。のこる2個は銅の地金に、金鍍金をしたものである。2個の直径は2.25cmと共通している。2個はともに、断面は完全な円をなさず、わずかに5面体の稜を残しており、

第7図 刀子



第8図 直刀

(第9図及び図版21に示す) 鎏金も松山市かいなご古墳1号墳出土遺物より粗雑である。断面径では、1は0.6cmで2は0.65cm、重量8.6gと9.1gとやや異なる重量値を示す。残る1個は直径3cm、断面0.5cmの銀鍔金をわずかに残す他は剥落している。重量7.8g。

○丸玉

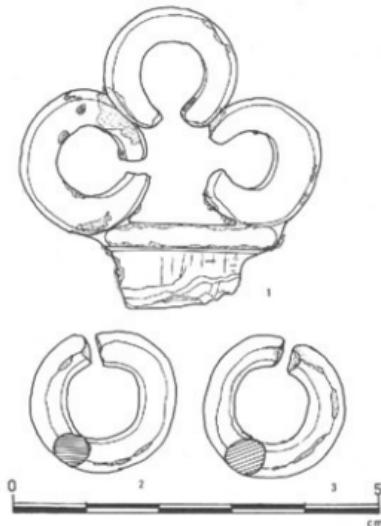
図版22に示す丸玉は直径1.8cmで中央に0.2cmの貫孔が穿がたれている。片面には穿孔のまちが見られる濃赤紫色のメノウ丸玉である。6.7g 図22-3に見えるガラスの小玉で色調は黄緑色のものと紫色の2種に分類される。黄緑色のガラス玉は偏平球で直径0.3~0.4cmの中央部に0.1cm内外の透孔がある。出土数7個で重量40~55mgのものである。水色のビーズ玉を22個出土しているが全体的に偏平球でや、不ぞろいで0.3~0.15cm内外のもので重量も20~22mg以内である。

○周辺部における丸玉

かいなご1号・2号墳及びタンチ山1号墳、三島神社古墳をはじめ、松山西部(三津浜)の御産所11号墳、久万ノ台2号墳、忽那山1号墳等の古墳においてもそれぞれ偏平球のガラス玉を出土している。メノウを素材とする丸玉を出土した古墳は、松山市祝谷1号墳の横穴式石室と出土遺物がある。この他に共伴した出土遺物の装身具類としては、タンチ



第9図 環頭と耳環



山古墳のトンボ玉、かいなご2号墳のヒスイの勾玉、水晶の切子玉、出雲石の管玉、棗玉、三島神社古墳の銀製の空玉、滑石製の白玉、出雲石の管玉等が上げられている。

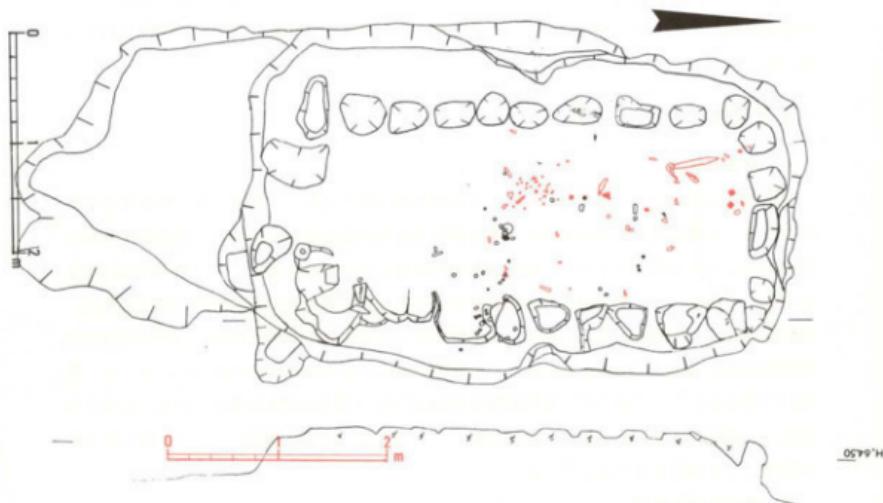
第10図 主体部の状況図



○骨と歯牙

人骨は図版24の骨片及び頭骨片の外に細片した骨片が主体部全面に散在していた。かつての石材撤出にともなう、主体部内の搅乱により、石室内はもとより、石室外に散乱していたが、歯牙においてはや、定位置と想定される検出遺体もあった。

第11図 遺物出土状況図



2) 2, 3号墳の状況

(1) 主体部及び遺構

2, 3号墳は共に、マウンドを持ち（第1図）小祠を祀っていた。発掘調査においては、2, 3号共に、主体部を確認するに至らなかった。わずかに地山を削り、明らかに周溝をもつ円墳であったであろうと推定された。2号墳は特に開墾による地面の剥平がはげしく2個の和泉砂岩を検出したにとどまった。周溝も東面で3号と共に北面では1号墳と交錯するが、1号墳の墳丘造成により、2号墳の周溝は断ち切られている。W面は開墾時に耕地の平坦化のために、ことごとく剥平されており遺構をとどめない。主体部のマウンドがわずかに保持されていた。マウンド上には、後述の掘立柱建築物址が検出されている。

3号墳は2号墳に近接しており直線距離で10~11mの間に作られ、造営時に周溝はなく、地山を調整したのみの円墳である。マウンド中央位置にわずかに主軸をW20°Nにもつ長方形の掘り込みが検出された。主体部は掘り込みより箱式石棺と推定されるが、開墾後の果樹施肥等の掘り穴が所々にあり、不確実なため遺構図を割愛した。

(2) 遺物

遺物は須恵器と石包丁を出土しているが、石包丁は封土中より検出しておらず、本遺構には直接関係をもたない遺物として、石器の項で一括記述する。

坏は坏身部で、墳頂部の背部に横転した状態で検出された。器形は底部を荒い箝切り仕上げをおこない、受け部は大きくなりだしたのち、わずかに内傾して口縁部を作り出している。内壁部は横なで仕上げを施している。2次形成として底部を左回転の右なでを簡単に行なっている。

3) 4号墳

(1) 主体部構造

主体部の石積みはほとんど見られず、主体部の地山掘り込みと1部残された根石及び床面とである。主体部は主軸方向をN.E.に取る横穴式石室が推定される。根石に見る限り和泉砂岩の割石による石積みであろう。床面は第13図に見られる割石を敷きその上面に河原石をもって被つている。この割石による床面配置からみて、玄室部と羨道部との区画が見られる。抜取穴から見て玄門石が考えられる。この構造から玄室部は奥壁幅長180cm、玄門幅長180cm、西壁長280cm、東壁長300cmが計測され、前庭部を兼ねた羨道部は玄室の長方形に対して、閉塞口で両側面よりしまはれ、玄門部幅長180cmに対して閉塞口幅長104cmである。床面での変化は、図版31に見られるように無段落のプランである。石室の過程において、敷石と玉石の被覆による相異を作り出している。

(2) 遺物の出土状況

遺物はほとんど皆無に近く、図版30に見られるように奥壁面は攪乱状態である。奥壁全面にわたって割石の抜取りも行われており、検出された遺物は須恵器の無蓋坏1点、ガラス玉、耳環1点及び鉄錐片数点を検出したのみである。

○須恵器 坏

無蓋坏の完形品である。口径12.2cm、器高3.7cm、の平底部分は箝切りされており、胴部はかき目成形のうち横なで調整が施されている。わずかに外反した口縁部の口唇端面は丸くなじで調整されている。内壁面は横なで調整で仕上げられている。焼成はよい。

○ガラス玉

4号墳でのガラス玉は、両端面を垂直にカットしており、白玉と見るべき装身具であり総数9個出土している。濃紺色で直径0.3~0.5cm、高(厚)0.3~0.4cmの中位のガラス白玉である。

○装身具耳環

銀の鍍金を行なったもので、直径2.5×2.8cm、芯部(断面)0.7cmを計測した。重量11.6gである。鑄化がはげしく鍍金は剥落して不明である。(第6図の12)

○鉄器片

鉄器は鉄錐の細片であり、いずれも矢柄部分であるが、それぞれの詳細については不明である。

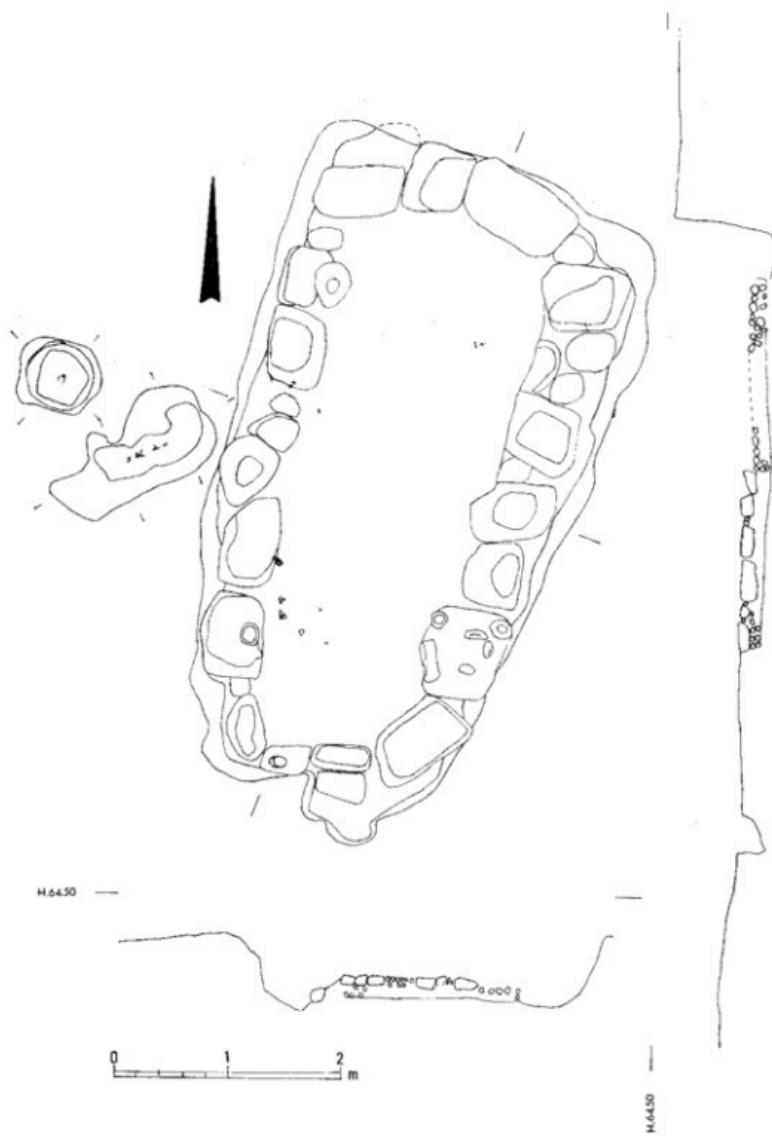
第12図 4号填残石出土状況図



第13図 4号墳の床面配石状況図



第14図 4号墳の根石抜取り状況図

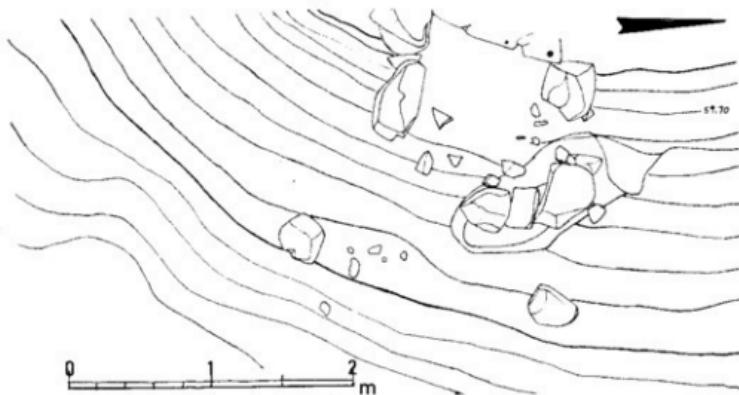


4) 5号墳

(1) 主体部 (第19図)

5号墳は新池の西堤防(自然)面に主体部が、半切りされた状態で奥壁面に1~2個の両側壁の根石及び3段石を残した半壟の横穴式石室である。主軸方向はE-Sに開口しており、主体部前半は溜池の諸位置にあたるため、波浪により洗われ、数個の石材が溜池内で露していた。図版33に見られる遺構が5号墳である。石材は和泉砂岩の割石を利用しており、石積みは現存する状態から見る限り、基礎石をわずかに地山に掘込み、根石第1段の中位を保つ様に第2段石を積み上げた布目積となっている。床面はカマボコ状に中央部を高く地山を剥り出しており、石室内の排水を考慮している。床面での玉石(河原石)は池の波浪により流失し、わずかに残っていた。

第15図 5号墳の現状図

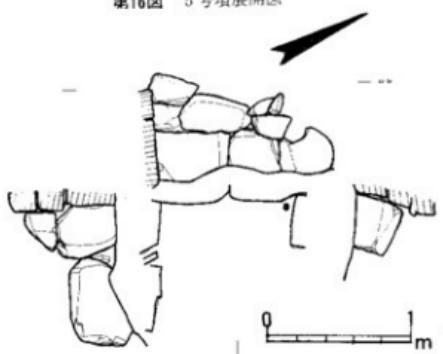


(2) 出土遺物

○耳環

第16図。●印地点より出土した唯一の遺物である。直径3cm、断面0.5cm、重量7.8gの銅環である。かつては金または銀の鍍金を施していたと見られるが、水没することもある石室のため剥落して不明である。

第16図 5号墳展開図



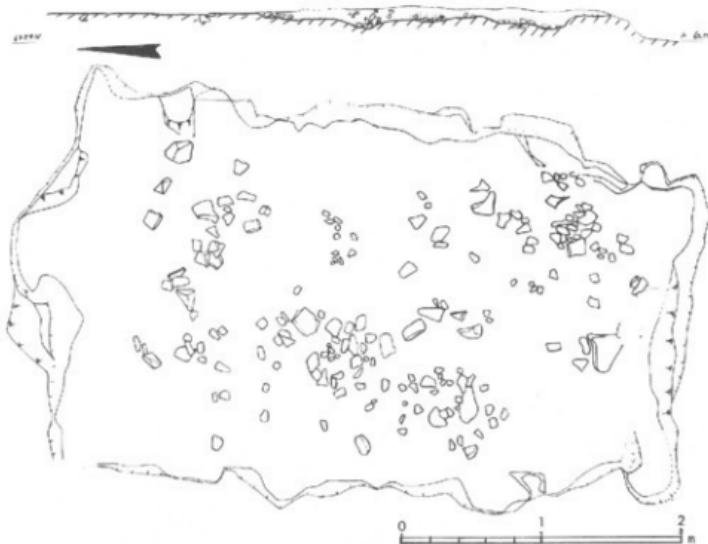
5) 6号墳

(1) 主体部

6号墳は丘陵部の邊部に位置しており、造園時の地山掘さくと、山道新設と新池造営時の山土採集とが重複して行われた時点において、本墳は完全に破壊され、しかも環境の項でもふれた如く、周辺部の古墳はことごとく石材を抜き取り、池の新堤防の構築に利用された。この堤防工事と山道設置により、主体部近くまで地山が切り取られ図版32の3に示すようになっていた。

図第20図に示す主体部断面のごとく周壁面の石材は皆無の状態でわずかに床面における玉砂利が、検出された以外には不明である。主体部の掘込み状態からして主軸方向を、NEにもった縦4.5m、横2.5mの方形に近い平面プランを示すが、根石位置を考慮すれば両壁面の掘込みより、50-60cm内方向に石室プランが推定され、推定測定値は4m×2mの長方形の石室となり、周壁部に掘込み壁面を残すことなどより、竪穴式石室が想定される。

第17図 主体部の残石出土状況図



(2) 出土遺物

遺物は封土中より検出された無蓋高環と、玉砂利及び床面上砂の検出作業により出土した、小玉のガラス玉7個である。

ガラス小玉はいづれも黄色、緑色に彩色されたものであり、直径0.3cm内外、厚1.5-1.0cmと小型である。

① 須恵器

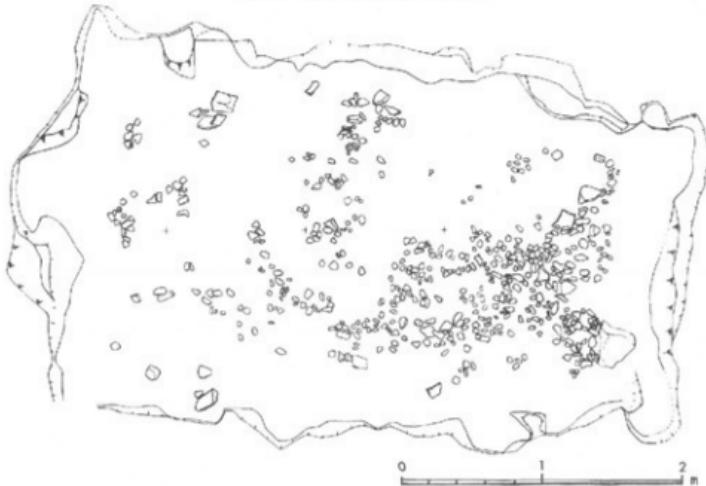
○無蓋高坏 (第19図)

1は坏部の内部にろくろなで痕を残している。脚部は裾部で大きく開き、脚部中位に2条の凹線を付している。透孔はなく、内外面共にろくろなでが施されているが、脚部の内上面端部にしばり目が残されている。坏部はゆるやかな内寄気味に立ち上がり、口唇端を外反し丸く端面を納めている。坏部の基底部にかき目痕を残す外は、丁寧なで仕上げとなっている。器表には自然釉が吹き出している。器高17.2cm、脚部高13cm、脚裾部径14.3cm、坏部の器高4cm、口径18cmで焼成もよく淡緑色の自然釉が付着して美しい。(4・6号墳の裾部)

2は、脚部内壁部に弱いしばり目を残した脚部に、表面なで調整しており、透孔はない。坏部の口縁部における立ちあがりは、わずかに内傾したのち、口唇部直下でこころもち外反し口唇端面は丸くおさめている。受部は断面三角形の凸帯状をなしている。坏部の先はへら削りによる成形をほどこし、その他はなで調整を行っている。坏部成形後脚部をはりつけている。杯部の内面は1面に灰釉が吹きだしている。口径14cm、坏部高4.5cm、立ちあがり1.3cm、脚部不明、焼成はよく、胎土に粗粒子を含まない。(2~3は6号墳出土)

3は、坏の底部と脚部の一部分を残し、他は欠失して不明である。脚部には三方向に3段の、長方形・方形・長方形の透孔を穿ち、長方形の透孔下部に2条の凹線をもつ。表面は入念なで仕上げをほどこしている。脚部内壁面は、2段目の透孔付近にロクロ回転を利用したなで調整がみえる。長方形の透孔の上・下端には0.1cm内外の割出し穿孔が残っている。坏

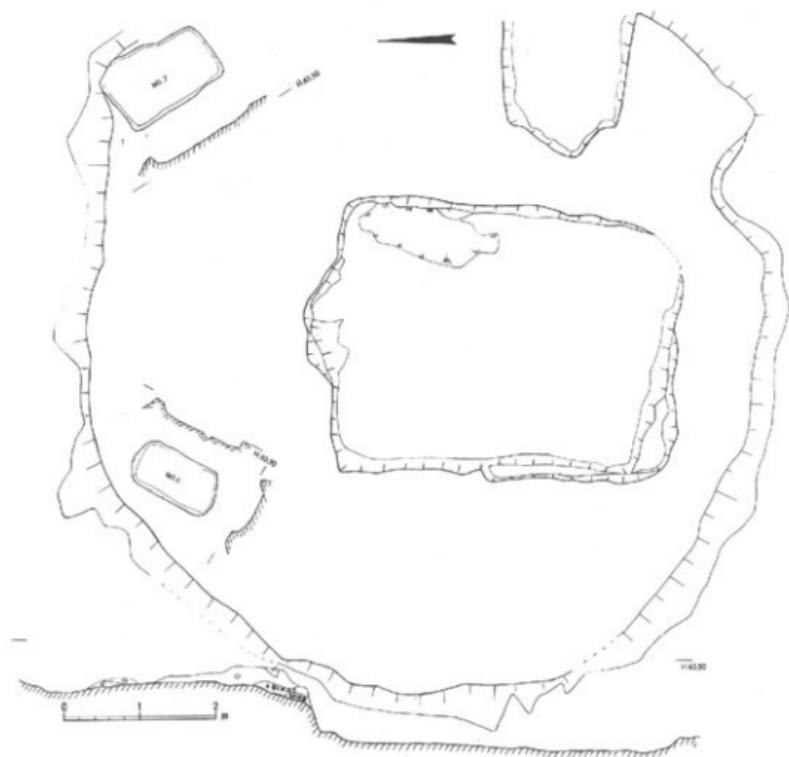
第18図 床面(玉砂利)の状況図



第19図 須恵器実測 1



第20図 填丘裾部と主体部



部の底部は範切り成形で、坏部の立ち上がり位置に弱い凹線を一条めぐらしている。受部付近は欠失しており不明であるが、凹線で区画した器面に列点彫描文が施されている。

○台付塊（5）

扁平な底部からゆるやかに内唇気味に立ちあがり、体部中央付近からは、わずかにすぼめられた口縁となつてゐる。器内はやや不均等で内底面には、脚部の貼付けによる指圧痕が明瞭に残っている。口縁内壁部を範切し、直立した口縁内面となつてゐる。体部に2条の凹線を配し、| 2条の凹線による区画面に12箇の列点彫描文が施されている。脚部は大きく外反し端部に鋭い凹面をつくり、内面で接地し内傾する面を持っている。脚部の器表面はカキ目成形を内面はなで調整をほどこしている。腕の内壁面はなで調整を全面にはほどこしている。表面は、口辺部と施文帯はなで調整であるが、2段目の凹線より基底部にかけては、範削りの後カキ目で仕上げている。器高14.3cm、内坏部8.2cm、脚部6.1cm、口径11cm、胴部最大径11.8cm、焼成はよく、光沢をもつてゐる。6号墳の封土中より出土。

○短頸壺の蓋部（6）

4号墳の唯一の須恵器である。口径11cm、器高4cmで天井部から%以上に範切り成形がなされ、内部にはロクロによる回転なで痕を明瞭に残してゐる。塊形の器物で口縁部でわずかに外反して端面は丸くおさめている。

○坏

3号墳出土の器物で、口径12cm、受部径14cm、器高3.5cm、立ち上がり1.1cm、受け部から扁平な底部にかけ範削り成形を行つた後かき目調整での仕上がりとなつてゐる。立ち上がりは、内傾したのち口縁部でわずかに外反し、外壁面に凹面をつくり出している。内壁面はなで調整となつてゐる。

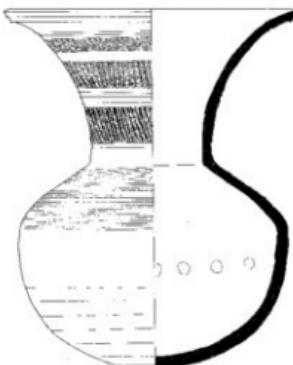
○須恵器片

須恵器は器台の破片が最も多く、石室外の封土中より検出された。復元された器物は坏、高坏、広口壺と少なく、特に石室内部より出土したもののは僅かに（短頸壺の蓋）1点のみであった。

○広口壺

器高25.5cm、口径21cm、口頸部高11.2cm、胴部最大径19.2cm、頸部径9.2cmの球形に近い丸底の底部より大きく内窵して立ち上り、胴部最大径を作り出した後、内傾してすばまり、頸部は直立した後、大きく外反して漏斗状（朝顔状）の口辺部を作る。口辺部はわずかに内窵した口縁部となっている。口唇端面は、ヘラ切りされた平面である。頸部より1条、4条、2条の範状工具による凹線帯を有し、これらの凹線における区画内部に、櫛歯による波状文帯をもつ、口辺部にも2条の凹線がみられる。肩部には櫛歯におけるかき目文が残っている。内部の同部付近に連なって指頭による圧痕文が残されている。これ以下の外面は、範切り成形による仕上がりとなっている。

第21図 須恵器実測図2



IV その他の遺構と遺物

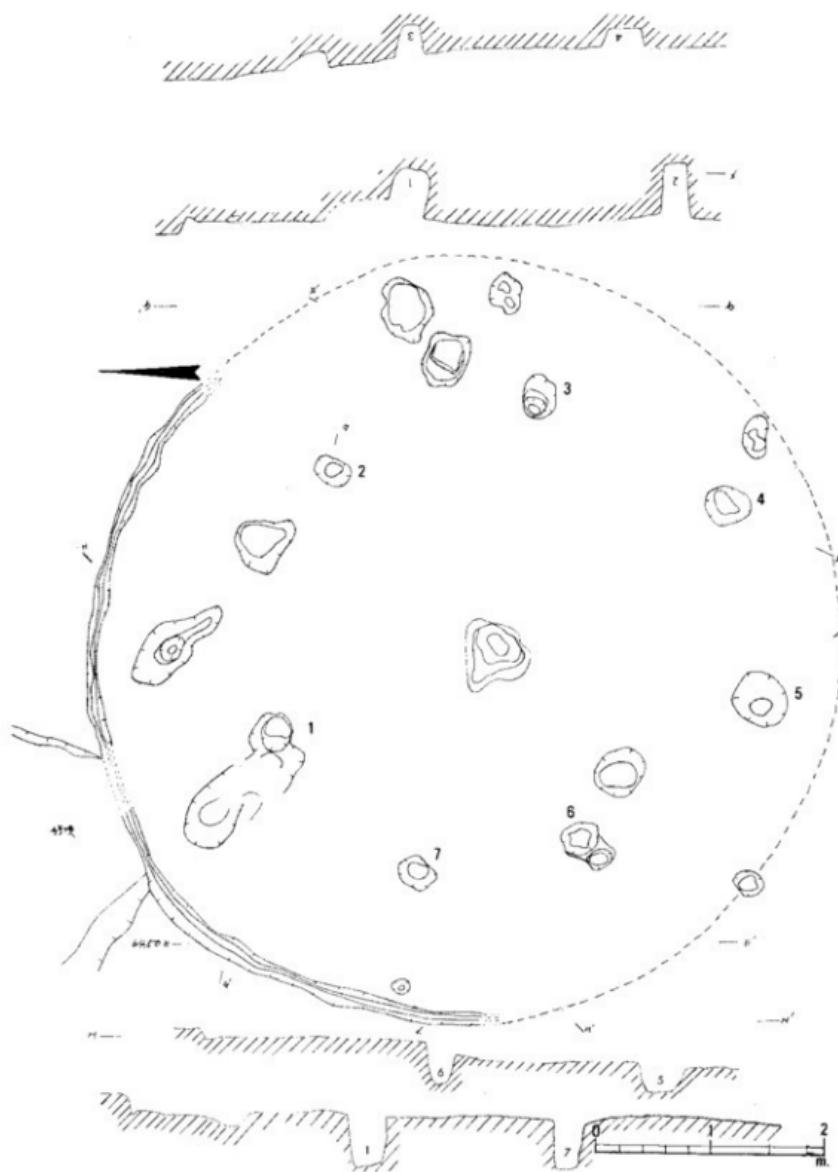
(1) 積穴式住居址

住居址は直径6.5mの円形である。壁面には周溝をめぐらして、床面は東面が低く緩斜面となっている。住居址の中央部において焼土を検出しておらず、炉址と見られる。炉址と壁面距離は1.5mである。柱穴は1~2で2.3m、2~3で2m、3~4で2m、4~5で1.8m、5~6で2m、6~7で1.5m、7~1では1.8mを計測できる。主柱と壁との距離は1.0~1.3mとなって均衡がたもたれている。柱穴は50~30cmの掘り込みとなっていた。柱穴No.1と壁面との間に凹地が検出され、この凹地に10数個の人頭大の石を最大とした集石遺構があり、この集石の周辺には無数の珪岩、サヌカイトの剥片とまじって少量の黒耀石の剥片を検出しているが、これらの剥片に混り、石鐵6点が出土した。この原石のうち石器製作の原石は3点（珪岩）、火刷離されたサヌカイト剥片数点も集められていた。

検出された土器は数少ないが（古墳築造に伴う地山削平による）柱穴No.2、No.3の中間位置において高环、柱穴No.5、No.6の中間位置で變形土器片が検出された。更に柱穴No.7の壁面外部で砥石を検出（図第24図の7）したが、遺構に関係する遺物かどうかは不明である。

炉址の焼土中より2点、及び周辺部特に柱穴No.2、No.4の空間位でサヌカイトの網片を検出したが、柱穴No.5、No.7の空間位置においては一点も検出されていない。

第22図 墓穴式住居址



2) 出土遺物

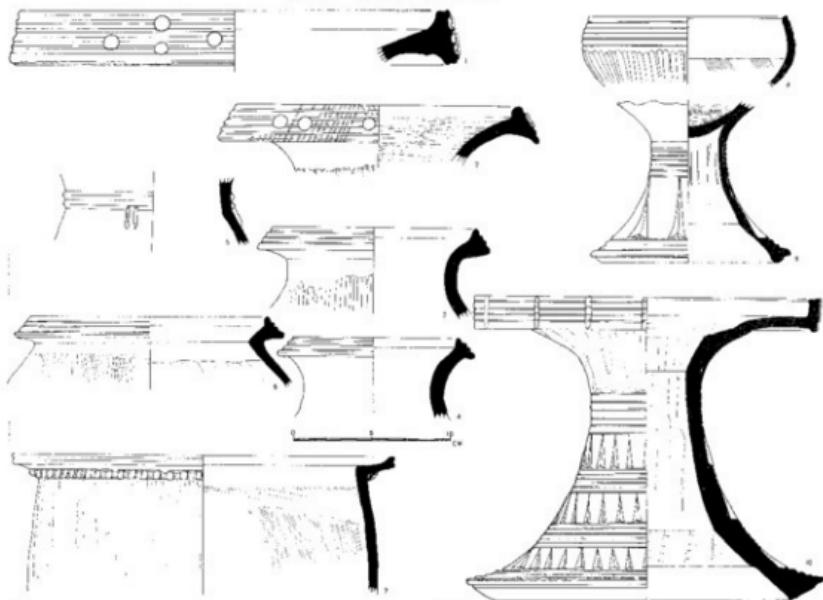
① 土 器

土器は堅穴式住居址内及び、その周辺地域より出土を見たもので、いずれも弥生中期後半の時期に比定されるもので、巖内でいう第4様式の時期に比定される土器であろう。出土土器件数は少ないが、壺形土器の口頸部、壺形土器口縁部、高环形土器の脚部及び口縁部と底部数点を検出した。なお底部については紙面の都合で実測図は割愛したが、平底とやや突入した凹状のあげ底とに区分される。

○壺形土器

第23図の1～5に示すもので、1～4は口頸部の破片であり、5は頸部の破片である。1と2は頸部より大きく外反し朝顔状に開いた口縁部を叩きT字状の口唇端面を作りだしたのち、口唇部の下端面から頸部にかけて、丁寧な範調整と磨研を口唇端は横に、頸部に向っては輻方向に行っている。内部は特に2に強く表現された。カマボコ状の隆起帯を窓削りにより作り口縁部で棱をなす。口唇端面には4条の範描きによる凹線をめぐらしたのち、斜方向の範描きの沈線が4条の凹線帯と交叉する。また口唇端面の中央部（凹線部）に一対の円形浮文を貼り付けている。浮文は1では4方向に、2では8方向に配置されたものと推定される。これらは唇端面の施文を、1では、斜向の範描きの後に凹線を施してはりつけ浮文となり、2ではまず凹線を施文した後に浮文を貼り付け、最後に斜向の範による押圧文を付けている。

第23図 弥生式土器実測図



3は口縁部の破片である頸部に短い直立した、たちあがりを見た後、大きくくびれて外反し口縁部を作る。口唇端面は叩き成形による肥厚が見られる。口唇部の叩きによる肥厚部を口縁内に作り出す。4はゆるく外反した口縁部の口唇端面を叩き丁字状口縁をつける。いずれも端面には3~4条の凹線をほどこしている。5は頸部の破片である。頸部に2つの断面を三角形の突帯をめぐらしたのち1面または2面に貼り付けられた短い縱方向の断面三角突帯が貼り付けられ器面全面を朱塗している。焼成はいずれもよく、器面も丁寧な仕上がりとなっている。

○菱形土器

6・7は菱形土器の口縁部である。6は胴ばりのある腰で頭で大きくくの字状にくびれて口縁部を作ったのち、口唇端面を壺形上器にみる叩き成形をおこない肥厚な口唇端面をつくり出し断面を三角形状の棱を口縁内部にもつ菱形土器の口縁部である。口唇端面には3条の凹線を施している。口縁部内面は横なで調整をまた、口唇端面は凹線も含め丁寧な箠磨研となっている。内壁部は粗い箠切り成形となっており、器表面には縱及び斜方向の押文がみられ、器面に煤が付着しており焼成よく、色調は黒褐色である。7は逆L字形の口縁部をもつ土器で、頸部に貼り付け突帯をめぐらし、突带上端面を指頭により押圧している。口唇端面に凹線1条ほどこしており、更に口縁部の内面は横なでされ凹面をつくり出したのち、口縁部位置に箠描きによる沈線が1条施されている。器内面は刷毛によるなで調整をほどこし、器表面は縱方向に0.2cm内外の細かい箠磨研による仕上がりとなっている。焼成はよく、色調は器表面で黄橙色であるが、胎土は黒褐色で粗粒子をわずかに含む程度である。

○高环形土器

9・10は高环形土器の脚部である。10は細片による坏部の復元図である。9・10共に脚部に1段と3段の二等辺三角形の不透孔の透孔が施されている。9では透孔17個を配し脚部の上段には、8条の凹線を下段（裾部）には3段の箠磨研による棱をつくる。裾部ははね上がりの脚部となり、上段部の内壁面には、脚部のしほり痕がある。坏部と脚部は、脚部を大きく開き受け部を作り出したものに坏部を乗せて接着させている。坏部の内底部には、梯目成形痕が見られる他は箠磨研による仕上がりとなっている。脚部の器表面も丁寧なへら磨研となっている。内壁面は横なで調整による仕上がりとなっており、脚部の1部に朱が付着している。10は、3段の二等辺三角形の不透孔の透孔をもつ、各透孔は箠描き沈線による区画がなされている。裾部は9同様に箠磨研による棱を作り出している。脚部の内壁上段面には、大きくしほり痕を残している。以外は横なで調整をもって仕上げられている。坏部及び脚部は入念な箠磨研による仕上がりである。坏部の口縁端には4条の凹線をめぐらしたのち、縱に帯状の浮文を貼り付けている。8は9の口縁部と考えられる土器片である。

② 石 器

○石 鋸

第24図 石器実測図



第24図に示す6点の出土遺物がある。2は基部を欠失しており不明である、1・3・4はいずれも無茎の脇挟式の石鎌である。1は全長2.2cm、最大幅2cm、重量650mg、3は長1.7cm、幅1.7cmの正三角形の石鎌である。石質は頁岩で重量620mgである。4は全長1.5cm、幅1.4cm、重量250mgの頁岩を利用した最小の石鎌である。5は硅岩を利用した石鎌で1部欠失しているが全長3.7cm、基部幅2.1cmの重量3.1gの無茎の石鎌である。片面には大剥離面を全面に残している。6は、全長6.2cm最大幅2cmでよい基部をつくり出している。石質は硅岩質の石材を利用しており、片面は大剥離をそのまま活用しており、剥離のウェーブがみられる。片面には、大剥離面を中央部に残す以外は全面に小剥離がほどこされている。断面は台形状となる。

○砥 石

第24図の7、図版8に示す遺物である。全長29.2cm、最大幅3.2cm、最大厚1.5cmで石質は水成岩である。9cm部分は多角形の面取りをほどこしており把り部分を想定させるが両面からの研ぎ痕が見られる。A面では明らかに左右に分かれた研磨面があり、B面では一方から研磨面が見られる。A面での研磨面中央部分で折れているが土圧による折傷であろう。

○剥離片

竪穴住居址の集石遺構及びその周辺部で検出された剥離片（チップ）である。石材は主に赤褐色の硅岩が多く、次いで緑色の硅岩に黒曜石が一部に見られた。いずれの剥離片にも小剥離のショッピングは見られず剥離片利器としては考えられない。利器を作り出すための集石であったと見ている。剥離片第24図の内、細片の剥離片が、竪穴住居の主柱穴2~4の中間位置より出土した遺物である。

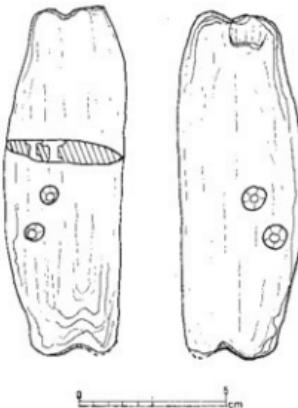
○石包丁

第25図に示す遺物で、3号墳の封土中より出土した遺物である。石質は緑泥片岩を利用しておらず、石器全面は磨研されている。刃部は両刃となっているが、やや片面に研ぎ出しが強く見られる。長方形の両端部に脇挟が見られるが、他地域での出土遺物に比べて挟り込みは弱い。中央部に2つの貫孔が穿たれている。貫孔もまた他地域の出土遺物と異なり、貫孔の間かく及び貫孔位置が不安定な状態となっている。

(3) 堀立柱建物址

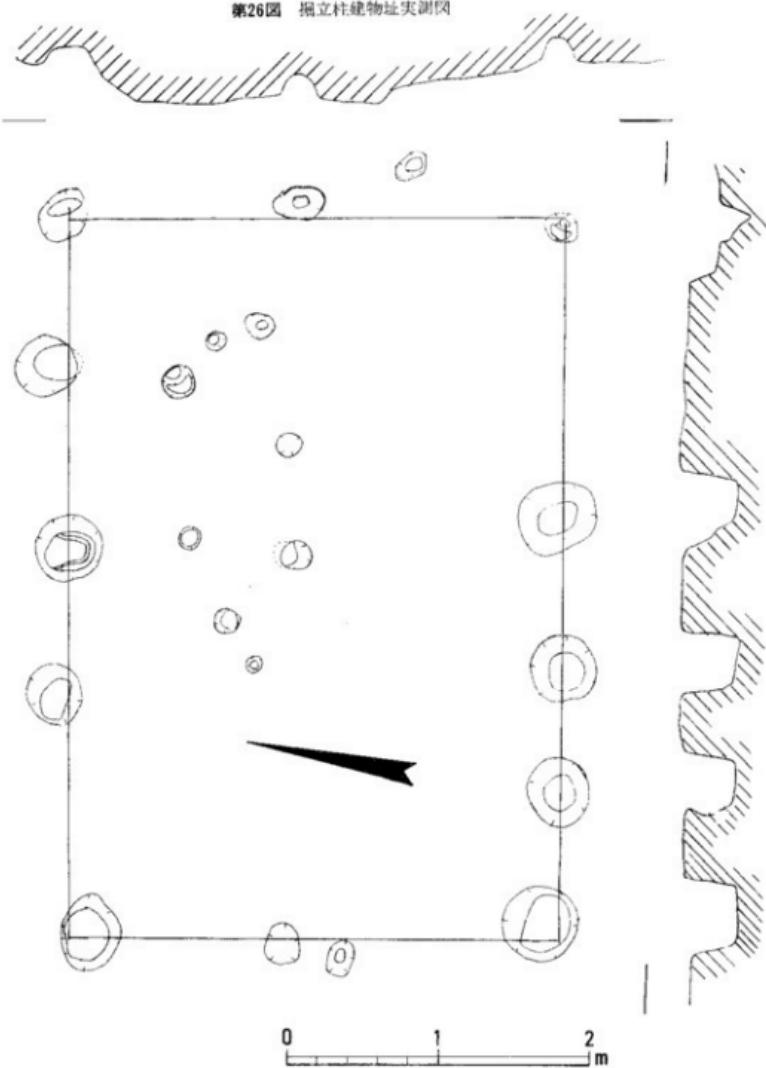
① 堀立柱建物址と拡穴

第25図 石包丁実測図



発掘前に小祠を祀る2号墳の位置に検出された遺構である。地山面に見られる、墳丘部の削出しは、1号墳よりやや規模が大きく、地山面の比高もわずかに高い位置にあった。墳丘内には主体部の痕跡を認められない程に剥平され、わずかに墳丘上に散在する河原石の玉石

第26図 墓立柱建物址実測図



が検出されたにとどまったが、一方地山に掘り込まれた柱穴を検出した。

第26図は建物址の実測図である。柱穴は合計12個と10個の抗穴を填土内で検出した。建物は東西に棟方向をもつ梁間2間、桁行間4間の建物である。建物の柱穴配置(割付)に見られる両側面(桁行)の1間が他の桁行間に見られる間取距離の割付けとは異なる割付け距離となっている。今柱穴No.9を南面する桁行間の東角柱穴よりNo.1, No.2と1順して梁間の棟持柱穴No.12と呼称すれば、桁行間に見られる柱穴間の距離における対応する柱穴は、No.1とNo.11, No.2とNo.9, No.3とNo.8, No.5とNo.7は共に対応する位置にあるが、南側面の桁行間の平柱穴No.4と北側面の桁行間の平柱No.10では対応する位置に柱穴を持たない、割付け位置にある。No.4及びNo.10はそれぞれ、No.4は柱穴No.7とNo.8の中間位置に、No.10は柱穴No.1とNo.2の中間柱位置にある。今柱穴No.4とNo.8より梁材を架構すれば、柱穴No.1とNo.2及び柱穴No.7とNo.8には当然に、梁材の受け材としてのNo.1とNo.2及びNo.7とNo.8には、丸桁を利用したとしても落掛をもつか、または渡り脚仕口が必要となる。

以上の柱間距離の違いを筆者は出入口のために作り出された工夫で、他の柱間における倍の柱間を取ったものと推察している。

次に建物内にて検出された8個の抗穴がある。抗穴の配置はいずれも直角の位置をさけた配置となっている。上部に何等かの構築物を生きとすれば実に不安定な抗穴(支柱)配置となる。

(2) 建物址と抗穴(支柱)についての若干の考察

さきに建物の柱穴配置から出入口と推察した。いま入口と出口を異にする建物と見れば、入口は撰位の社門に取り、出口は乾位の閑門に取った建物と見てはと思う。また建物の内部に穿たれた8個の抗穴(支柱)は桁行と梁間の90度をいみきらった配置にあり、しかも一群の配列を持つことから、建物は上間造りと推察され明らかに非日常的な建物の配列は現在をいみきらうために造り出されたものと推察される。以上の建物の方位(E20°N)に作られた入り口と出口の位、同一建物の現在を嫌った配列は、死者を送るために作られた建物と見るべき遺構であろう。ちなみに平野部における多くの柱立柱建物址に共通するものではなく、建物の方位については、立地により異なるが、明らかに山入口と推定される。柱間の相異を示す建物址は多いが、桁行の両側面に出入口を設けた建物については初見である。

(4) 土抗状遺構

1号墳及び6号墳において土抗状遺構を検出しているが、いずれも土抗内は無遺物層であったために、いずれの時期によるものか、また土抗の性格は不明である。ただいずれも占墳の基盤面である地山に掘り込まれていることにより弥生時代の遺構ではある。

V まとめ

本遺跡は鷹ノ子古墳群に含まれる支群である。周辺地域には12基の古墳が調査区以外に群集しており、特に素盞神社を祀る円墳は当古墳群中最大規模の古墳である。当古墳もすでに戦前に盗掘されている、盗掘により出土した遺物も現在では散逸し不明である。五郎兵谷支群に属する12基の内6基を調査したが、残された6基の古墳も開墾による破壊もしくは、盗掘の巻き目をみている。今調査により、これらの古墳は6世紀末から7世紀に前半にかけて造られたおり、10m内外の墳丘をもつ円墳はいずれも羨道部をもたない。一見竪穴式石室に近いつくりとなっている点においては共通する。無羨道ではあるが、いずれも玄門石をもった石室構造である。墳丘部の割り出しについては、大規模な墳丘をもつ古墳の造営にみられる、後方部に対する前方部の割り付けを行うものとは明らかに異なっており、古墳の主体である。主体部構造の割付けをしたのちに、主体部を被覆する目的に立った封土版築である。

いいかえれば小規模における古墳造営では、主体部を中心に造営され、全体部の保護的な感覚がより強く押し出されている。封土状況については不明であるが、石室の規模からして、1尋の範囲にとどまる封土版築と考えられる。とすれば石室の天井高もそれに等しい値とみられることから、古墳の墳裾部と墳丘頂部の割り合いは、墳裾部が5尋であるのに対して墳丘頂は2尋前後となる。この数値は4号墳にも適用される数値であった。このことより松山市内に点在する直径10m内外の小円墳においては、五郎兵谷1号墳とほぼ同様の造営手法を取るものとも推考される。

近接地に検出された掘立柱建物については、建物の項で若干ふれてきたが、筆者はあくまでも古墳に直接関係を持つ建物址と考えている。前述の墳丘の版築と石室の規模からして、羨道部はなくとも、玄門石を配することにより、古墳への追葬は容易でありこの追葬にともなう墓前儀式が、この建物址内で行われたとみるべきであろう。死者の奥津城にいたるまでの殯が、薄葬令により廃止された後に、社会的変遷をどのような形態をもって変化したかは不明であるが、この建物址が殯に変わるとみるべきであろう。死者の野辺の送りを行った場所ではなかろうか、建物址の内部において検出された括穴群は、棺（屍）の仮安置をし供養の場とするならば、建物址の柱列と括穴列の配置は、非日常的行為を目的とする場所であるだけに、両者の配列の相異は当然すぎる配列として理解されよう。

ただ筆者の知る限りでは、他地方における報告例を知らず、また市内における検出例もなく初見である、とはいえて周辺に点在する古墳と、集落形成位置等からして、建物位置が、集落形成位置よりも離れており、前述のごとく仮説に近きものを推考した次第であり、先学諸兄の御指導を心より仰ぎたい。

さらに一号墳より出土した三累環の把頭は、松山市において、星ノ岡より（円墳）出土を見ており二例となる。両者の造りはほとんど大差なく、同一製造技法によるものであろう。新谷武氏によれば“新羅にみる把頭の系譜の範疇にある”とすれば、本墳と朝鮮半島との関係を知る唯一の出土遺物といえよう。

図 版

図版1

発掘区全景

発掘前の全景→

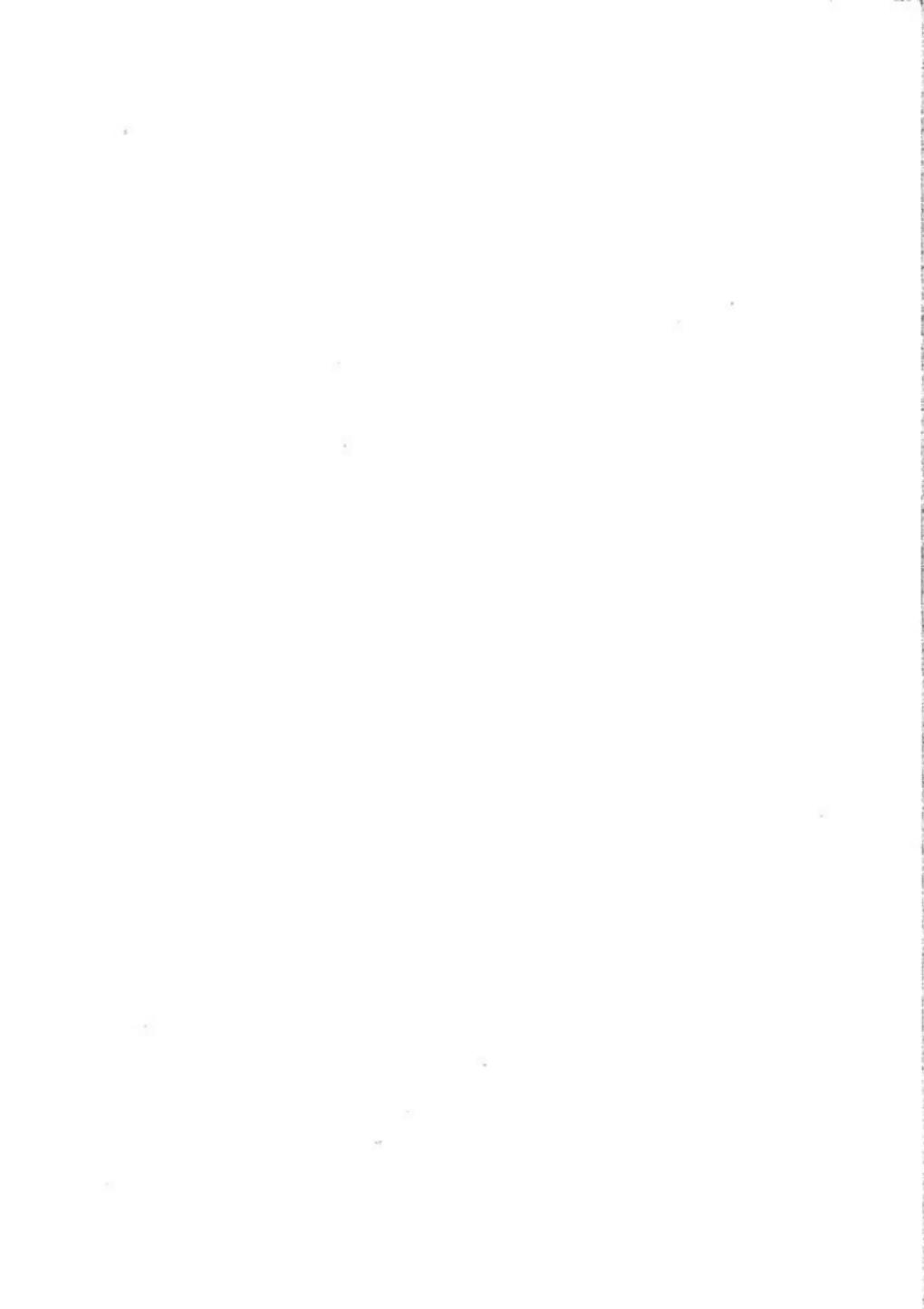


素鷦神社と発掘地点→



発掘区全景→





図版2

発掘区内のトレンチ調査

トレンチ →
EDライン

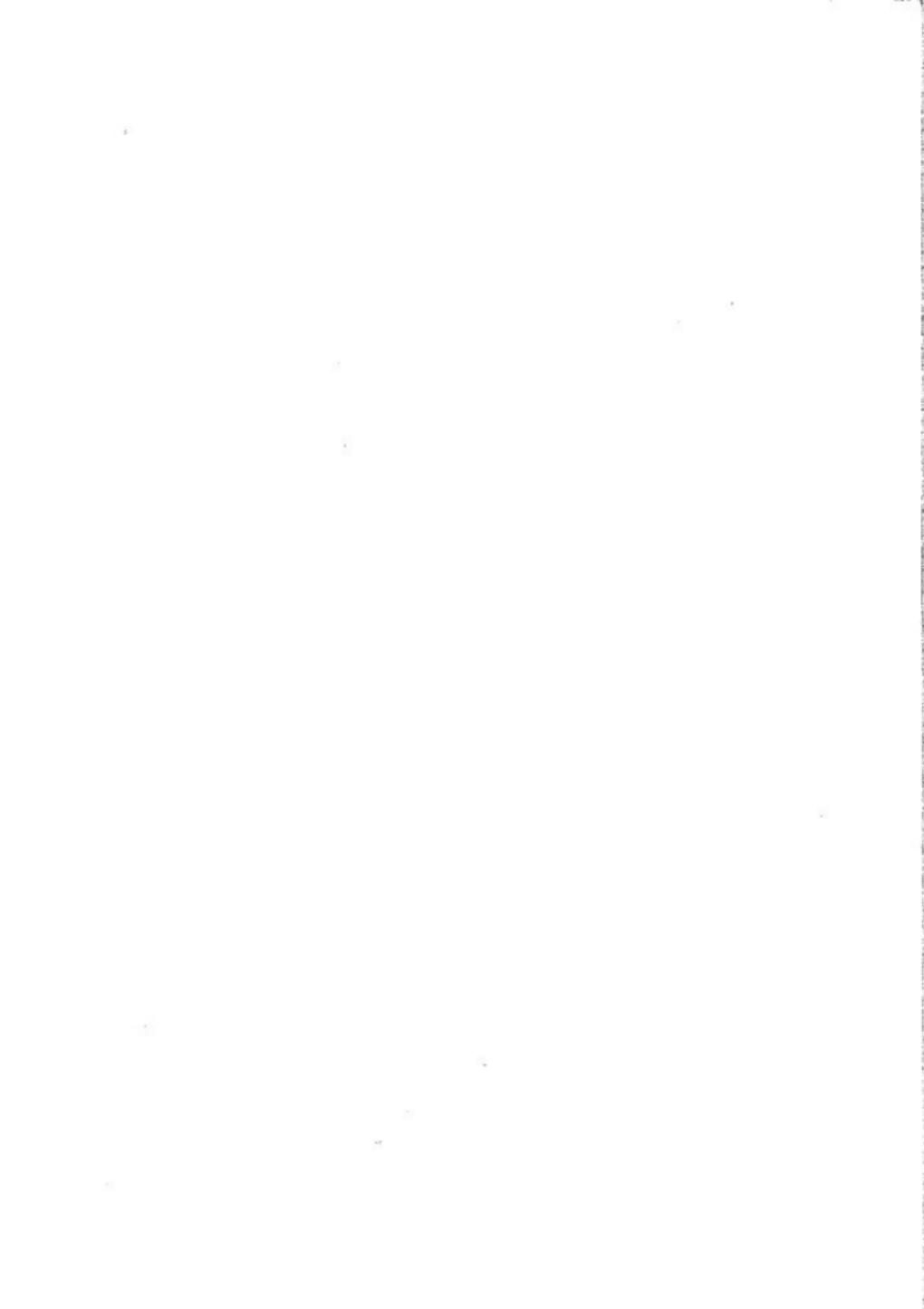


トレンチ →
EDラインアップ



トレンチによる墳裾→
部の遺物出土状況





図版 3

トレンチ調査 2

トレンチ →
4号墳 SNトレンチ



SNトレンチアップ→



SNトレンチW面と4号墳の残石出土状況





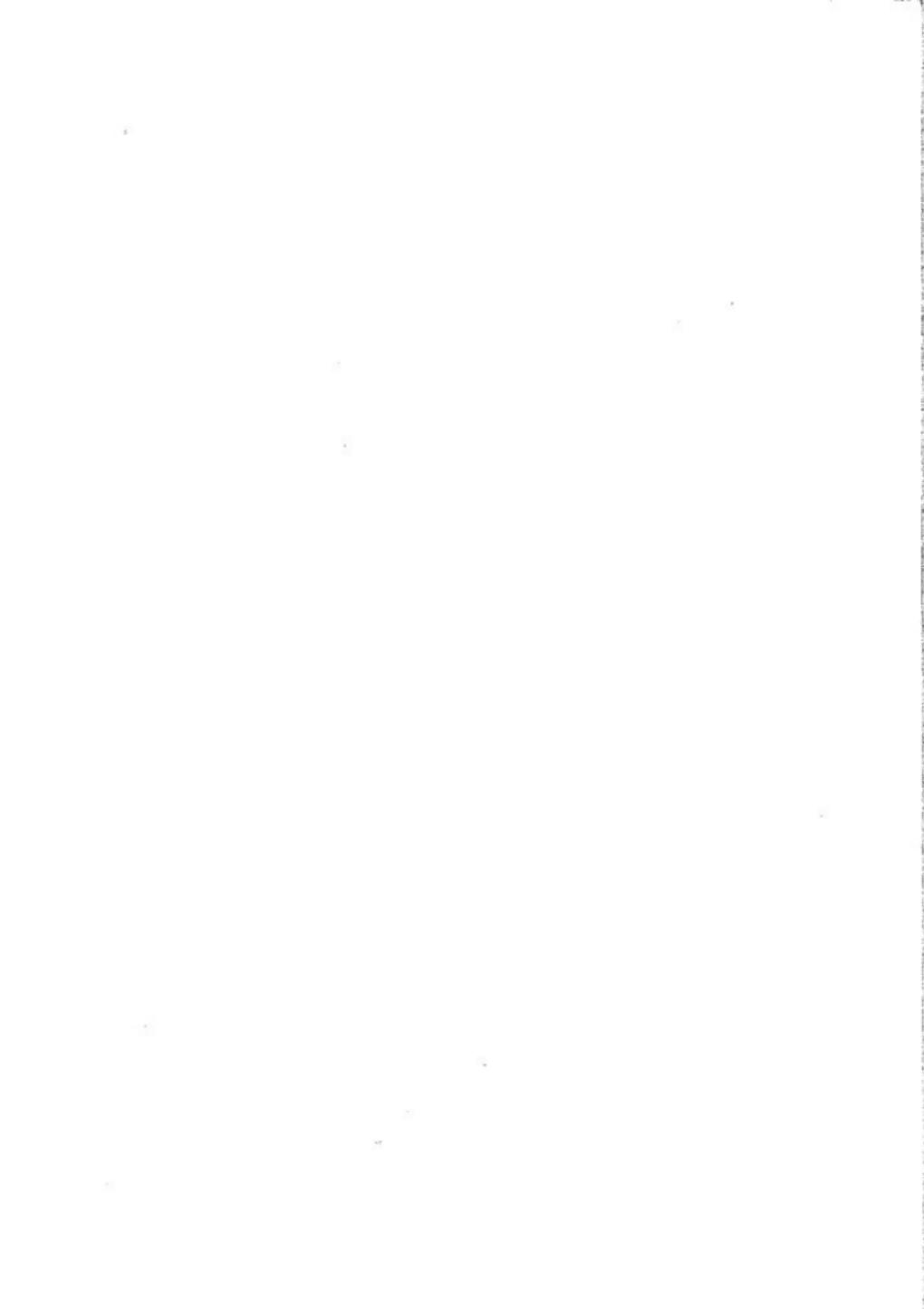
3号墳トレンチ

墳丘部のトレンチ→
版塗状況



中・下段
墳丘の断面状況版塗が
混乱（攪乱）されてい
る状況がよく見える





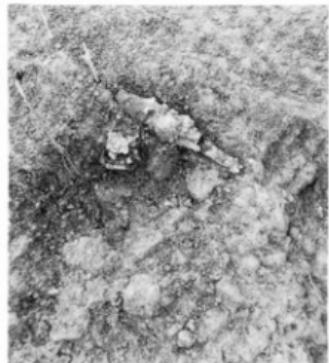
図版 5

1号墳遺物出土状況

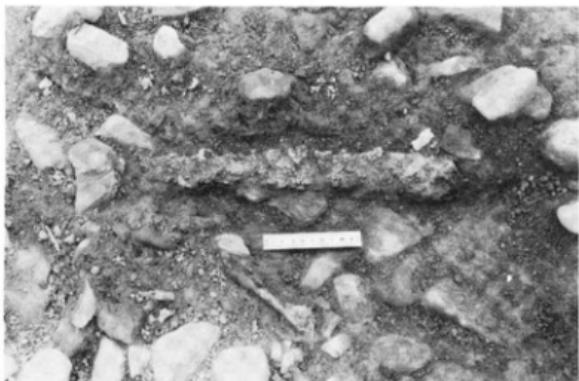
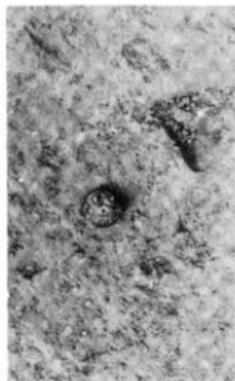
上。埴輪部の埴輪片

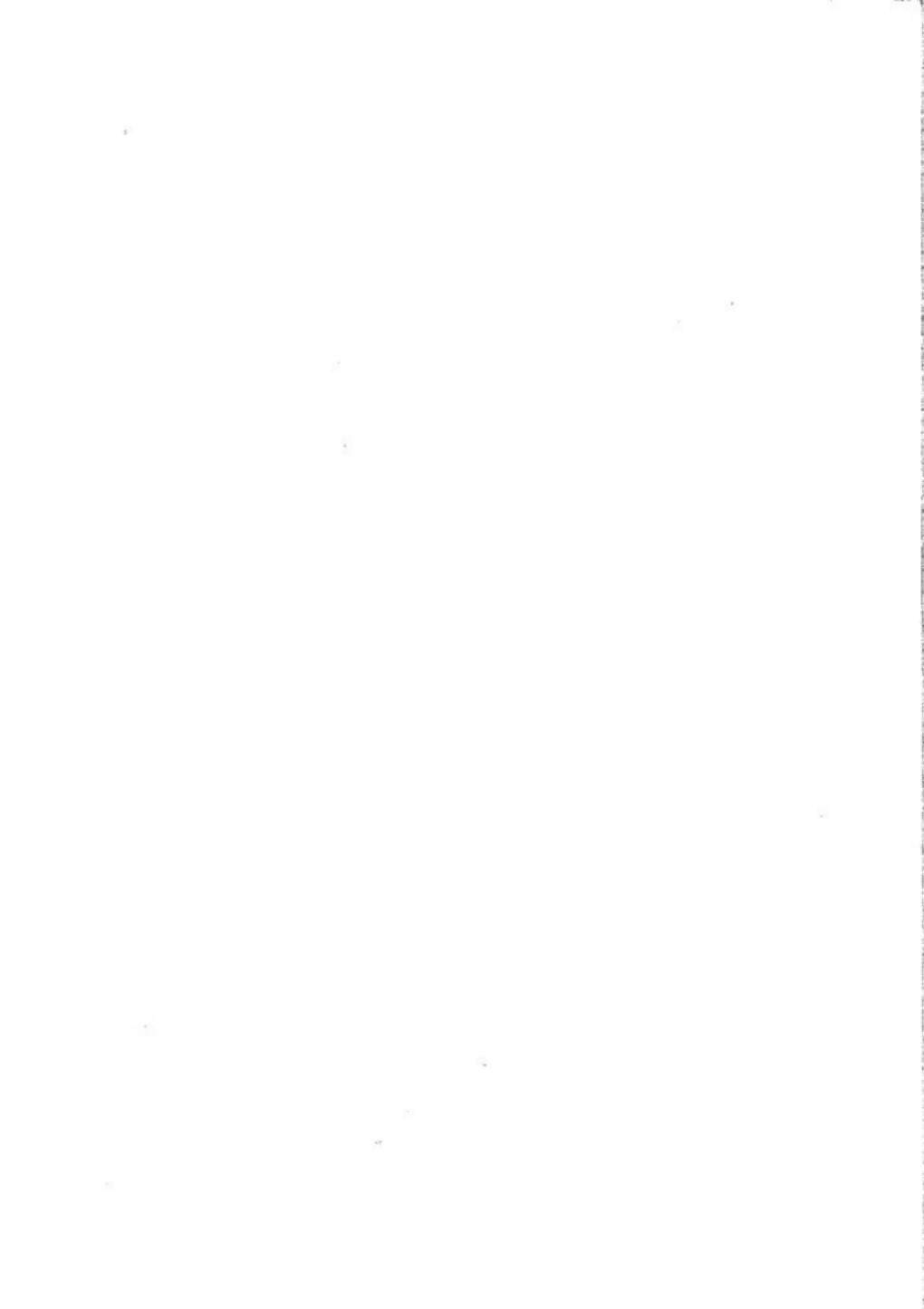


中。鐵錐・耳環



下。ガラス玉と直刀





図版 6

1号墳遺物出土状況

上、直刀の関金具出土状況

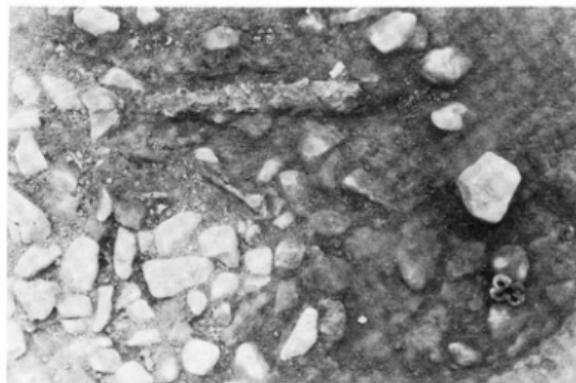


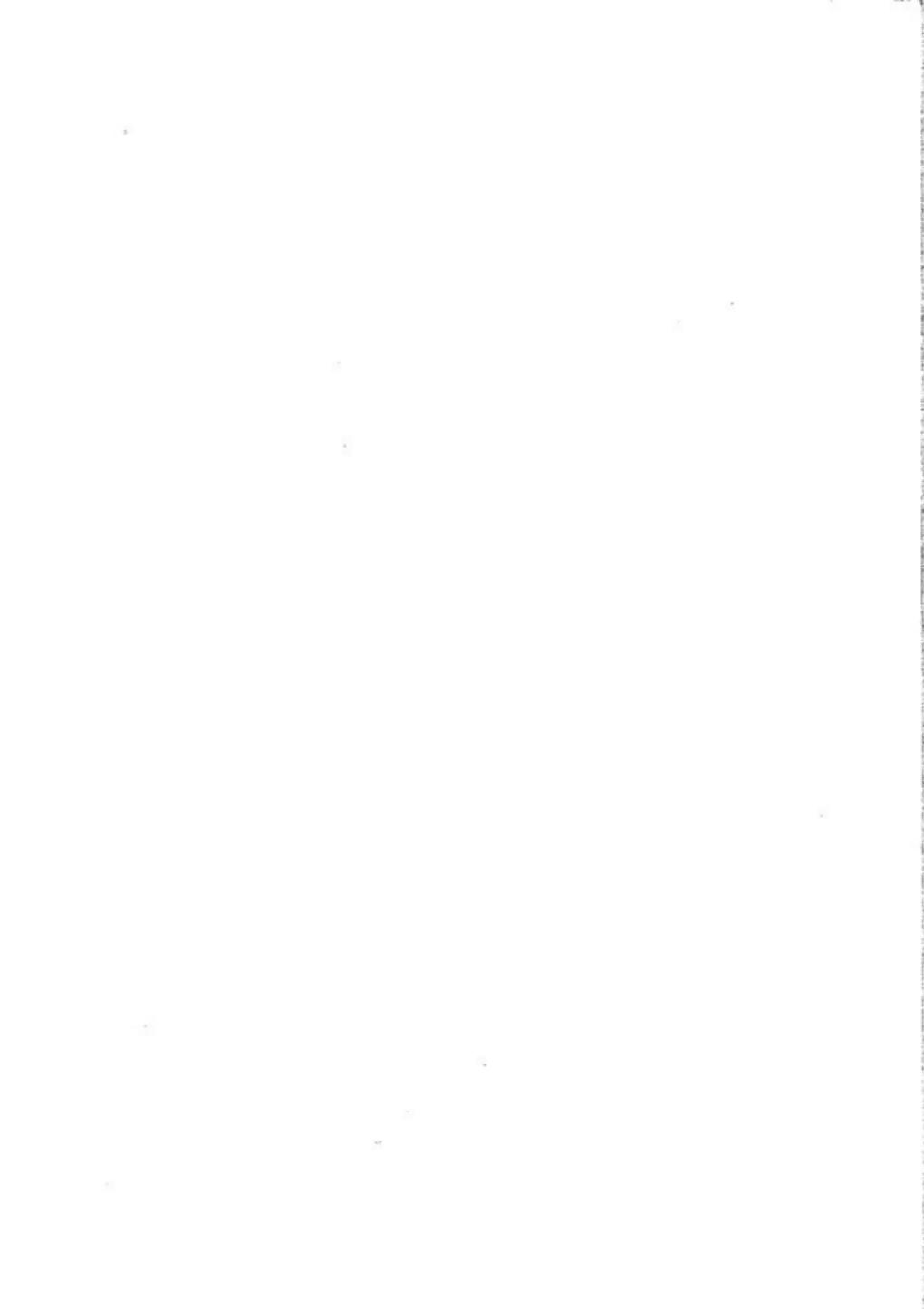
中、玉石間に検出された耳環

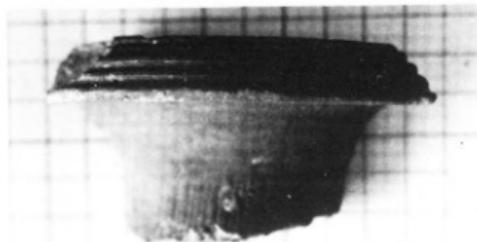


下、左 環頭出土状況

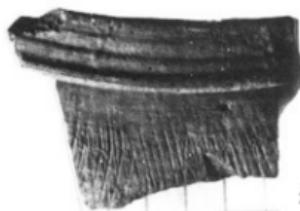
右 環頭と直刀



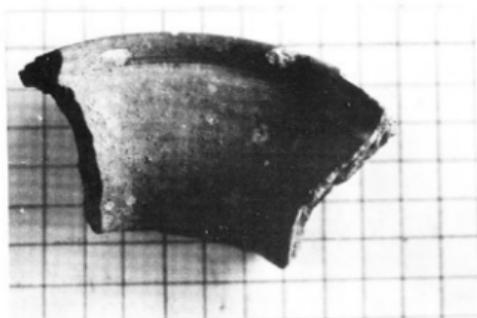




1



2



1'



3



4



5

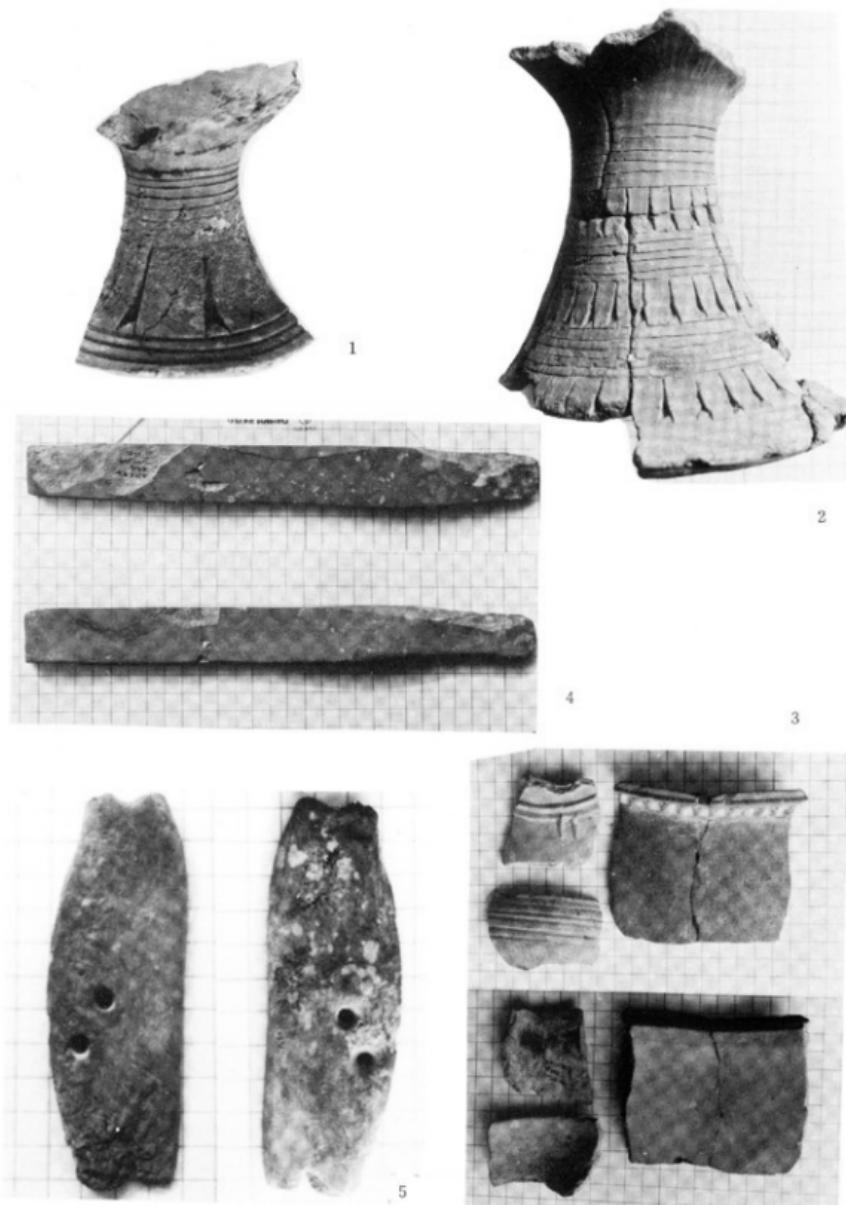
刮 片

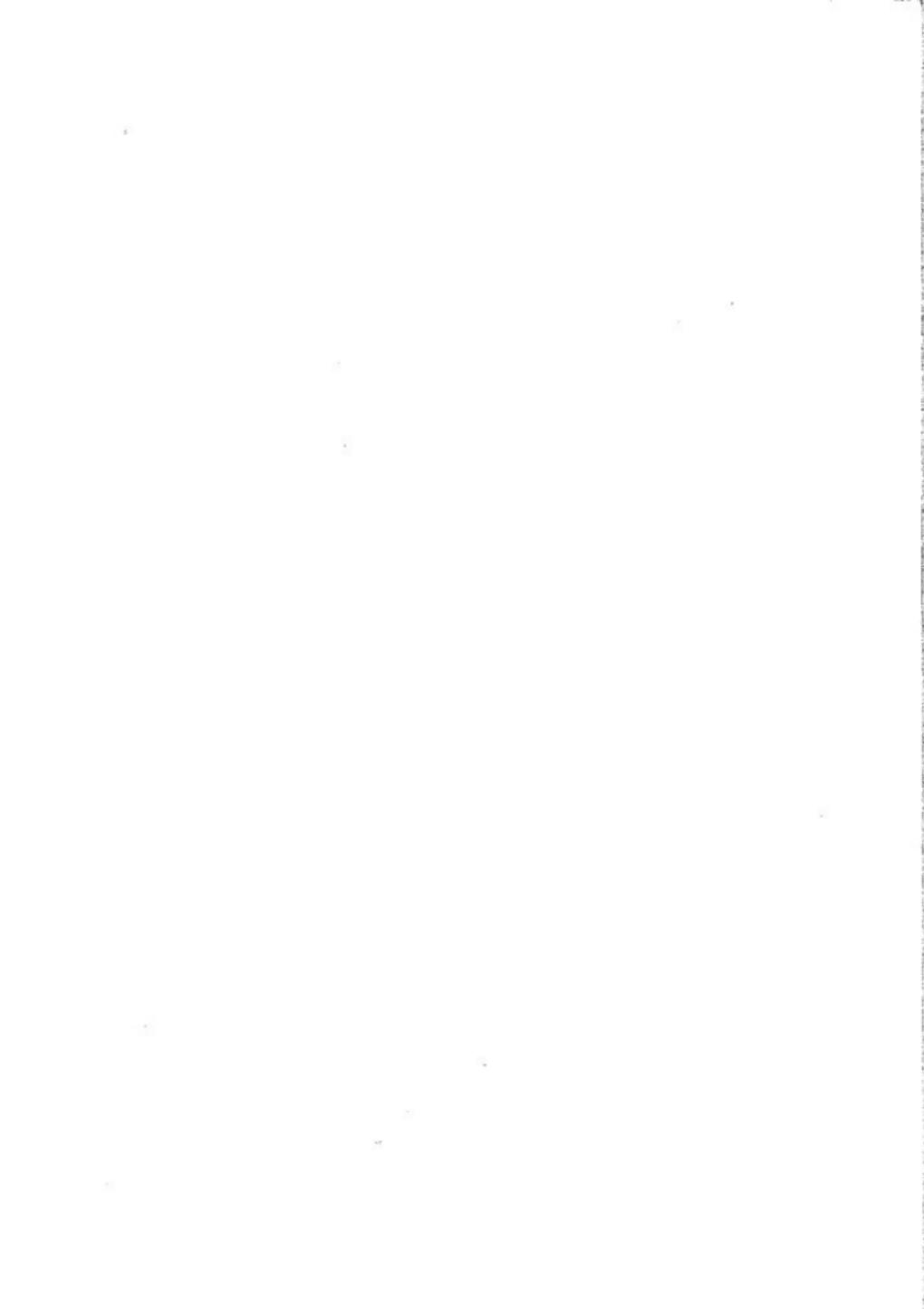




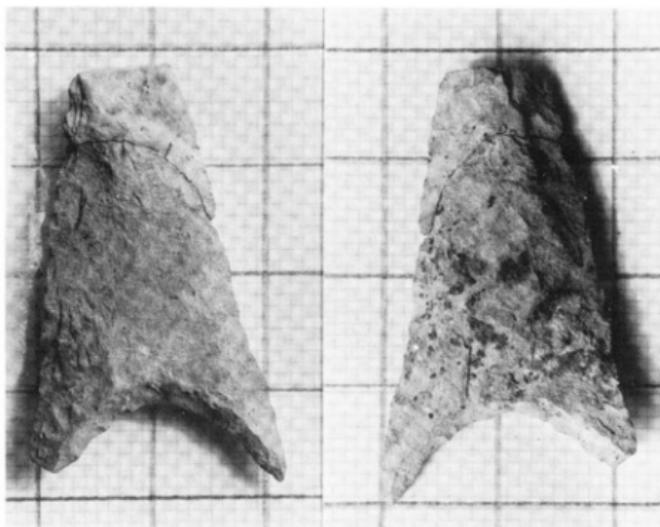
図版 8

出土遺物 弥生式土器と石器（砥石）

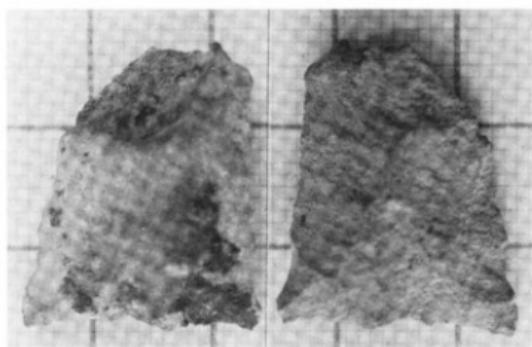




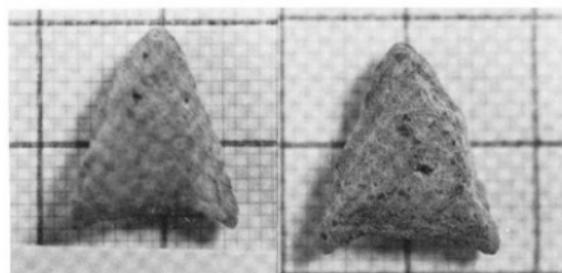
出土遺物 石器



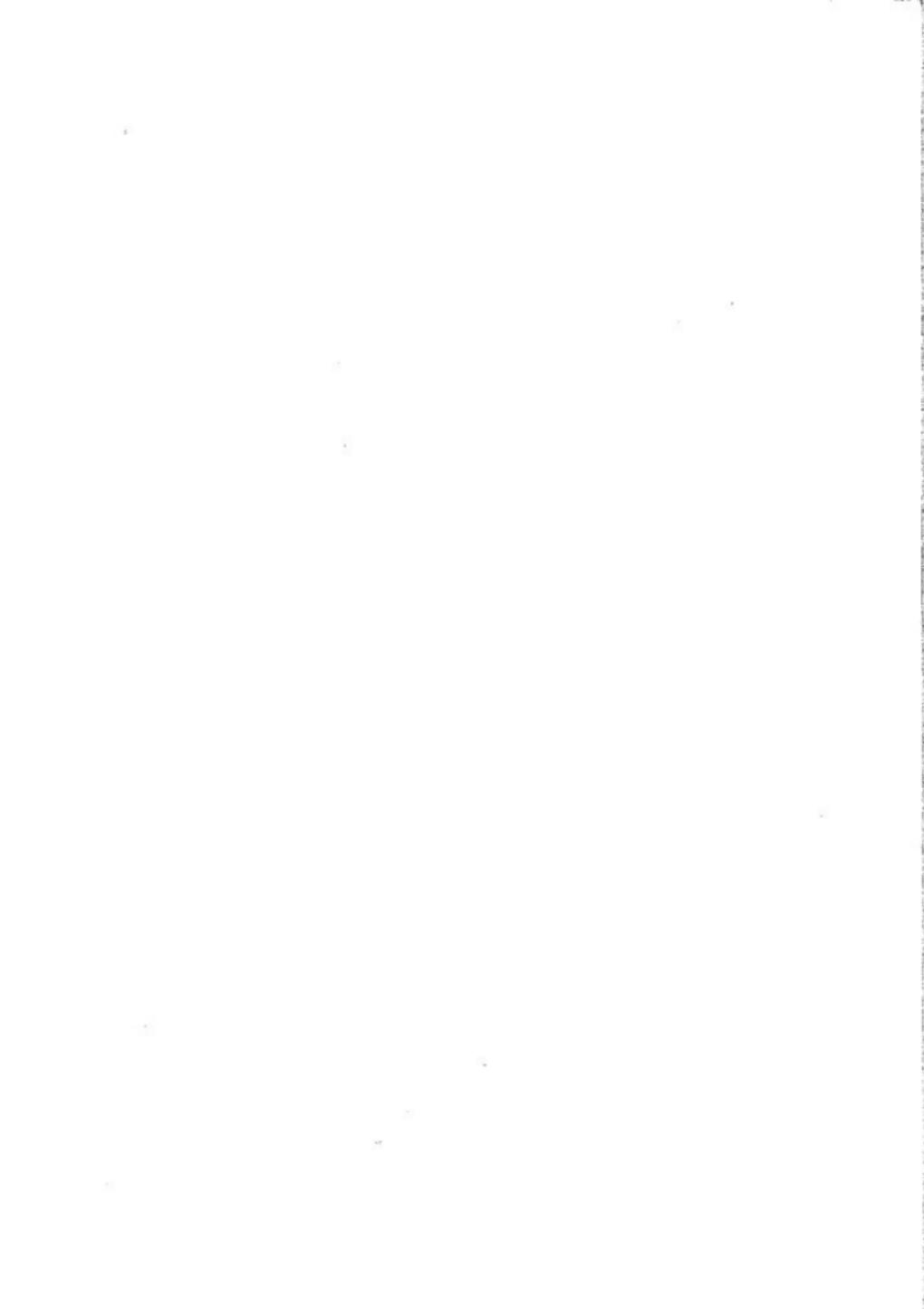
上。頁岩 1 部欠失



中。頁岩 1 部欠失



下。頁岩



図版10

出土遺物 石器

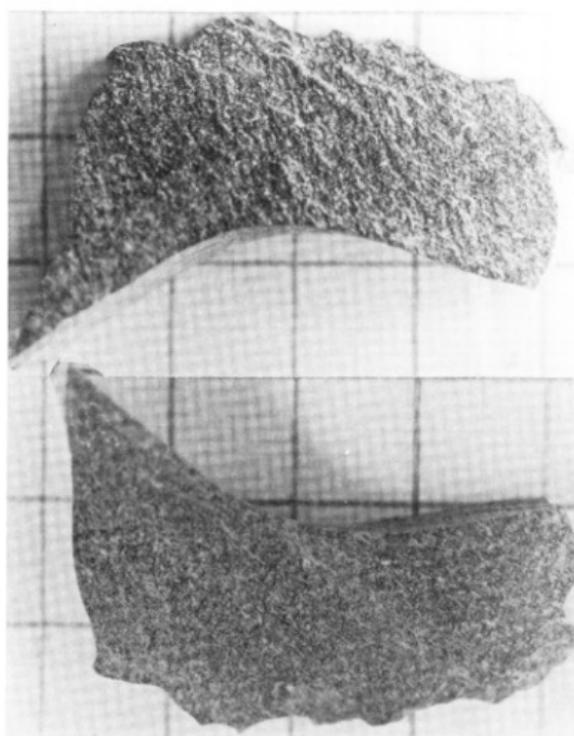
1. サヌカイト



2. サヌカイト(亜種)



3. サヌカイト
石鐵の欠損品



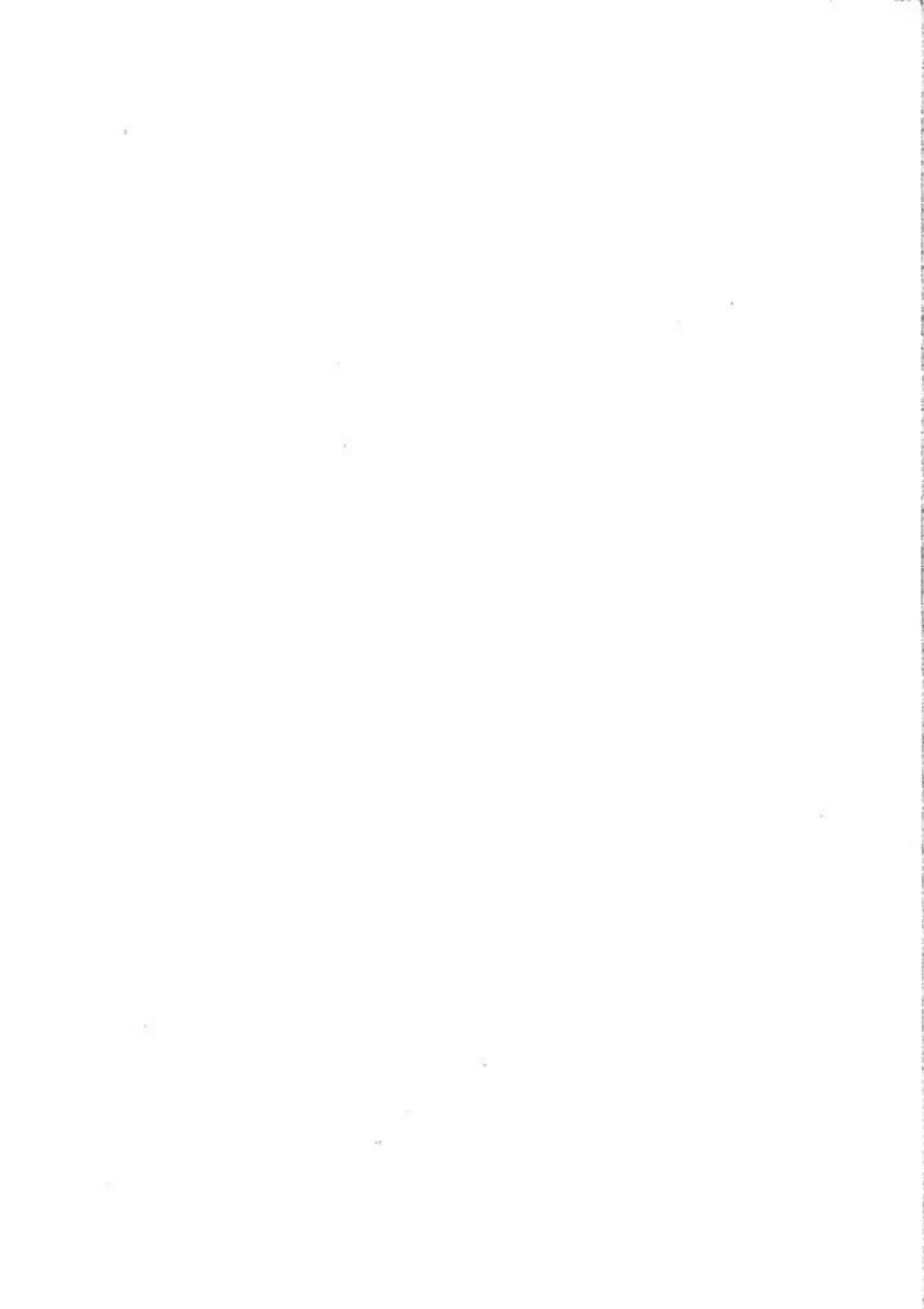
4. 頁岩・石鐵

1

2

3

4



出土遺物 石器



1

2



3

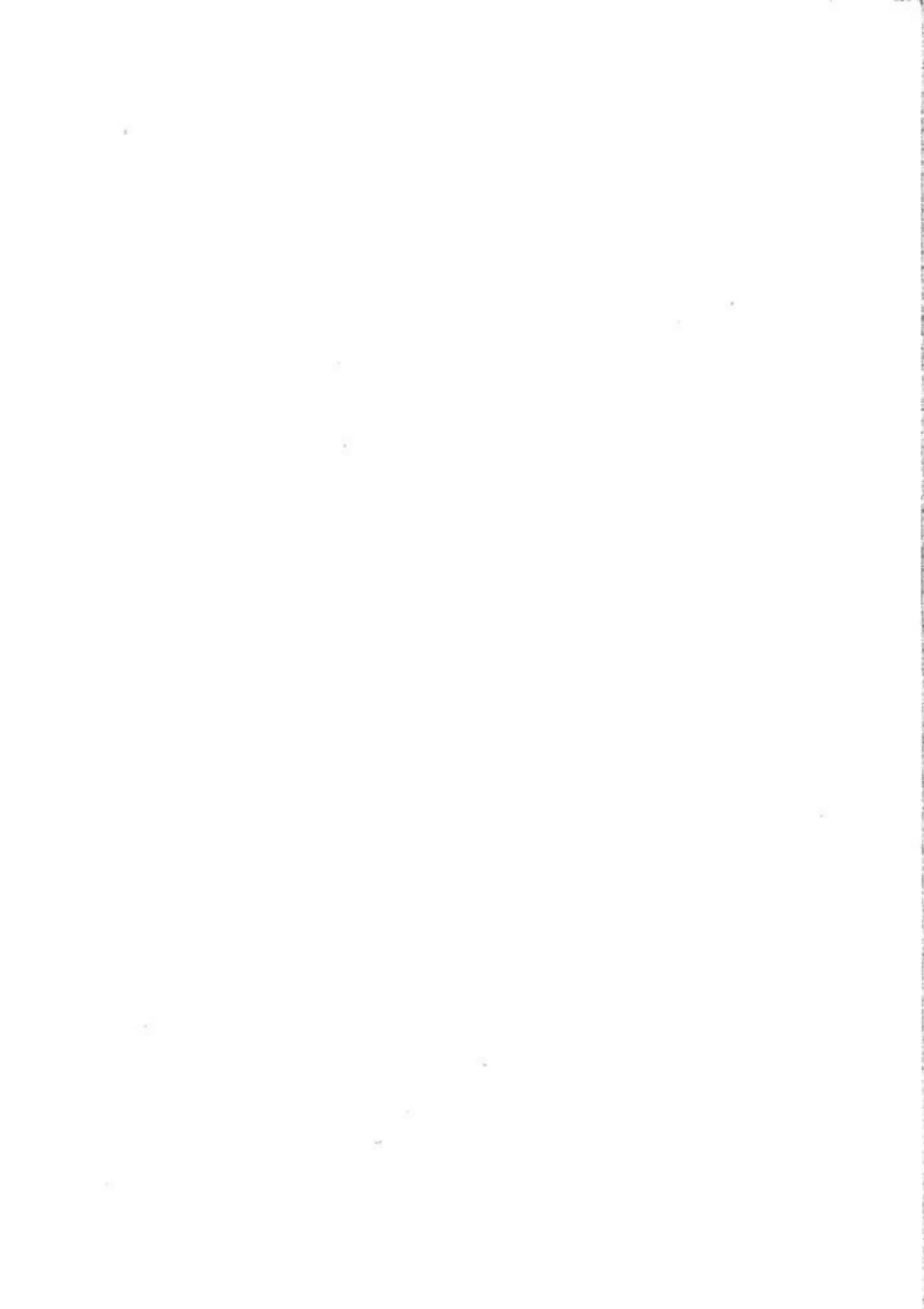
4

石器はサヌカイト

竪穴住居址より出土



5



出土遺物 石器



1



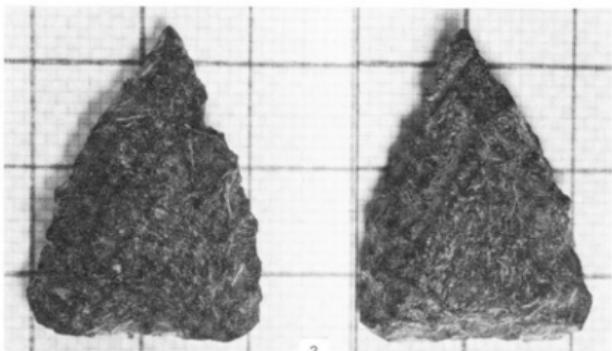
2

1. 石核

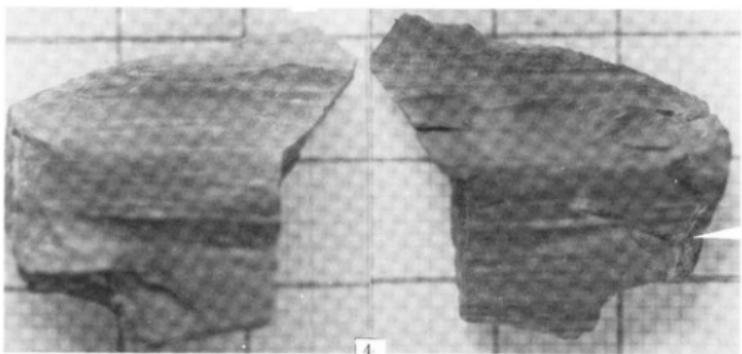
2. ナイフ型の利器

3. 石鋸

4. 剥離片硅岩



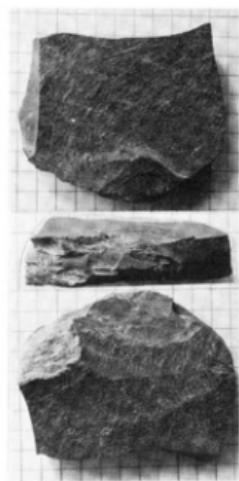
3



4

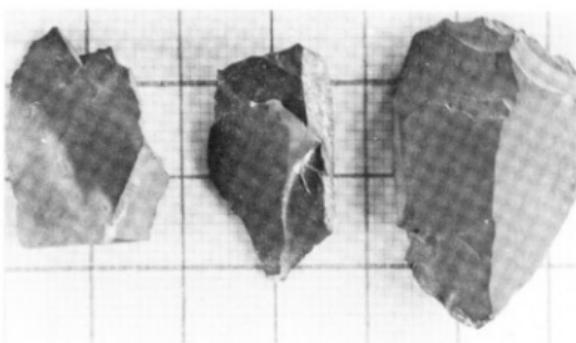


出土遺物 石器（剝片）



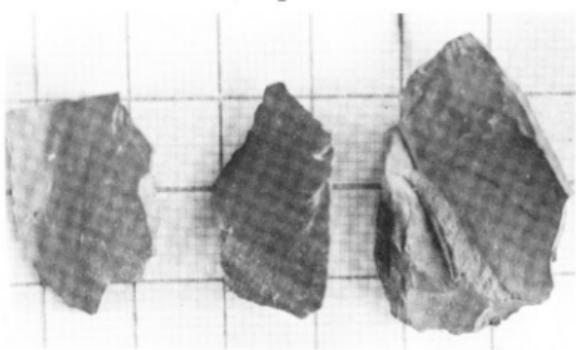
1

1. 玄武岩



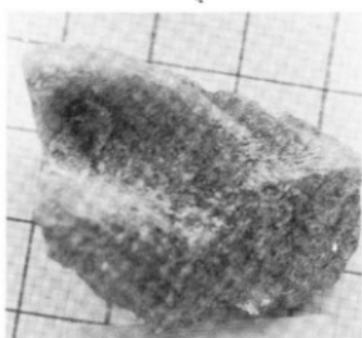
2

2・3. 赤色珪岩



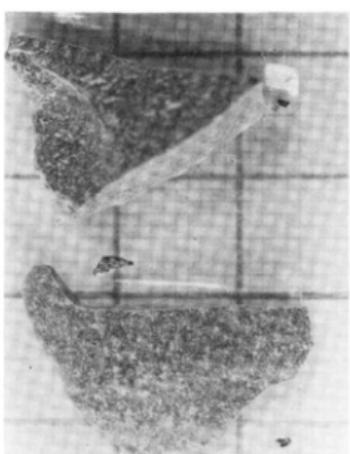
3

4. 黒曜石

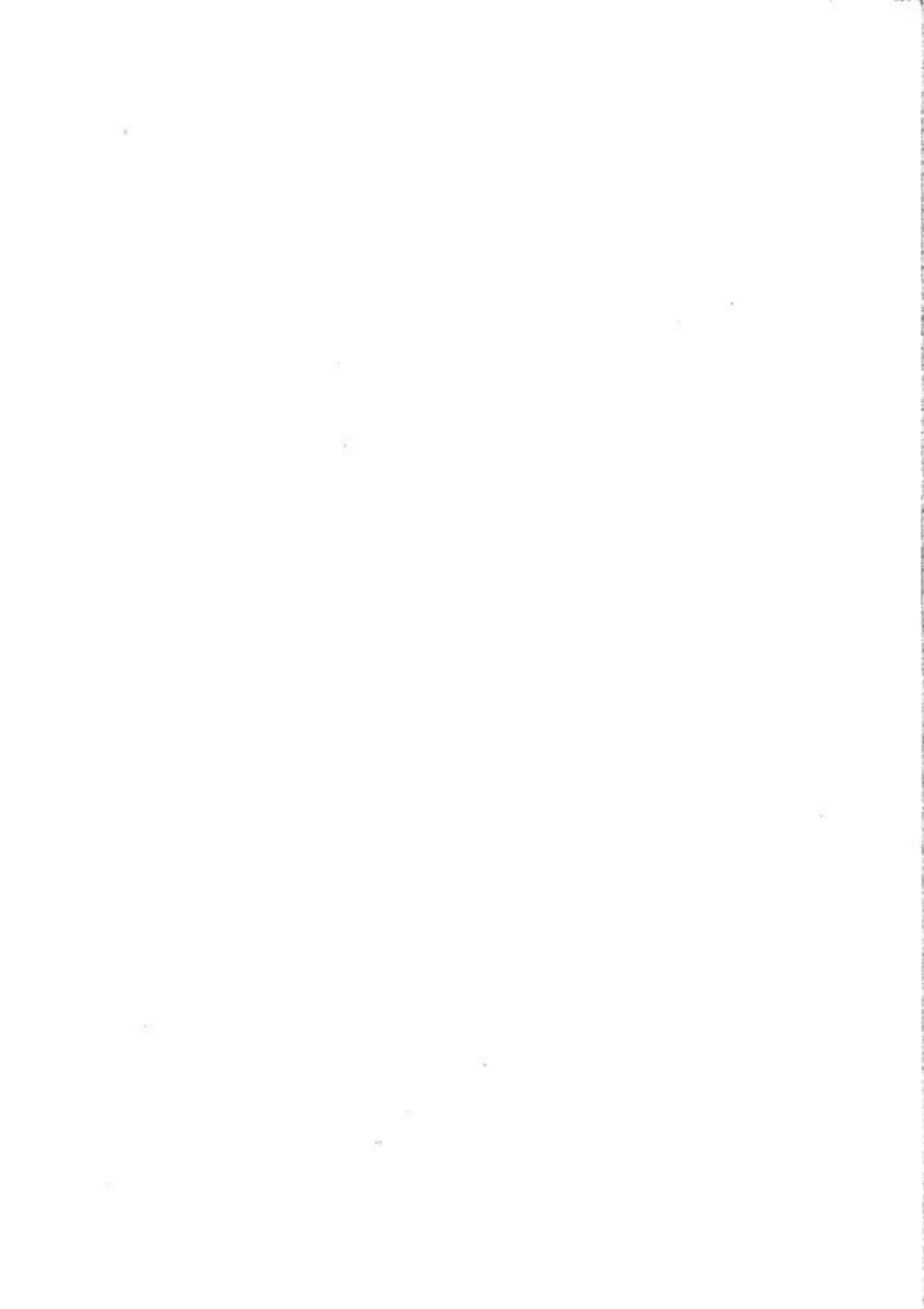


4

5. サヌカイト

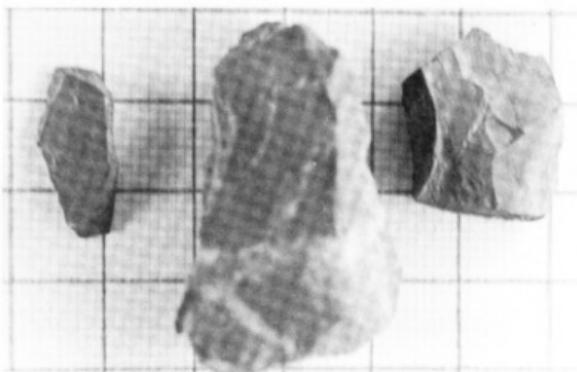


5

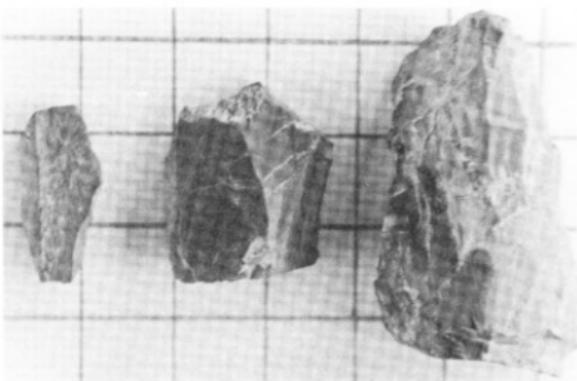


出土遗物 剥片

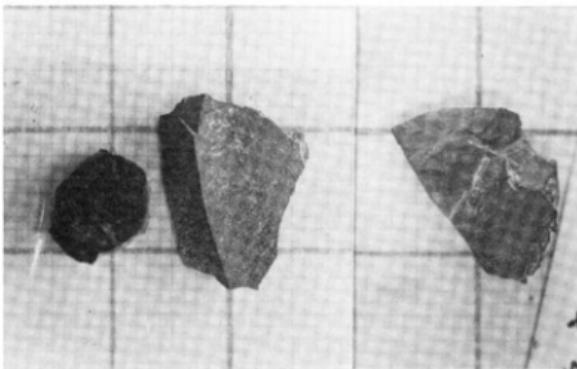
赤色硅岩

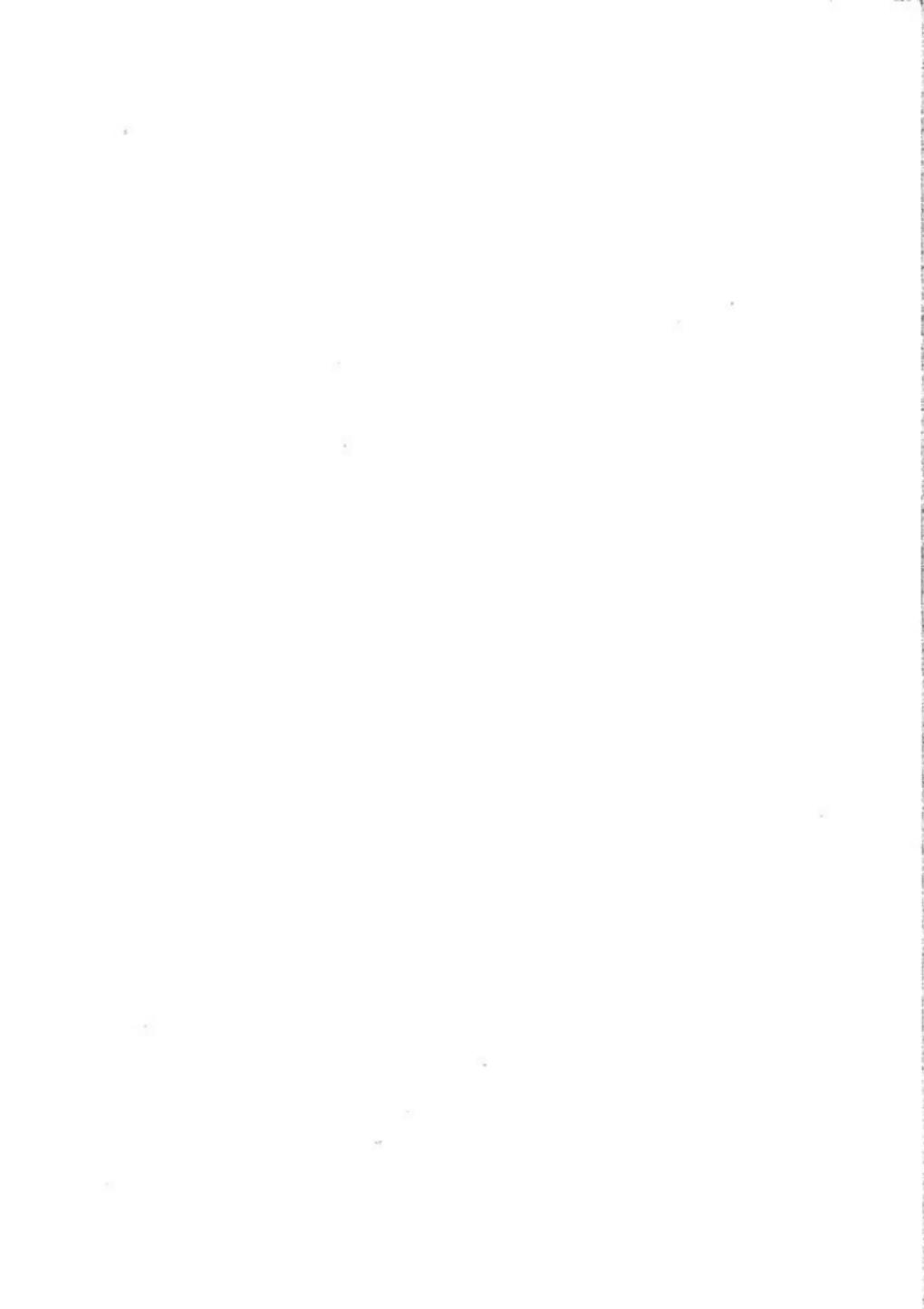


赤色硅岩



立武岩







1

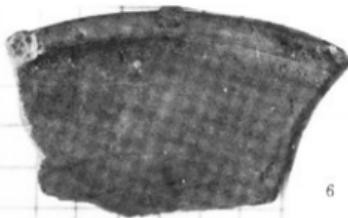


2

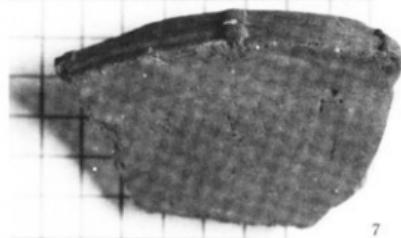


5

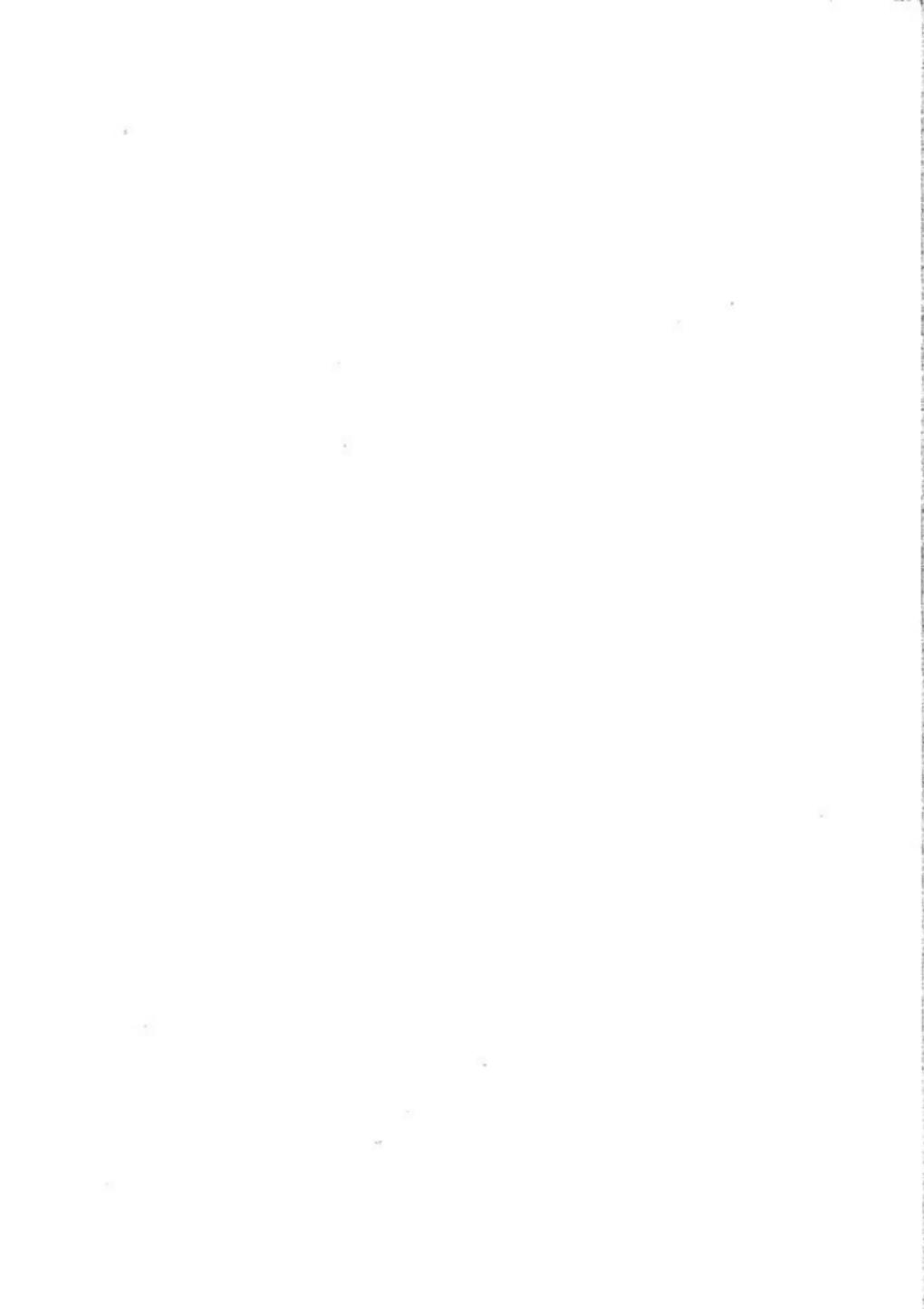
6・7は弥生土器
(5・6・7)は図版8につづく



6



7

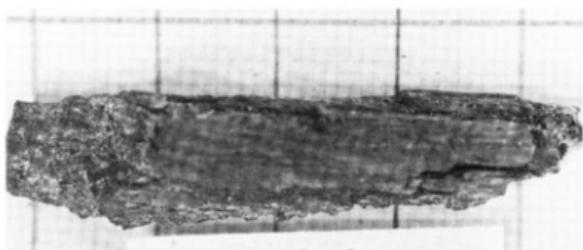


出土遺物 鉄器

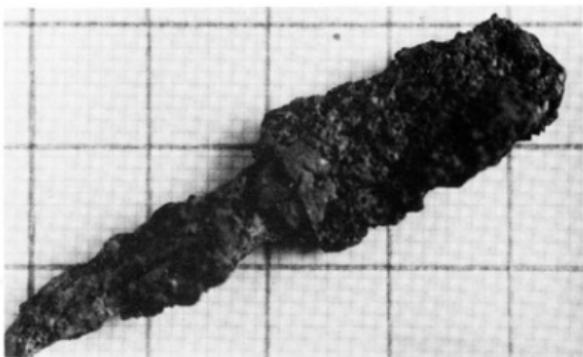
直刀の刀先

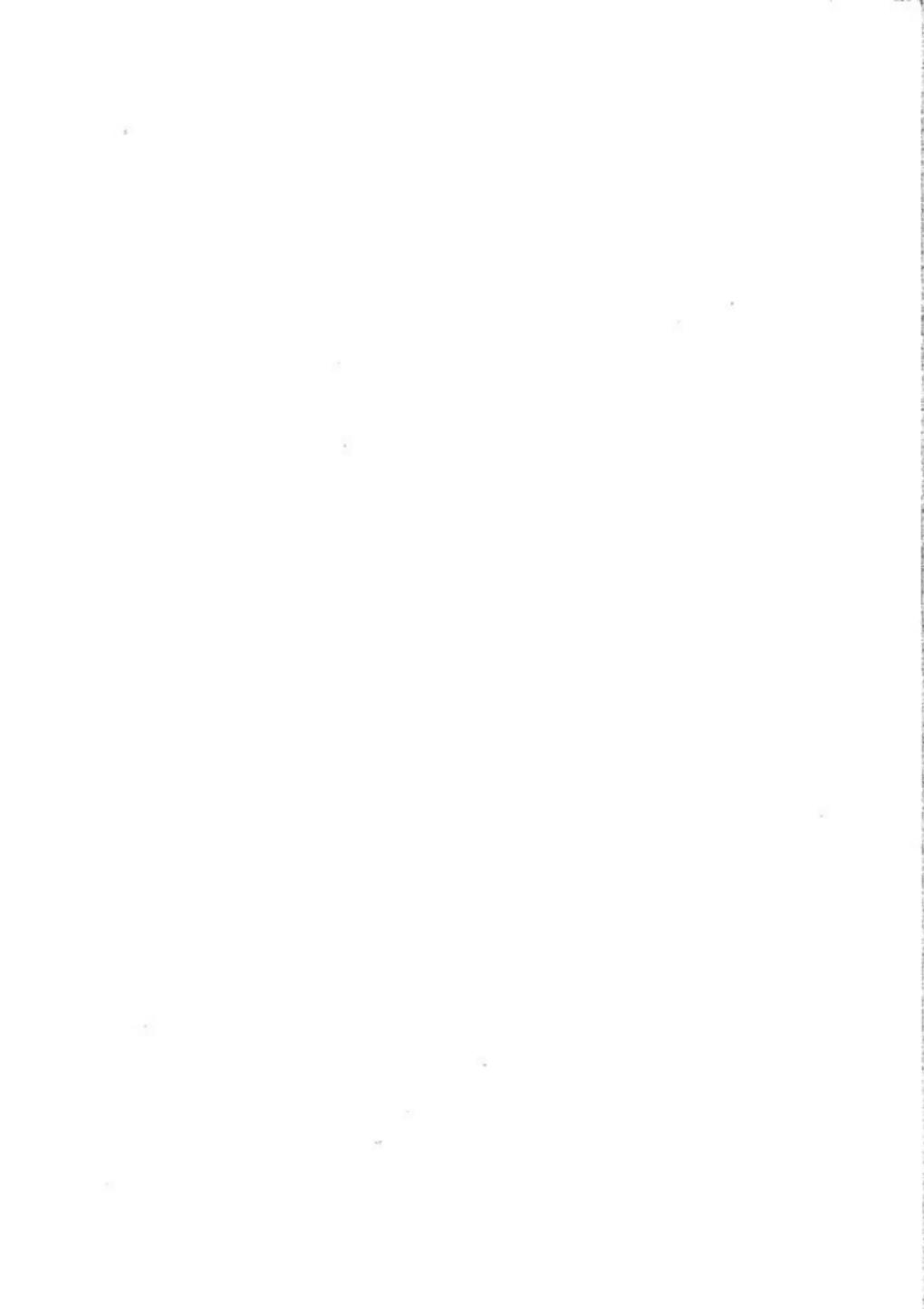


木質物の付着した刀子片

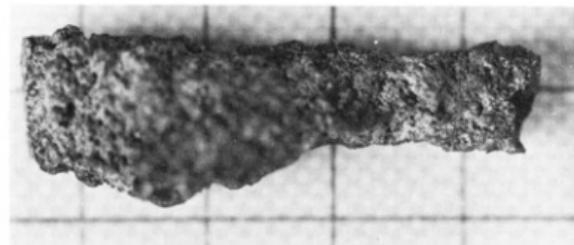
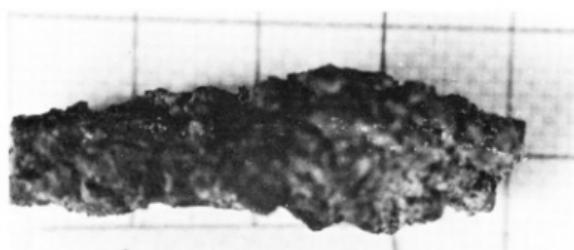


刀子



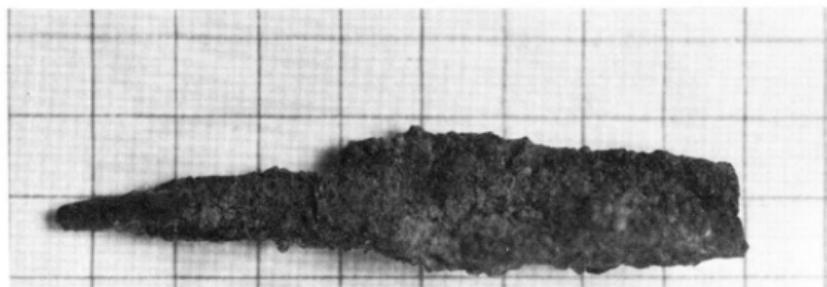


出土遺物 刀子



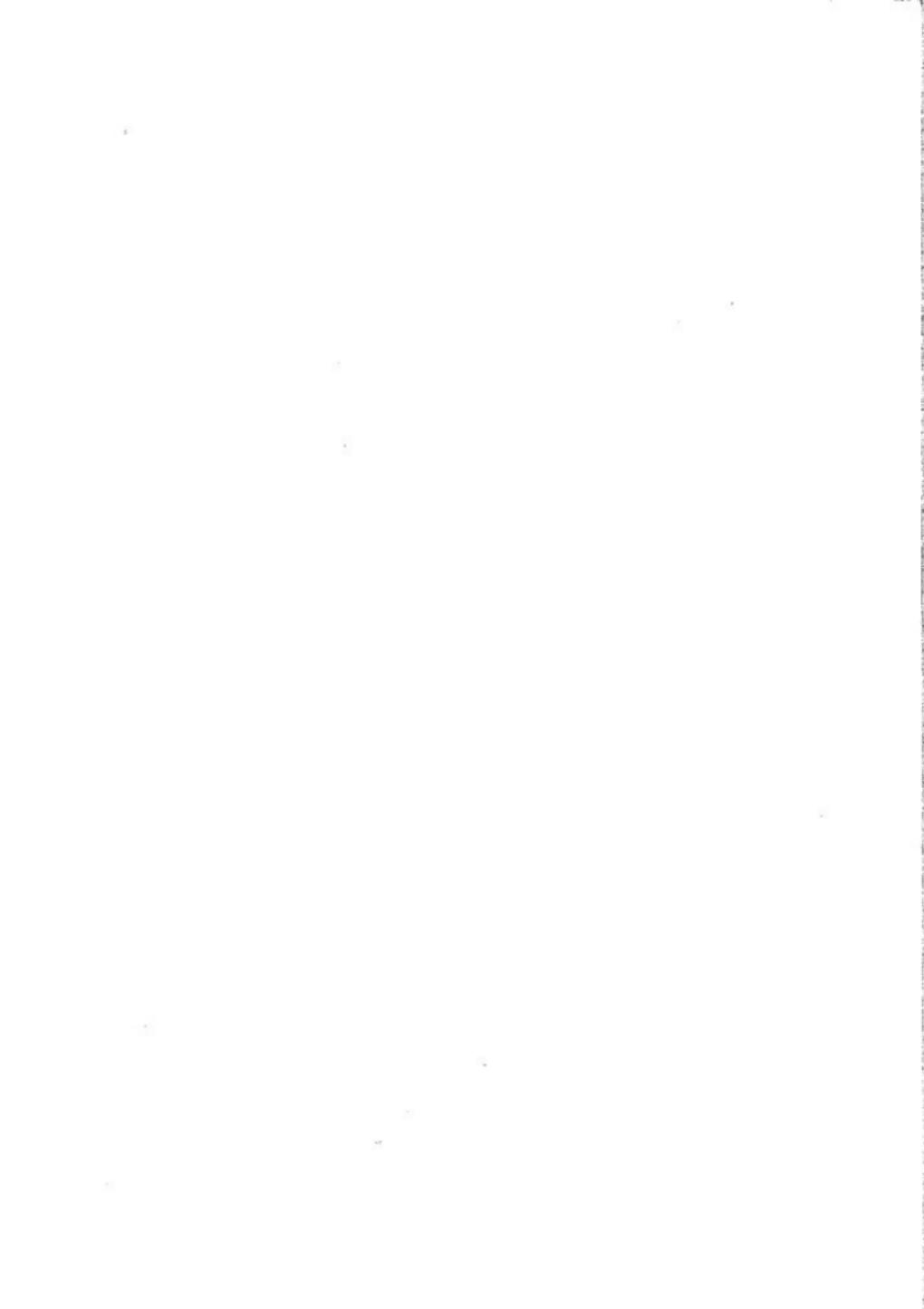


出土遺物 鐵器

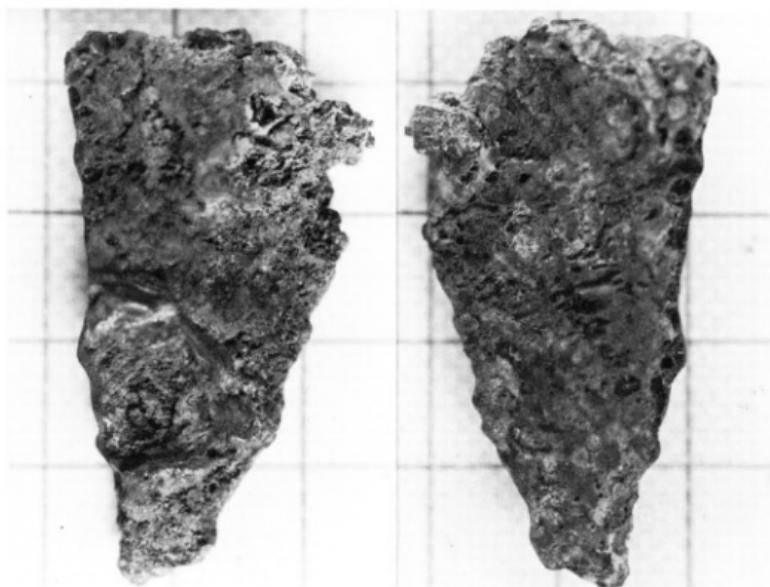


上，刀子 中，鐵鎌 下，直刀片





出土遺物 鉄器

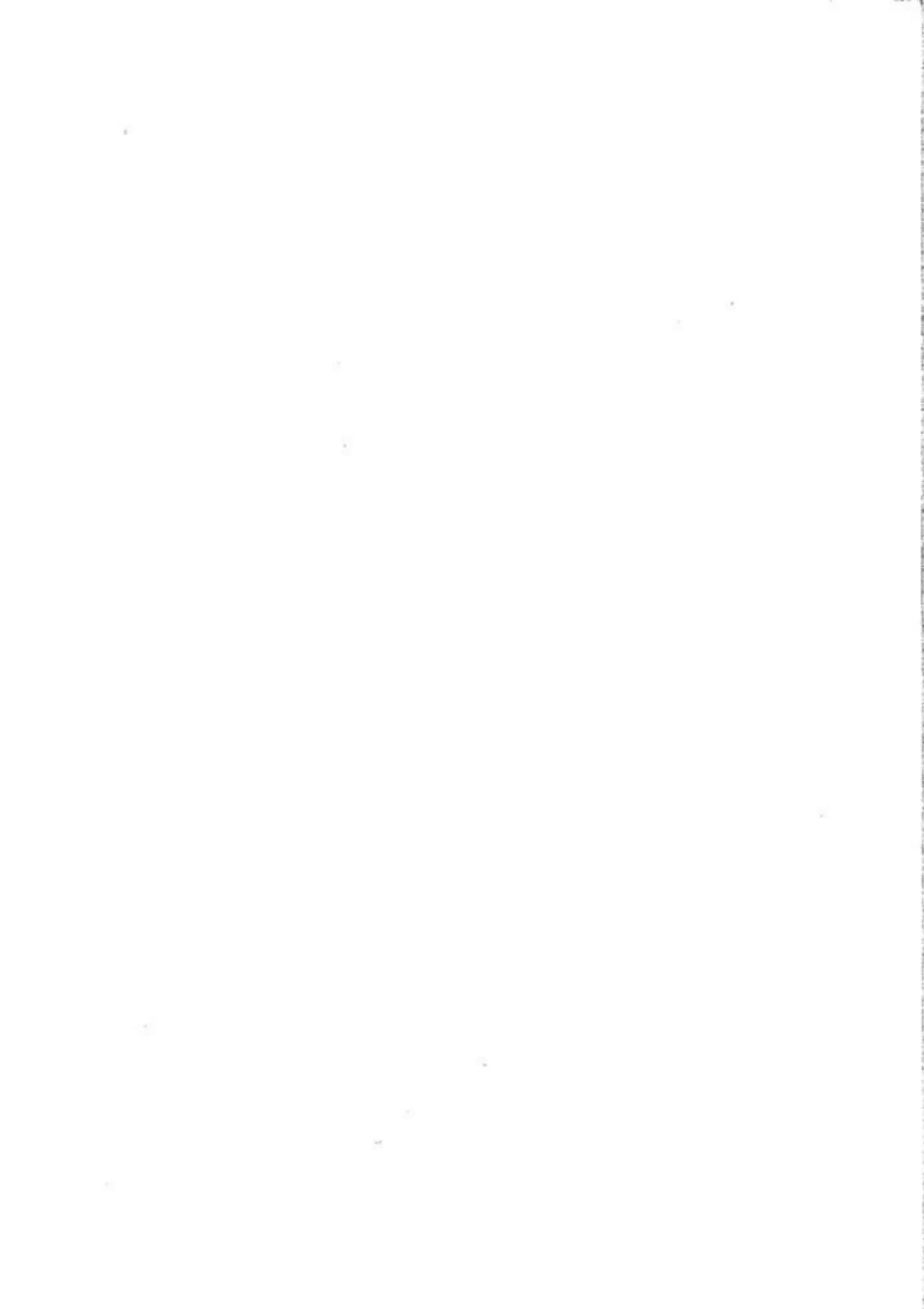


上，平根形鉄劍

中，両抉平根形鉄劍

下，槍





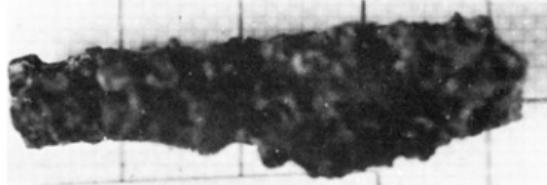
出土遺物 鐵器



上. 鹿角刀子銛骨→

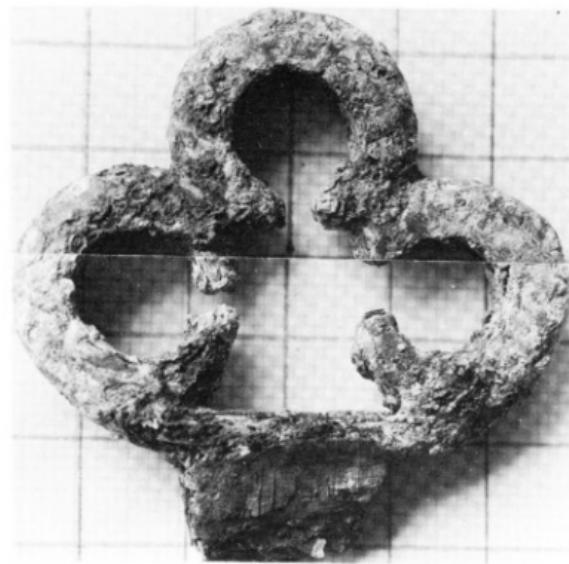


下. 刀子片

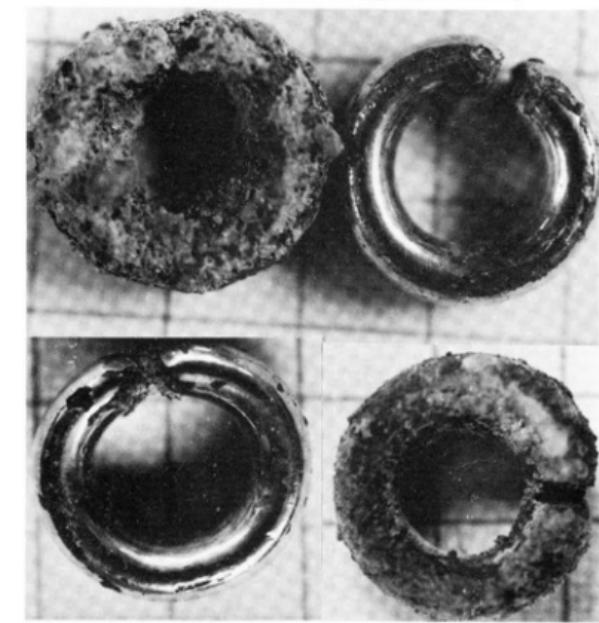


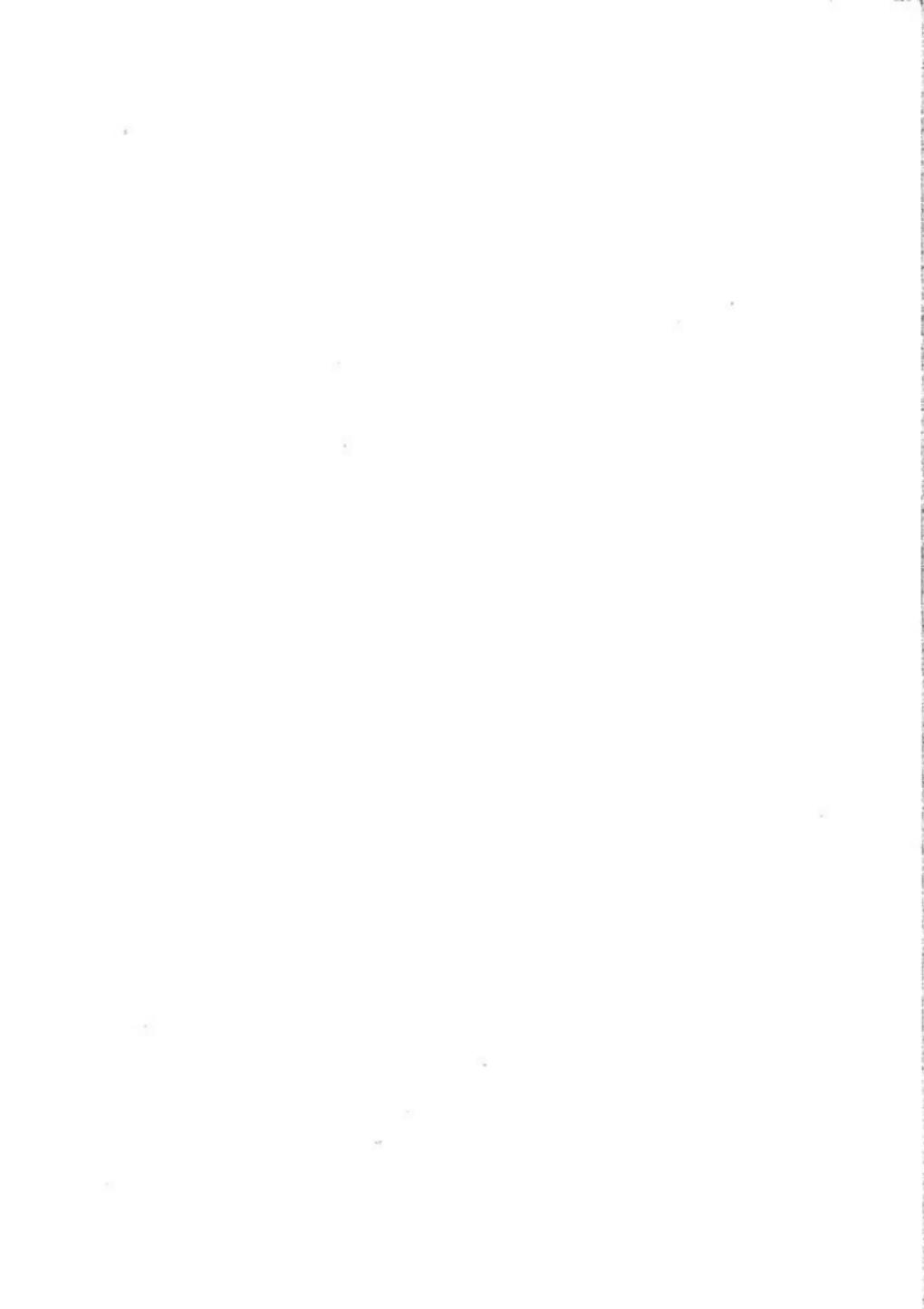


三黑環頭



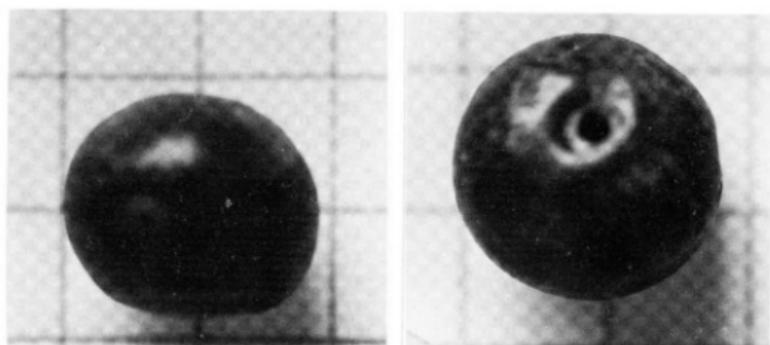
耳 環



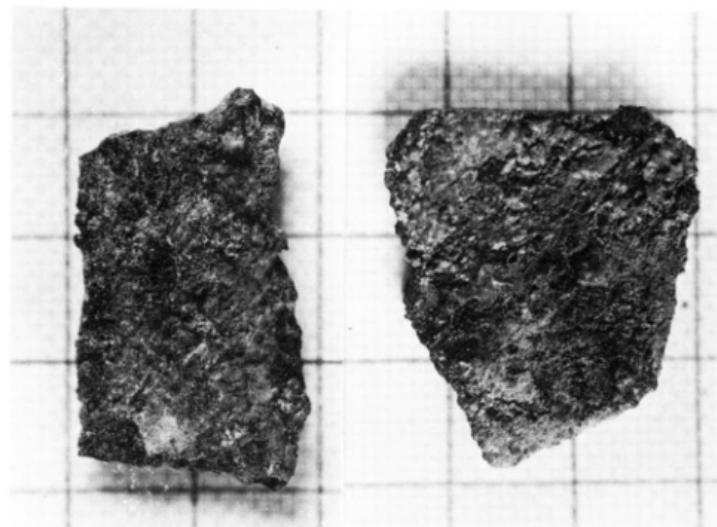


出土遺物

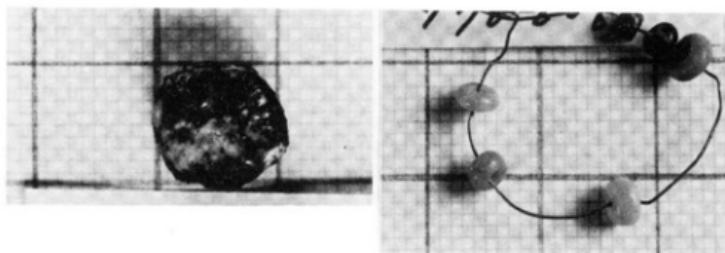
ガラス丸玉
→

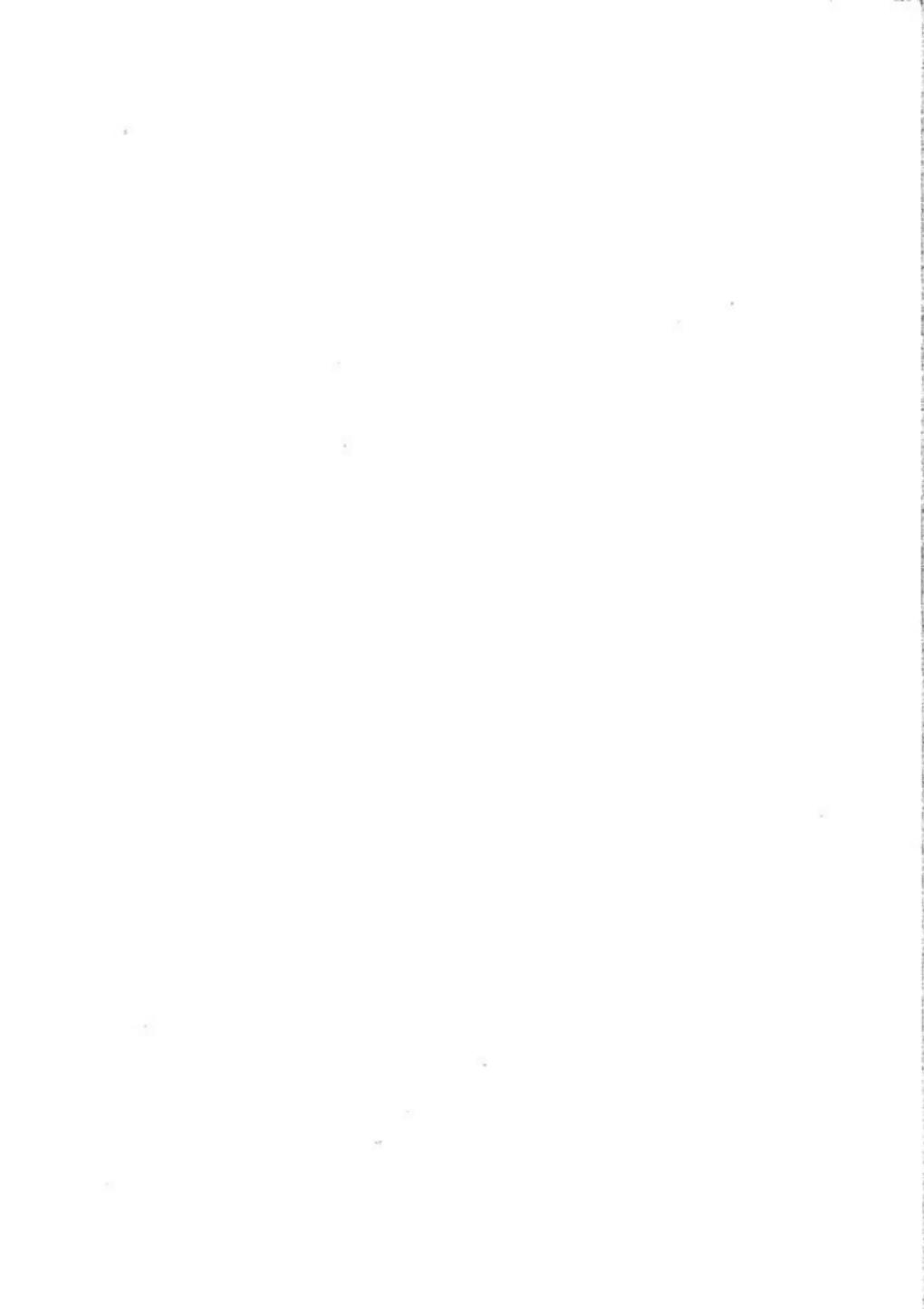


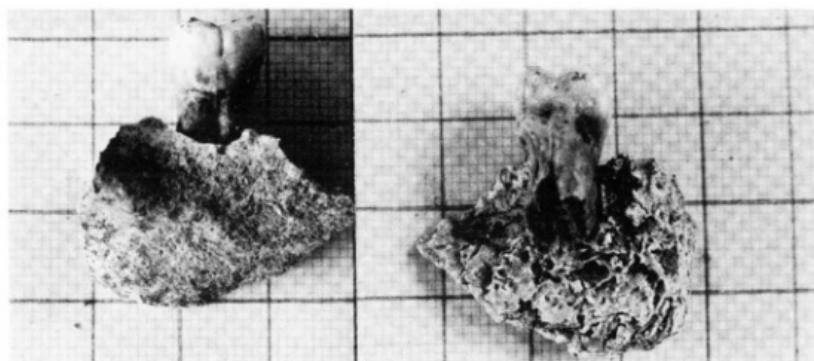
鉄器片
→



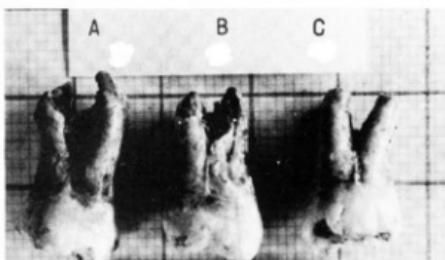
歯牙・ガラス玉
→

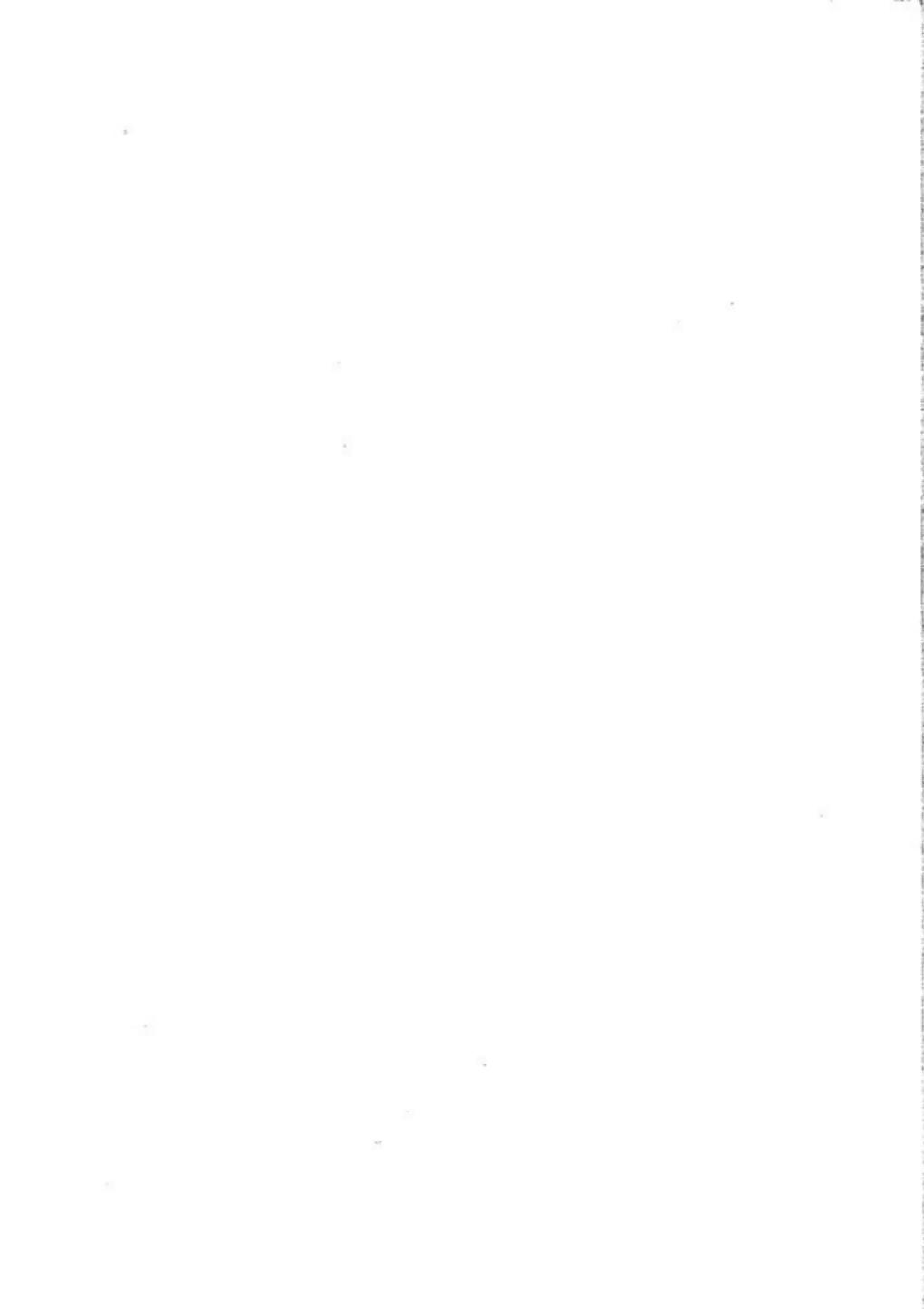






1号墳出土の歯牙



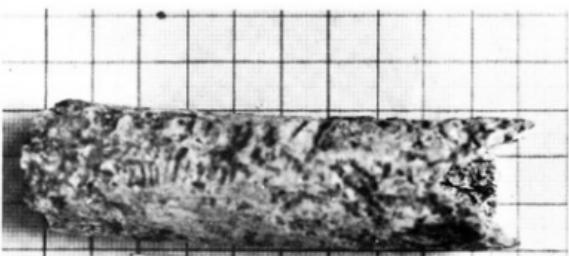


出土遺物

上. 齒 牙



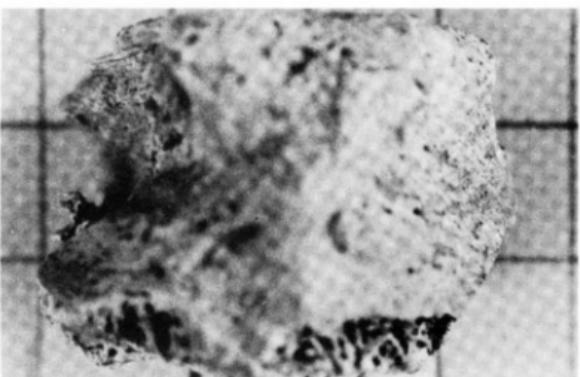
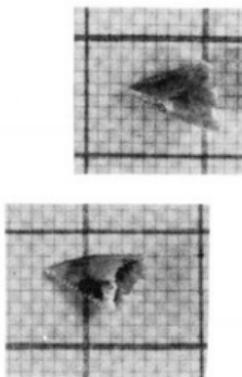
中. 骨 片 (不明)



下. 骨 片 (頭骨)

小動物の骨片 (不明)

↓





遺構 1

1号墳の残石状況

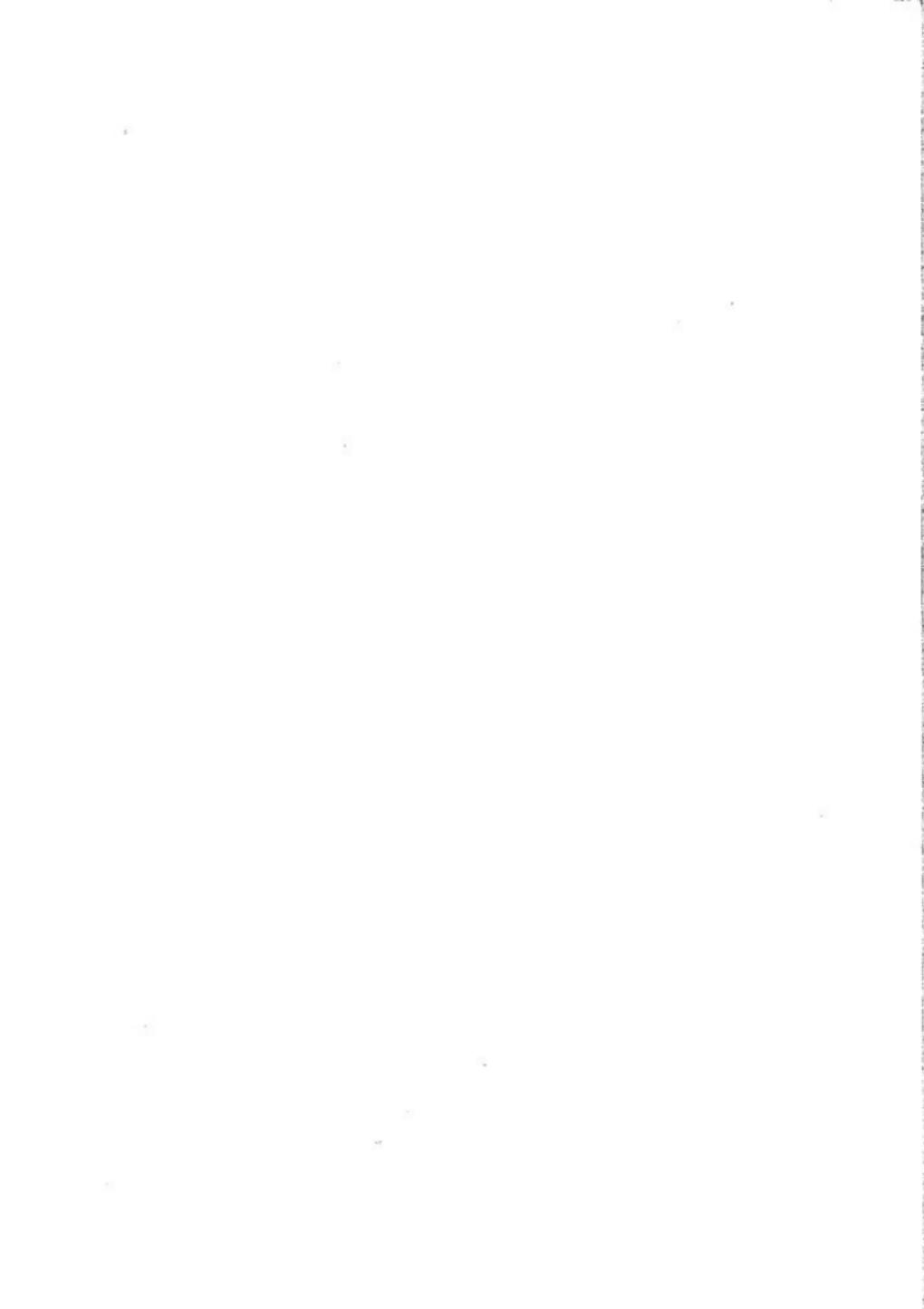


床面と根石の搅乱状況



骨片の出土





図版26

遺構2

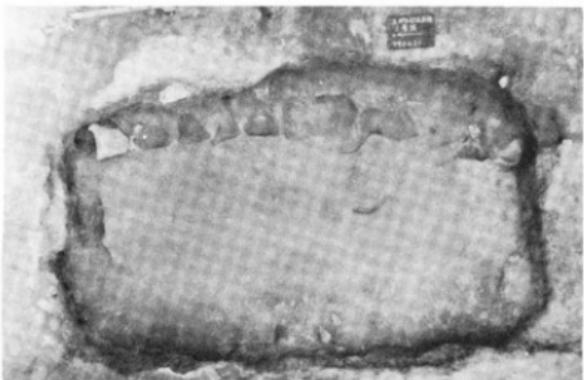
1号墳
玉石と石室プラン

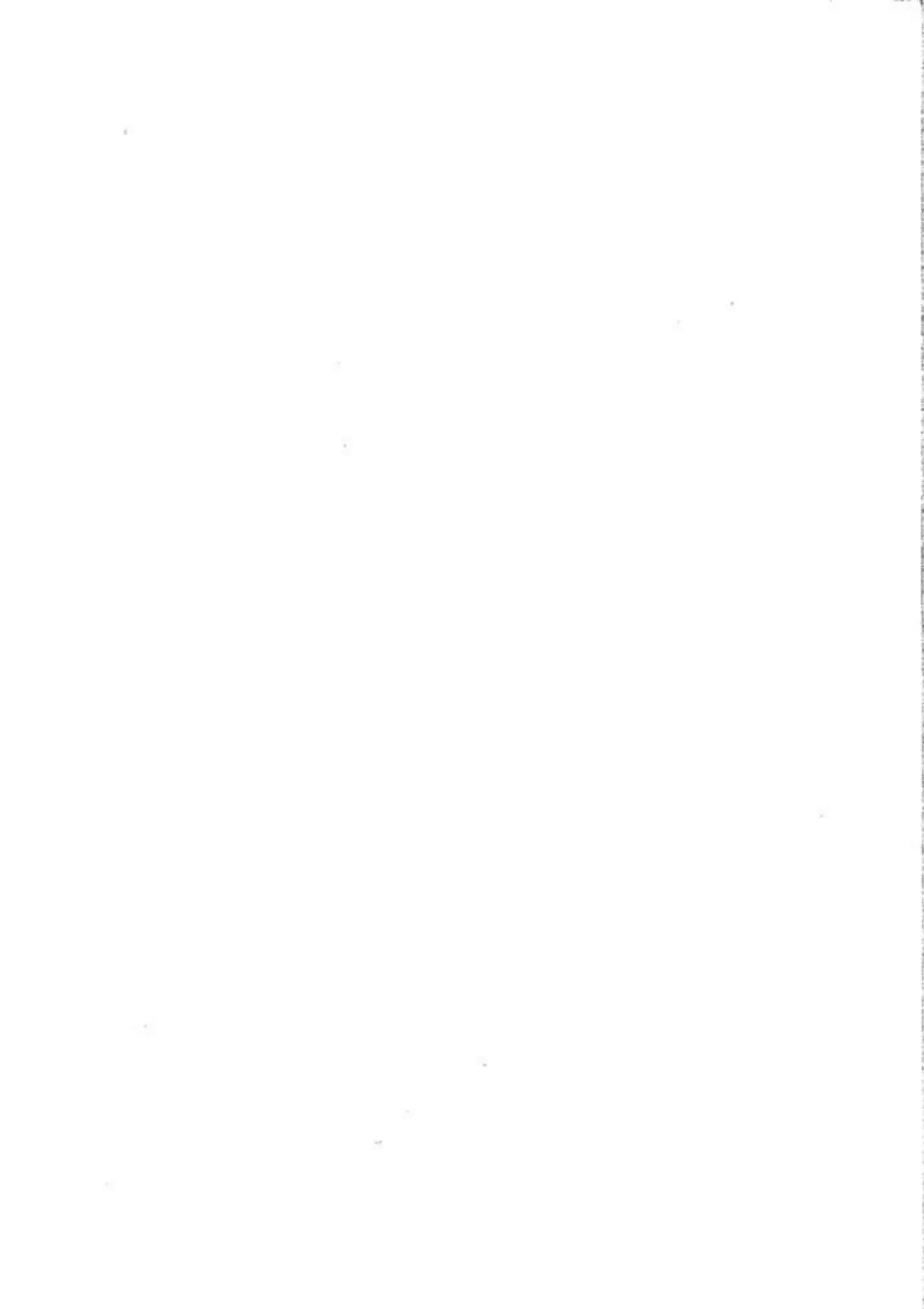


根石の抜取穴と床面



石室プラン





図版27

這構 3

1号墳南面の溝→

溝内の配石



中右は、北面の溝

下、中右図における
埴輪出土状況

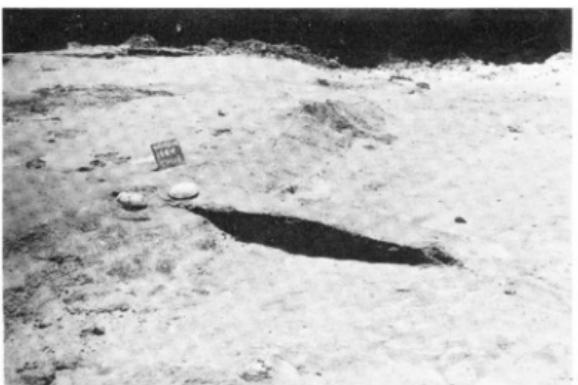




1号墳南面の溝完掘状況



中。3号墳における出土遺物



2号墳に検出された掘立柱建
物址

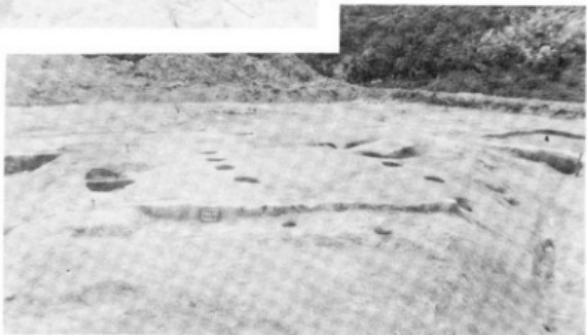




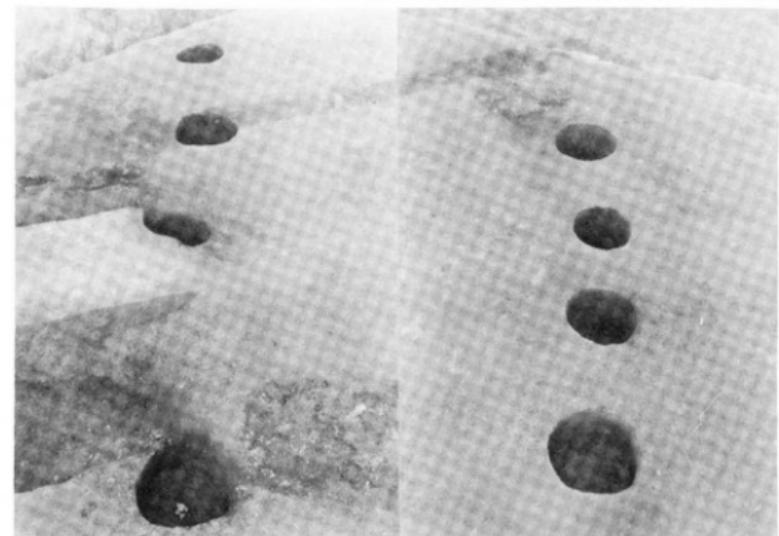
遺構5



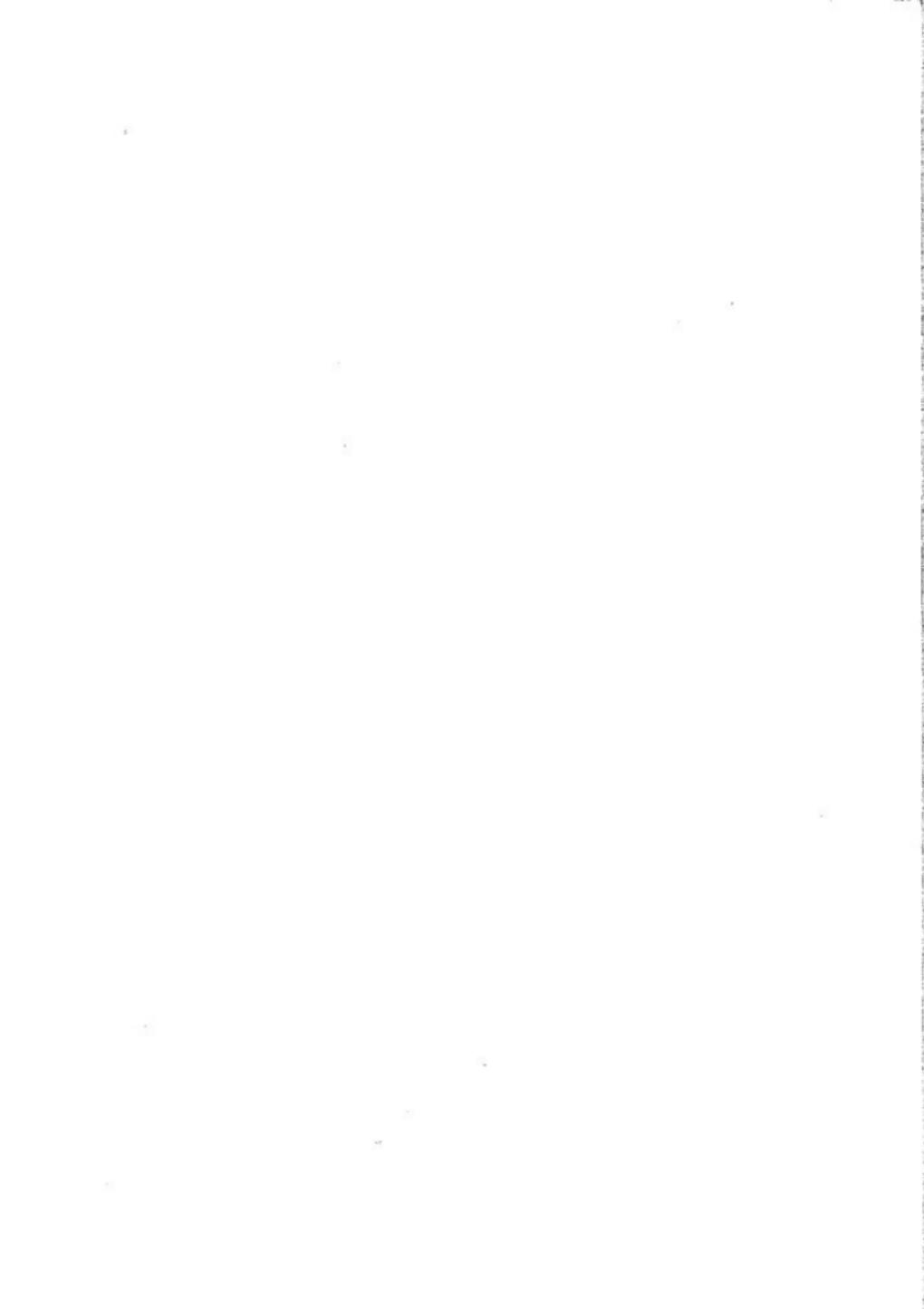
1号墳と据立柱建物址との位置



中・下は建物址の状況図



下は合成図版



遺構 6

4号墳の残石出土状況

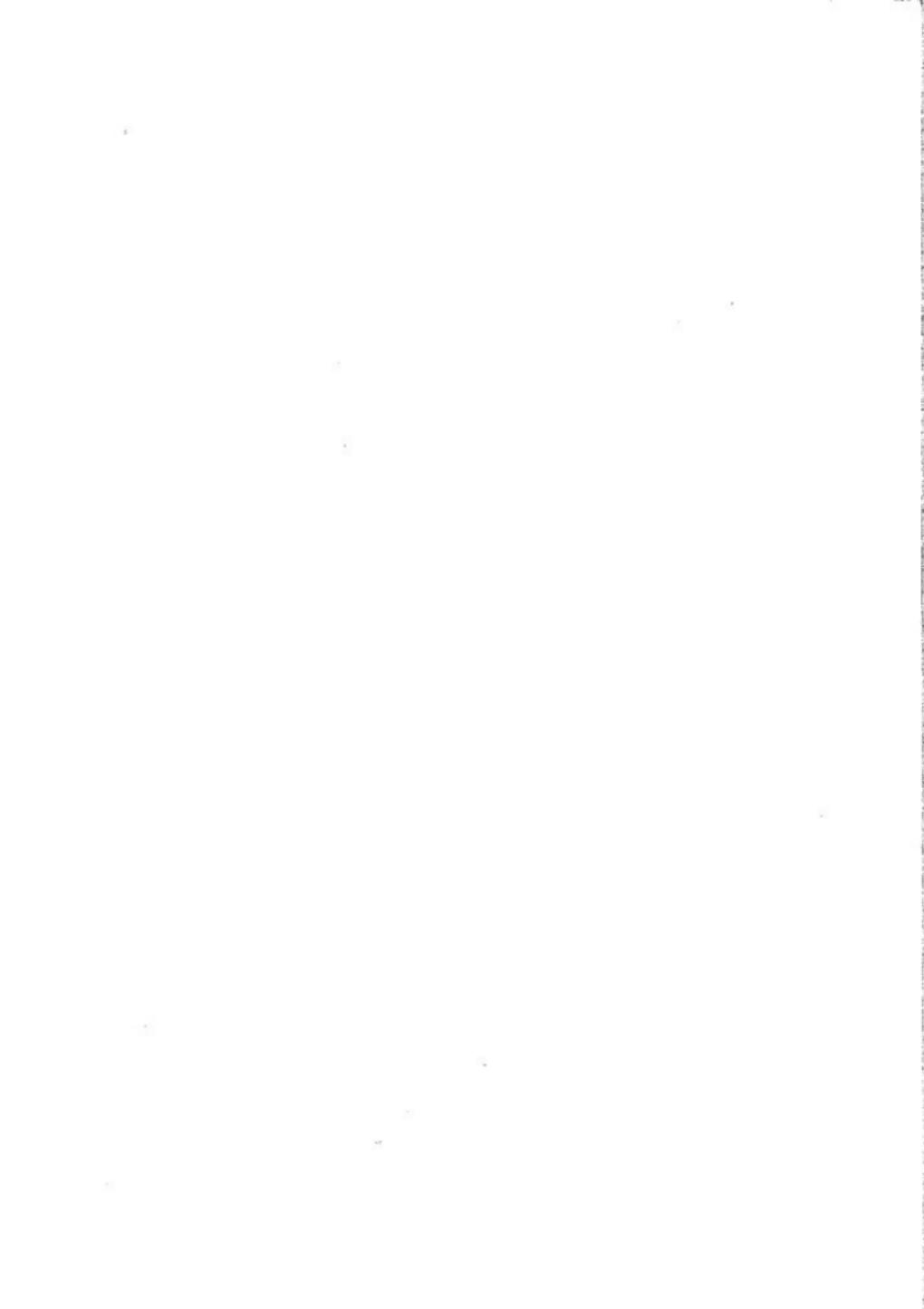


同墳の床面奥壁部の
擾乱状況



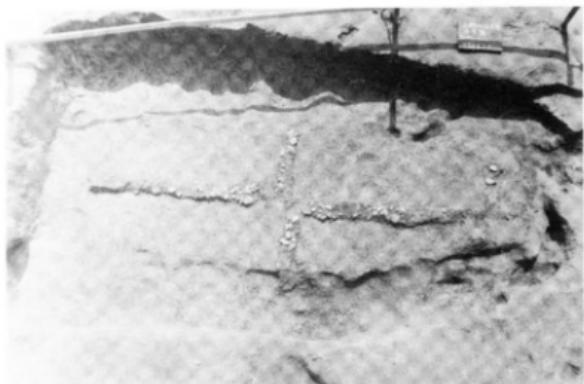
同墳の根石の配石状況
(抜取穴)







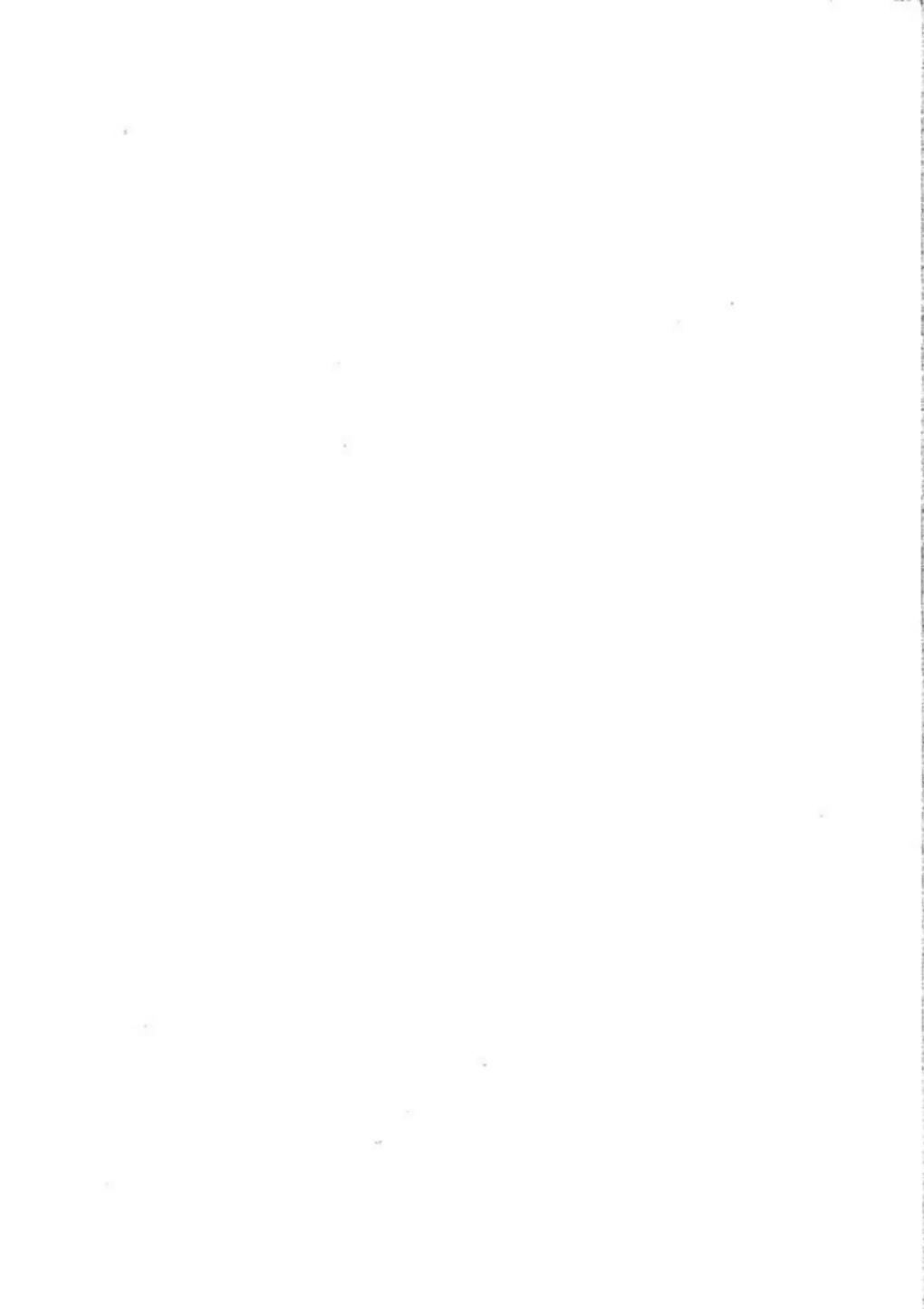
上、右は北より
左は南より



中、地山の掘り込み状況と石室プラン



下、獨立柱建物址と4号墳

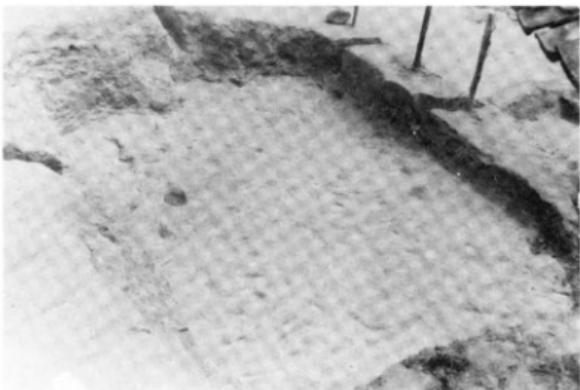


遺構 8

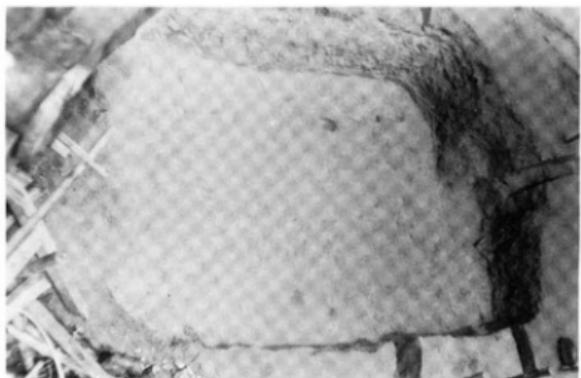
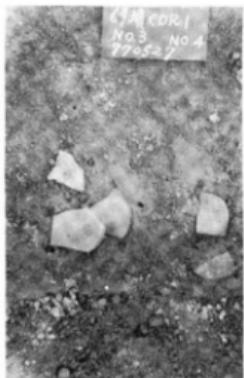
墳丘の擾乱状況

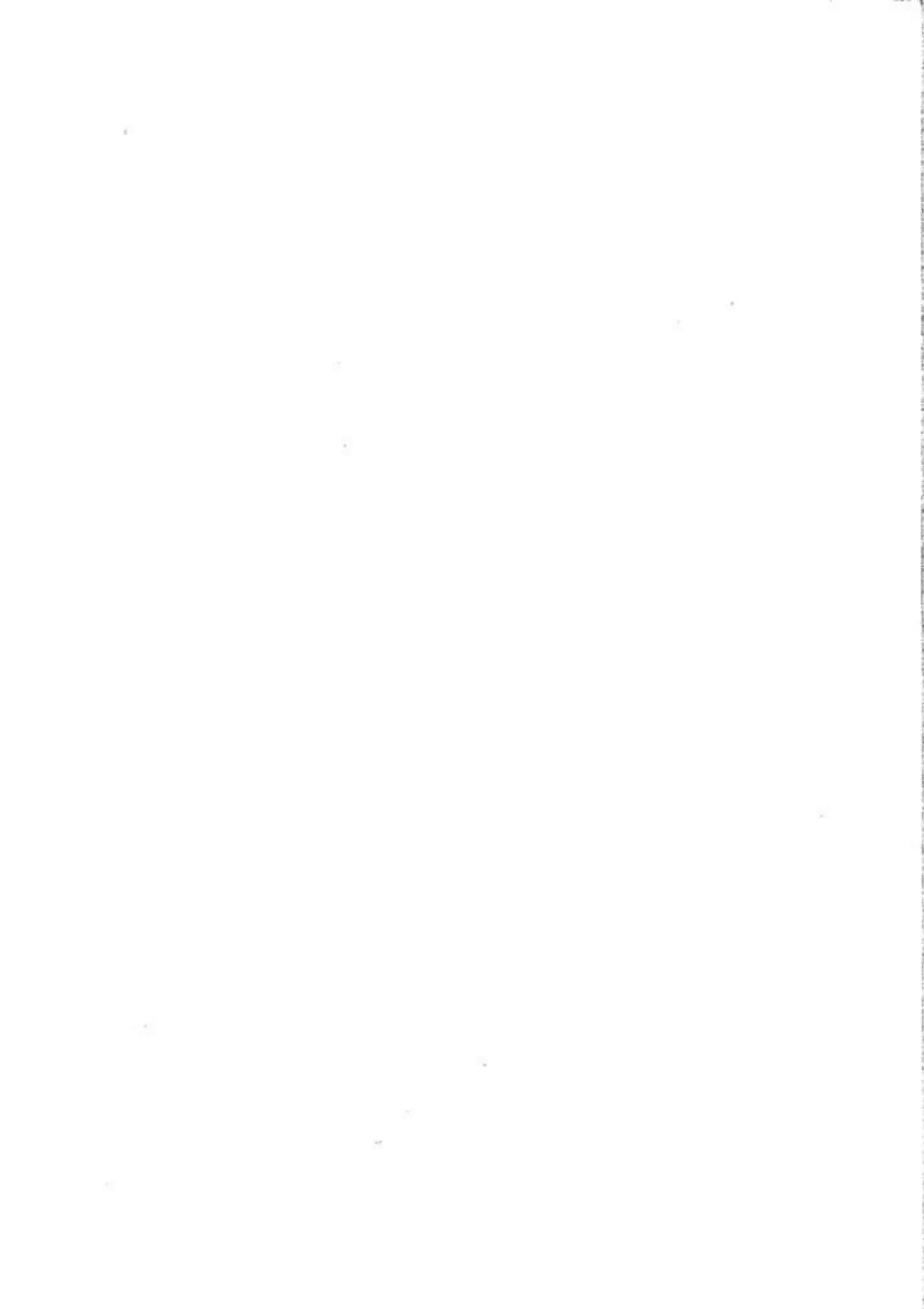


石室内のプランと掘り込み



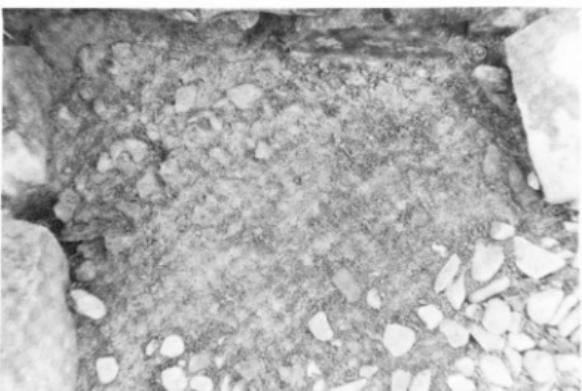
墳丘内での遺物



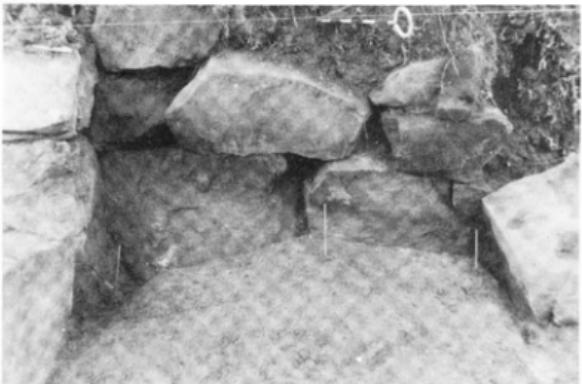


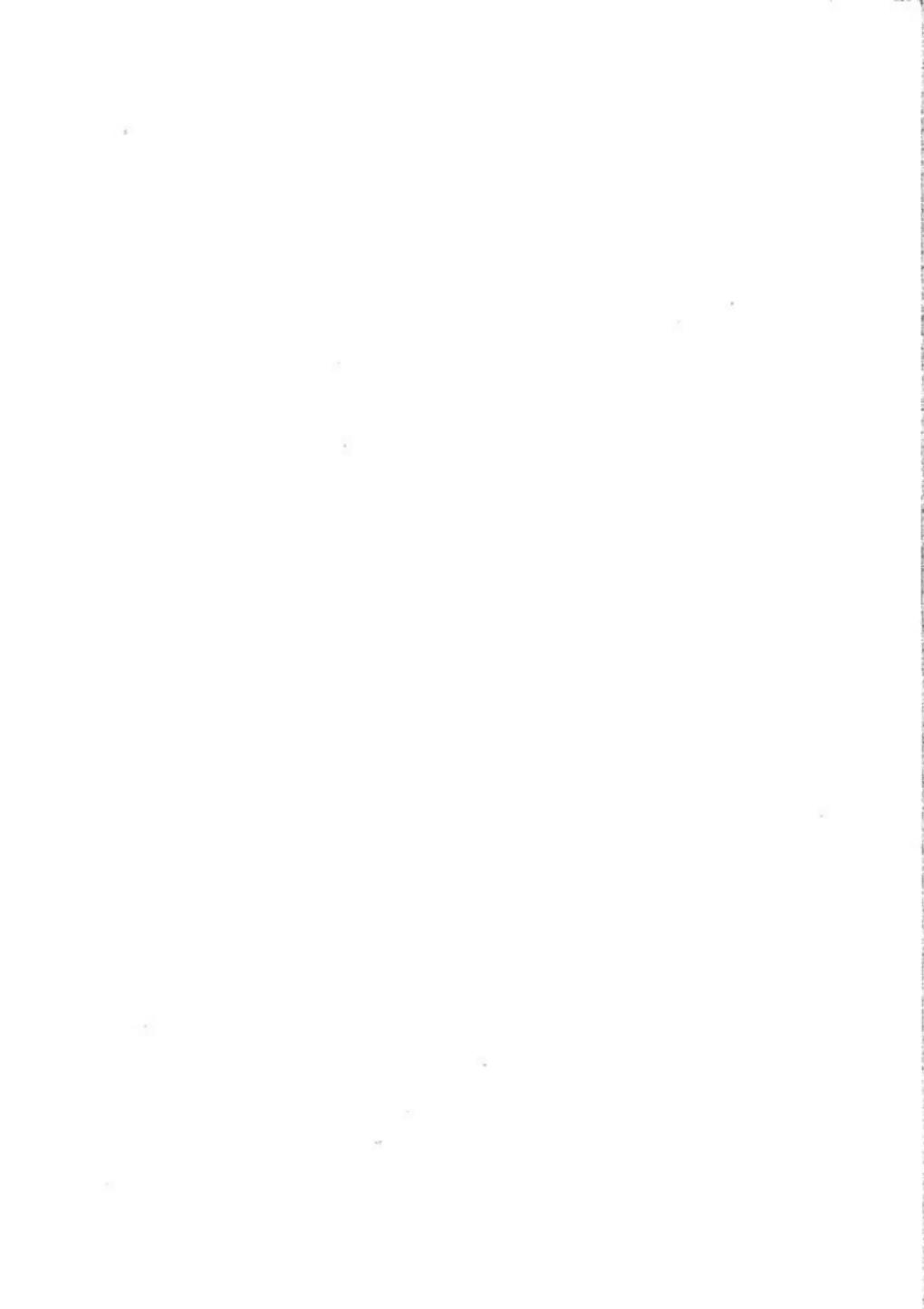
5号墳の現状→

遺物と玉石状況



1部残された奥壁部の石積
状況





松山市文化財調査報告書

1 三島神社古墳	昭和47年（絶版）
2 天山・桜谷古墳	昭和48年（〃）
3 長隆寺廃寺跡	昭和49年（〃）
4 古照遺跡	〃（〃）
5 笠ノ口遺跡	〃（〃）
6 かいなご・松ヶ谷古墳	昭和50年
7 国道バイパス概報	〃
8 岩子山古墳……（人物埴輪）	〃
9 御産所11号墳・勿那山古墳	昭和51年
10 古照遺跡II	〃
11 文京遺跡—弥生式土器縄文団付	〃
12 来住魔寺跡	昭和54年

松山市文化財調査報告書 第13集

五郎兵衛谷古墳

昭和54年3月31日発行

編集 松山市教育委員会
発行 松山市教育委員会
〒790 松山市一番町四丁目七番地
TEL (0899) 48-6520

印刷 有限会社 青葉図書
